
ええじゃないか

とりえなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ええじゃないか

【Nコード】

N5533D

【作者名】

とりえなし

【あらすじ】

地元で「変人達の巣窟」「無駄にハイスペック」などと呼ばれる北高での、変人や凡人が織り成す物語。一話完結で短い話が多いので、ちょっと読んで気分転換にでも使ってください。

ぶろろーぐ

「ここが今日から俺達が通う豊橋北高 通称北高だ」
隣で腐れ縁の友人がそう言った。

「この学校は県でも五指に入る進学校だと言われているが、それは世を忍ぶ仮の姿。その実態

は変人達の巢窟であり、入学した数少ない常識人もその毒牙にかかり、卒業するころにはとて

も平凡とはかけ離れたものになるという恐ろしい場所だ。俺たちの使命はこの場所で生き残り、あわよくば中から変革することだ。いいな？」

「いいわけがあるかこの馬鹿野郎」

「何が不満なんだ？」

「すべてにおいてだ。そもそもお前は明らかに変人側だ」

「ええっ！！おれほどまともなのはそういないだろ！！」

「普通の人間は高校入学前からエロゲーはやらん」

「ええっ！！」

「それすら驚くのか！？」

これは、変人や凡人が織り成す、日常の物語である。

第一話 入学

北高の設立は百年以上前で藩校の流れをくむ由緒正しい学校らしい。

北高の敷地面積は公立校では二番目に広いらしい。

北高は数々の有名人（直木賞作家やスポーツ選手）を輩出しているらしい。

これらはすべて校長が入学式で話していたことである。無駄にすごいことはよくわかった。

入学式も終わりクラスが発表されると、腐れ縁の友人、杉田義人と同じクラスだった。

「よし、旦那も同じクラスだな」

「何がいいのか知らんがまたお前と同じクラスか。何か憑いてるんじゃないか？」

小、中学校通算ではこれで七回目である。しかしよくいえば社交的な義人がいるのは内向的な俺からすれば好都合だった。悪く言えばでしゃばりでうっとうしいことでもあるのだが。

クラスに行くとき黒板に「全員そろったら自己紹介を開始してください」と書いてあった。俺たちが最後だったらしく、名簿の一番から自己紹介と質問が始まった。やはりと言うべきか濃い人が多かった。

「趣味は読書とビデオ観賞だ。よろしく」

「具体的には？」

「最近のヒットはくはぴ すゝやくダ・カー エエ>だ」

エロゲーをノベル化したやつじゃねえか。知ってる俺（義人経由）もどうかと思うが。しかも聞いたとたん同類を見つけたように喜々としているやつが十人（うち数名は女子）はいるぞ。大丈夫かこの学校。

く例2く

「勉強量が高校では増えそうなので自由時間がとれるか心配です。一年間どうぞよろしくお願いします」

おお。どうやらまともそうだ。

「勉強時間どれくらい取ってる？」

「一日三時間くらいですね。」

すごいな。おれなんて受験後は宿題（進学校だけあって入学説明会で渡された）を一日一時間やるだけでつかれてたのだが。

「ほかの時間は何してんの？」

「数学です」

数学は勉強じゃないのか！？

く例3く

「部活中心でがんばろうと思ってる。中学で水泳部だった人がいたら一緒に入ろうぜ！」

ふむ。俺も中学では水泳部だったし入る人がいるなら続けるか。

「種目は何でどれくらいの成績ですかー？」

だれかが俺が聞きたい事を聞いてくれていた。グッジョブ、だれ

か。

「二百のフリーで二分二秒くらいだな」

ふーん……って二分二秒！？全国レベルじゃねえか！

「去年は全国大会に出たんだ。水泳部に入って全国を目指そうぜ！」
名前を聞いたら去年の県大会の最優秀選手だった。……文武両道か、うらやましい。

この後もやれ全国レベルのピアニストだの、ラグビーの県代表だの、能力が異常な人たちがかなりいた。もしかして凡人なのは俺だけではないかとショックを受けながら、自己紹介が終わるのを聞いていると、終了と同時に教師が入ってきた。おもむろに教壇に立ったので自己紹介をするのだろうと重い、姿勢をただすと、その教師はこうのたまった。

「担任の山本です。私が担任とはあなたたちもついていませんねえ。まあ私のことは徐々にわかるでしょう。明日からの予定のプリントが前にあるので取ったらとっとと帰ってください。解散。」

それだけ言つとその教師は帰って行った。実に十五秒。どうやら変なのは生徒だけではないらしい。

「な、この学校おかしいだろ？」

義人がそうにやにやしなから言つのを聞きながら、俺は思わずつぶやいていた。

「何なんだ、この学校……？」

第一話 入学（後書き）

初小説です。少しづつ書いていこうと思ってるので、よければ感想ください。

第二話 登校と問題

「徳川幕府第三代將軍は？」

「それは家光だろ」

「正解」

始業式の翌日、つまり今日は実力テストがある。俺と義人は家が近いので、小、中学校時代と同様、一緒に登校することにした。自転車登校になったが、「話しながら登校したほうが楽しいだろ？俺が寝坊したら起こしてくれれば一石二鳥だ。反対はないな？よし決定。イエーイ！！」という義人の一人採決で、なし崩し的に決まった。義人の両親は共働きで朝は早いし、俺も寝坊癖のある馬鹿が気にはかかっていたのでまあ問題はないのだが。

そうしてやはり朝寝坊していた馬鹿をたたき起こして準備させ、テストのために問題でも出し合おうということになった。俺は文系科目、義人は理系科目が得意である。

「よし、次は国語の慣用句でもやるか」

「どんどん来いやー！！」

朝起きてから余りたってないのに、やたらとハイテンションなやつだ。

「気難しい人を心配して扱うのを何に触るようという？」

「くプルトニウムに触るよう>」

確かに危険だが。

「腫れ物だ。次いくぞ。危険な場面に臨む様子を何を踏むという？」

「<地雷を踏む>」

「踏んだ時点でアウトだろ」

「馬鹿だなー。地雷には踏んでから足を離すまで爆発しないのがあるんだよ」

そうなのか…、違う、問題はそこじゃない。そもそも間違えたやつになぜ馬鹿といわれてるんだ、俺。

「正解は薄氷。次。恥ずかしさで人前に出ることができない様子を何ができないという？」

「＜一人で靴ひもを結ぶことができない＞」

それは人前に出られんな。

「＜顔向けができない＞だ。もういいから義人が問題出せよ。」

「じゃあ化学な。AgClは？」

「……アンゴルモアとクリントン？」

「お前ほんと化学駄目だな……」

国語が駄目なお前に言われたくない。

テストは俺が化学、義人が国語でほぼ最下位だったものの、得意科目がよかったおかげで二人とも中間くらいだった。この学校に入るだけあって、俺たちの総合力は結構高いのである。

「次回から科目ごとに追試があるってよ」

「…まじか…」

これから一年間、それぞれの苦手科目で追試の常連となるのだが、それはまだ先のことである。

第三話 教師たち

実力テストも終わり、ついに高校の授業が始まる。北高は授業が六十分で一時間で、国語は現代文と古文、数学は数学Ⅰ、Ⅱと数学A、Bというように、教科でも科目ごとに教師が違つそつだ。記念すべき初授業は古典らしい。

「ぐつもーにんえぶりわん」

……繰り返すが、古典らしい。

一限 古典

「ぐつもーにんえぶりわん。一年間古典を教える、担任の山本健三です」

そういえば、担任なのに三日目になるまでフルネームを言つてなかったな、この人。朝と帰りに連絡事項を伝えただけで。

「将来私立大学の理系に進む人には、古典がいない人もいるでしょう。その人はテキストにしてていいです」

おい。

「まあ、テストで追試があるので一夜漬けでも何でもしてください。成績もテストでつけるので、点を取れる人は寝てくださいって結構です」

それでいいのか高校教師。

「ただ授業妨害だけはしないでください。した人はあることないこと吹き込んで停学にするかもしれません」

無表情に恐ろしいこといつてるな、この人。

「蟹座です」

その情報に意味はあるのだろうか。

「教科書の五ページを開いてください。この文章は千百年ごろに…

…」

唐突に授業が始まった。教え方は上手かった。

二限 数学Ⅰ

「いいかー、公式は覚えるだけじゃ駄目だ、意味をしっかりと確認して……」

数学Ⅰの先生は佐藤先生という早口の先生だった。少し頭髪が残念だ。

「根本的に……」

「加速度的に……」

「なあ旦那、たまに入る言葉の意味がわからんのだが」
気にするな。俺もだ。

三限 リーダー 英語R

「しょうでしゅねー、これはー、」

この先生滑舌悪いな。

「To my surprise I've gradually become more motivated……でしゅねー」
何で英語になった途端滑らかになるんだ。

昼休み

「その春巻きもらったー!!」

「うるさい」

「ぐはあっ!」

四限 日本史

「つまり、日本史上最大の人物は石原莞爾であり、彼は日本の将来をほぼ完全に予言するという卓越した頭脳を持っており……」
マイナーな人物をそんなに熱心に語られても。俺は石原莞爾（世界最終戦争論を唱えた軍人）好きだが。

五限 化学

教師は不思議な呪文を唱えた。俺は睡魔を誘われた。俺は寝た。

「おい旦那。現実逃避するな」

何も聞こえない何も聞こえない何も聞こえない。

「そんなに嫌わなくても……」

うるさい。化学なんて人間のやることじゃない。

授業後。

「教師も濃いな……」

「なんか俺も疲れたよ……」

これが毎日あるのか……。三年間俺の自我はもつのだろうか……。

第四話 部活

「旦那、部活見に行くぞ!」

「声がでかい。まあいい、行くか」

というわけで、俺たちは部活を見に行くことにした。

「でも、プールってどこにあるんだ?」

俺たちが入学してから三日が過ぎたが、プールを見かけた記憶がない。

「屋上にでもあるのか?」

「いや、この校舎二階までの階段しかないぞ」

「なら敷地が広いからどこにあるかわからんな……」

この学校は無駄に広く、一、二、三年の校舎、職員室や図書室のある校舎、火を扱う家庭課室や実験室のある校舎、視聴覚室など電気を使う校舎と校舎だけで六棟ある。それに加え体育館や購買、グラウンドが二つに変な森まであるのだから驚きだ。

「適当に探すか? 迷子になるかもしれないが」

「健三さんたんにんにでも聞くんか」

職員室に行つて聞くと、

「あつちです」

と言つて指さした。その方向には別の教室しか見えない。

「……あの、具体的には……?」

「あつちです」

「教室しか見えないんですけど……」

「あつちです」

「もういいです。ありがとうございました」

職員室をはなれて義人と相談した。

「あれじゃ場所がわからんが……どうする?」

「とりあえずその方向に歩いてみるか」

そうして障害物をかわしながら歩くこと十分弱。

「ようやく見つかった……」

この十分は道に迷ったのではなく、単純に距離がそれくらいだったのである。遠っ！そして広っ！！

意を決して入ると、すでに先輩が五人、一年が四人いた。

「あれ、三井も水泳部？」

三井は俺の名字である。三井 財閥ということで義人は旦那と呼んでいる。俺と三井財閥は全く関係ないのだが。

「浜口と石井もか」

この二人は同じクラスである。浜口は例の全国レベルの自由形、石井は県大会に出場したバタフライ^{バッタ}ということだった。義人も俺もバタフライだが、義人も県大会に出場しているので、俺だけが地区大会レベルだった。……俺だって地区の新人戦では二位だったのだが……、ほんとにレベル高いな、この学校。

数日後、先生に登録用紙を出しにいった。……頭にヤのつく自由業の方にしか見えない、筋骨隆々とした体育教師が顧問だった。

……キャラの濃い人はもう勘弁してください……。

第五話 ゲーム談話

昼休み、俺と義人と石井（なんか義人とは過去に大会で会って旧知の間柄らしい）は昼食を食べながらゲーム談義をしていた。

「やはり64で最高のゲームはゴエモンだな」

「ネオ桃山幕府のやつか」

「ああ、おれもやったなー、＜プラズマ親爺＞が最高だよなー」

＜プラズマ親爺＞とはこのゲーム中における予言者のようなものである。「ぶうらずうまああー！！！」と叫びながら予言する姿は壮絶で、俺の数あるトラウマの一つとなっている。

しかしこのゲーム自体はとてもおもしろい。

「＜プラズマ親爺＞はともかく、確かにあのゲームはいいな」

「うむ。なんといつてもゲーム中の＜おれはインパクト＞が傑作だ」

＜おれはインパクト＞とは水木一郎（アニソン界の大御所）が歌っている、「ダダッダーシュ！！」のイントロから始まるゲーム中の曲である。俺にはイロモノにしか聞こえなかったが。

「……お前らはそういう変なところにしか感想がもてんのか」

「変なところー？」

「何が」

……二人とも感性が俺とは違うらしい。もしかして俺がおかしいのだろうか？

「ならプレステでは何が名作だ？」

「FF7かなー」

「三国無双3だな」

「理由は？」

「ティファがかわいいからかなー」

「孫尚香が萌えるからだな」

……やはりこいつらが変なんだな。己の欲望に忠実なのはある意味尊敬できるが。

「じゃあ旦那は何が名作だと思う？」

「パワプロ9だな」

これは間違いなくおもしろい。

「理由はー？」

「サクセスもいいしオープニングがいいからな」

おそらくパワプロの中でもトップクラスだろう。

「萌えるキャラは誰だ？」

「……俺がそれやってたの小学生の時だぞ」

そんな頃からそういう目でゲームやってたら嫌すぎる。

「えー、そういうのって普通だと思うけどー」

「そうだよなあ」

「三井って変だねー」

「ああ、俺もよくそう思う」

……俺って、変なのだろうか……？そう考えたら負けだと思いつつ、少し自分が変ではないかと考えてしまふのだった。

「ちなみに、PCゲームでは？」

「君ある、かなー」

「ふむ、俺はH2Oだな」

……学校で話してるくらいだから、18禁じゃないゲームだよな
……？頼むから教師に指導されるような内容を堂々と話して捕まる
なよ……？

第五話 ゲーム談話（後書き）

作者の趣味出まくりです。ただ、18禁ゲームはしてないです。
…
…本当ですよ？

第六話 読書感想文

「私、読書感想文っていらなと思うんですよ」

古典の授業中、健三さん（担任）は唐突にこう言いだした。

「本なんて所詮娯楽なんですから。でも藤田先生がやると言ってるので提出はしてください」

藤田先生とはうちのクラスの現代文の先生である。

「私が現代文を受け持っているクラスは適当に」

適当というのとどれくらいなのだろうか。

「一行でも書いてあればいいといっただけなんです」

おい。

「むしろ短いほうが楽でいいんですけどね」

問題ありすぎだろ。

「かつて凄い量を書いてきた生徒がいるんですがね」

やる気があっていいと思うが。

「そんな人でも点数は同じです」

この人に生徒を教育する気はあるのだろうか。

「むしろ点数下げたかったんですけどね。面倒でしたし」

生徒たちに本音を言うなよ。

「そんなわけで私の現代文のクラスは出すか出さないかの二者択一です」

100点か0点の二択か。極端な。

「でも藤田先生はしっかり読んで採点するので頑張ってください」

それだけ言っておいて俺たちにはしっかり書かせるのか。

「センサー、なら藤田先生に言っただけで感想文やめにしてくださいよ」

おお、誰かが意見した。がんばれ。

「いやですよ。そんな面倒なこと」

この人に生徒への愛はあるのか。

「そこを何とか……」

「授業を終わります」
無視した。

結局俺たちのクラスは原稿用紙五枚分しっかり書かされた。
……
理不尽だ。

第七話 体育とソフト

我が北高では体育の種目が選択制である。五月には体力テスト、夏になれば水泳が合同であるが、それ以外では一、二、三学期で一種目づつ選択して、それぞれの種目にわかれてやるらしい。一学期は義人と石井はバスケ（二人ともミニバス出身）、俺はソフトボールにした。

そして種目にわかれての第一回。俺は知らない奴にからまれていた。

「なー、三井って室ファイターズのキャプテンだったよな？」

「……誰？」

「ひでーなー、同じクラスの清水だよ。ほら、羽田ドルフィンスのエースだった」

ファイターズは俺がキャプテンだった、地区で一、二を争う弱小ソフトボールチーム、羽田ドルフィンスは地区で一、二を争う強豪チームだったはずである。

「……あの強いチームか」

「まあな、」

謙遜しないのか。

「俺がいたからな」

どうやらかなりの自信家らしい。

「……どうして俺のことを知ってるんだ？」

チーム力の差は月とスッポンで縁なんてなかったはずだが。ついでに言う俺の小学校時代はトラウマの宝庫で思い出さくないのだが。

「ほら、監督同士仲良かったろ。それでうちと一回対戦しただろ？」
そういえばそんなこともあったな。三回でコールド（点差は二十点以上）になったことが。その後キャプテンだから責任取れと言われて走って帰らされたことも思い出したよ。わざわざトラウマを思

い出させてくれてありがとう。

「あんどきサードに強襲ヒット打っただろ」

そんなこと俺の記憶にはないが。道に迷って帰るのが真夜中になったことは記憶にあるが。

「それで覚えてたんだよ。俺からヒット打つなんてただものじゃないってな」

……どれだけ自信家なんだこいつは。記憶力というか執念がすごいな。

「だから今日勝負するぞ」

「……好きにすればいい」

トラウマを思い出して鬱になったら運動する前なのに疲れた。汗まで出てきたよ。目から。

結局清水は野球部の打者も含めて無得点（四球はノーカンというルール）に抑えてた。ソフト経験者とか野球経験者が異様に多い（皆身体能力が異常）ので守備が良いのもあるが、球が速い。球というかむしろ弾だった。……俺は全打席三振だった。小学校時代の俺、どうやって打ったんだろうか……。謎だ。

第八話 部員と顧問

「くらえー!」

「くらうかー!」

「死ねー!!」

「死んでたまるかー!!」

こんな物騒な会話がなされているのは、別に学級崩壊が進んでいるからではない。水泳部の親睦を深めるために行われているドッジボールでの声である。高校生にもなって、ドッジなんかになんかにそんなに熱中するなという声が聞こえてきそうだが、全力で無視する。

「あと一人!」

「三井やれー!」

あと一人、松田（平泳ぎで県大会入賞の一年）が残っているが、俺の敵ではない。下半身に狙いを定め投げた球は見事に松田をとらえた。

「うわー、やられたよ」

「三井やるな」

「というか性格変わりすぎだろ」

「確かに」

「すげー笑ってたしな」

「修羅だな、修羅」

田村（個人メドレーで県大会出場、一年）や片山（背泳ぎで東海大会出場、一年）が話しかけてきた。

「……そんなに変わってたか？」

俺としてはいつも同じようにしているのだが。

「ああ。ドラゴンボールの作風の変化くらい変わったな」

……冒険ものからバトルものになるほどの変化か……。今度から自重しよう。

「それにしても部のメンバー凄いよな」

北高水泳部は三年四人、二年三人、一年九人で構成されているが、中、高含めて県大会に出場したことがあるのが大半である。特に今年の一年は中学時代、県で入賞したのが四人である。……俺は県にも出ていないのに……。

「小倉さん（顧問）が張り切ってるし、今年も練習厳しくなるぞ」

川本先輩（自由形で県大会に出場、三年）がそう教えてくれた。

「そんなに厳しいんですか、小倉さん」

「そうだな、自分にも他人にも厳しい」

「……五十過ぎてるのに凄いですもんね、筋肉……」

「生徒指導部長やってるくらいだしな」

「小倉さんは種目何だったんですか？」

「いや、あの人は高校球児だったらしい」

「へー、そうだったんですか」

などと話していたら、本人がやってきてこう告げた。

「明日から筋トレ始めるからな」

翌日部活に行くと、腕立て、腹筋、背筋、スクワットにチューブ引きと予想をはるかに超える量の筋トレをやらされた。

「そつえば、小倉さんは筋トレマニアなんだ」

「……そういう大切なことは俺たちが入部する前に言ってください

……」

第九話 油断

部室に行ったら、イタチがいた。学校の敷地内に森があるくらいだから、おそらくそこに住んでいるのが、水のあるプールにひかれて部室に迷い込んだのだろう。しかし今、そんなことは重要ではない。

「……なんて可愛いんだ……」

つぶらな瞳にふさふさした毛並みと、物凄く可愛い。天使だ、天使がここにいる……！

「……ほら、怖くないからこっちおいで……」

そう言って手を差し出すと、興味がわいたのか寄ってきて、抱くことができた。

「ああ、可愛いなあ、ふわふわしてるなあ、やわらかいなあ、お前は。いくつだ？何食って生きてるんだ？飼われてるわけじゃないよな？ほんといいなあ……」って石井何撮ってやがる！」

いつの間にか石井が来てビデオカメラをまわしていた。

「お前何してんだ！」

「見てわかるだろー、撮影だよー」

「何撮影してんだ！」

「可愛いものを見つけて悶えている三井ー」

「……なんでビデオなんて持ってたんだ！」

「部室に置いてあるやつだよー。さすがだよー、フォームチエック用のが備えられてあるんだからー。これが公立高校でもいい成果が残せる理由の一つだろうねー」

「……なるほど、さすが北高……じゃねえ！なんでそんなもんで撮ってたんだ！」

「脅迫よ……ゲフンゲフン、思い出として取っておこうと思ってー」

「今脅迫って言ったぞ！」

「……聞き違いだよー」

「今の間は何だ!？」

「じゃあ幻聴だよー」

「じゃあって何だ!?!しかも悪化してるじゃねえか!」

「何騒いでんだ、お前ら」

「なんだその動物?」

俺たちが話している間にほかの部員が集まってきた。するとイタチは、人が多くなって警戒したのか、暴れて逃げてしまった。ああ……。

「そうだ、石井は!？」

早くあのビデオをなんとかしなくては。

「石井ならもう帰ったぞ、用事があるらしい」

「俺も帰ります!」

「何言ってるんだ、筋トレやるぞ」

「ちよつと待っててください、急用が今できました!」

「今って何だよ。ほら、始めるぞ」

「うわああああああああ」

この日は結局、石井を捕まえることはできなかった。

そして翌日。

「大丈夫ー、とりあえず誰にも見せないからー。ビデオも消去して返したしー」

「……とりあえずという言葉に物凄く不安を感じるのだが……」

「いざというとき以外は使わないからー」

「……いつかそれを使って何をするつもりだよ……」

第十話 芭蕉

ある日の古典の授業中。

「私今日朝の占い（フジテレビ系列）最下位だったんですよ
そうですか。」

「普段と違うことをするといいそうです
ふむふむ。」

「というわけで今日は授業をやめて別のことをします」
この人は何を考えて生きているのだろう。

「有名な芭蕉の俳句に短句を加えて面白おかしくしてください」
面白おかしく？

「なお成績に加味します」
この人を教師にしておいていいのだろうか。

「三十秒以内に答えてください」
クイズ番組か。

「ではまず杉田。＜古池や 蛙飛びこむ 水の音＞」
義人か。何て答える？

「＜ああ間違えた 飛びこむ人だ（笑）＞」
事件だ！しかも笑う要素が見当たらねえ！！

「85点ですね」
結構高得点だ！そういうのでいいのか！？

「では次、菅原。＜夏草や 兵どもが 夢の跡＞」
知らない女子か。

「＜無理心中した 美少年たち＞」
腐女子だ！菅原さん絶対腐女子だ！！

「80点です」
名作が汚されたのにそれでいいのか！？

「次、三井。＜閑かさや 岩にしみ入る 蝉の声＞」
俺か。

「……<無垢な自然に 澄み渡りけり>」

よし、これならそこそこいいだろう。

「10点ですね。面白くないので。追試です」

追試！？しかもみんなの目が冷てえ！なんだよその「空気読めよ」みたいな目は！？授業中だからまともな解答したのに！俺がおかしいのか！？変なのか！？

「<荒海や 佐渡に横たふ 天の川>」

……しかたない。

「……<織姫渡つて 浮気に参上>」

「いいでしょう。合格です」

……芭蕉さんごめんなさい。

第十話 芭蕉（後書き）

ついに十話です。短いですがこれからもよろしくお願いします。こ
うしたほうがいいという要望があったらメッセージください。

第十一話 自己紹介／音楽編

我が北高では芸術関係の教科を音楽、美術、書道の三つの中から選ぶことになっている。入学の前に希望を聞かれ、その上でクラス分けをしたので、俺たちのクラスは全員が音楽選択となっている。その音楽の初回の授業で俺たちはある宿題を出された。それがく自己紹介を曲に乗せて歌うから作詞をしてこいゝというものである。

俺は一週間じっくり考えてく大きな古時計ゝに合わせて自己紹介をすることに決め、作詞も平凡なものではあるが作り上げた。そこそこいいと自画自賛していたのだが、それはあまりに甘い考えでしかなかった。

そして発表当日。

「では、名簿の一番から始めて」

という音楽教師（女性教師。お笑いコンビくずんゝの飯尾似）の木瀬先生の言葉から始まったこの自己紹介で、またしてもこの学校の生徒の異常さを知ることとなるのだった。

く例1ゝ

「では始めて」

「はい」

……なんかギターとハーモニカ持ってるんですけど……。

「始めます」

……ゆずの曲に合わせて凄く速いテンポで弾き語りしてやがる……。

……。

……なんだこのハイスペックさは……。

く例2ゝ

「では次」

「わかりました」

そう言つとピアノの椅子に座つた。さあ何の曲だ？

「じゃあ弾きます」

そう言つて弾き始めた。

……ピアノも歌もうまいのに……。

……なぜ自己紹介の曲に＜ラジオ体操第二＞を選んだ……？

（例3）

「次の人」

「はい！」

義人だ。こいつは何をするつもりだ……？

「やります！」

そう言つてギターを弾き、歌い始めた。

……＜ハレ晴レユカイ＞の曲にのせて……。

まあ、予想の範囲内だったかな……。

全く当たつてもうれしくない予想だったが……。

その後も凄い手の動きをしながらピアノを弾き語る（曲はショパ
ンの＜夜想曲^{ノクターン}など）女子やアニソン（＜勇氣100%＞や＜バリバ
リ最強No.1＞など）を歌う人たちがいた。選曲おかしいだろ。
いや、ある意味そういう紹介にもなるからいいのか……？

ちなみに俺の歌は先生にそこその評価を受けたらしい。理由は
「この中で数少ないまともな自己紹介になっていたから」だそうで
ある。

……この学校にも普通であることを評価してくれる教師がいるん
だな……。

第十二話 草むしり

水泳部はプールの管理をしなければならない。その仕事はプール掃除に塩素の管理、ビート板などの整理やプールの周りの掃除や草むしり、コースロープ張りに背泳ぎのための旗の設置など多岐にわたる。今日はそのうちの一つ、草むしりをやらされていたのだが、義人の「黙々とやるのはつまらんから、山手線ゲームでもやりながら草むしりしよう」という意見に従い、

俺、石井の三人で山手線ゲームをしながら草むしりすることとなった。

「古今東西赤いもの」

「桂言葉」

「いきなり危ねえ！いろんな意味で！なんで開始がそれなんだよ！」
「ぱっと思いついたから」

「一番にそれを思いつくお前の思考回路に驚きだよ！」

「うわー、言われたー」

「石井、お前もか！」

もしかして俺がおかしいのか！？いや、そんなわけない。落ち着け、俺。

「……変えよう。古今東西昔はやったもの」

「ミニ四駆」

「ハイパーヨーヨー」

「たまごっち」

「デジモン」

「ビーダマン」

「ゾイド」

「おっはー」

「なんでだろう」

「間違いない」

「ダンディ坂野」

……ん？

「ちよつと待て。人名はいいのか？」

「いいんじゃないー？昔流行ってたしー」

＜昔＞の部分がまずい気がするが。

「ほれ、次旦那」

「ああ、じゃあラッキーマン」

「そういえばー、デスノートの作者と一緒にらしいねー」

「嘘だ！」

「ひぐらしネタか、旦那」

「いや、そうじゃなくて俺はそれを信じない」

「別にいいじゃんー、一緒にー」

「絶対大場つぐみとガモウひろしは別人だ」

「いろいろと証拠もあるらしいぞ」

「うるせー、絶対別人だ！」

「お前ら、掃除すんだか」

「ごちゃごちゃと話していたら部長が来ていた。

「終わりましたよ」

「ここらへんは全部」

「結構きれいになりましたねー」

うむ、きれいになった。

「お前らあんだけ騒ぎながら仕事してたんだな……」

当然のことなのに、部長は何か問題でもあるのだろうか。まるで変なものを見ているかのような目つきをするのはやめてほしいものだ。

第十二話 草むしり（後書き）

ついに千アクセス突破。皆さんのおかげです。今後ともご愛顧のほどをよろしく願います。

第十三話 朝

北高への登校前、例によって義人と一緒に登校しようと呼びに行つたのだが、この日は少しばかり勝手が違っていた。チャイムを鳴らしても、携帯にメールをしても電話をかけても全く応じないのである。

「まさか事件か何かに巻き込まれたわけじゃないよな……」

新聞で見た強盗殺人の記事が目には浮かんた。早合点するなと思いはするものの、悪いほうへ悪いほうへと想像が膨らむ。

「大丈夫だよな……」

そう言いつつドアに手をかけると簡単に開いた。鍵がかかっていなかったのである。

「本当に大丈夫だよな……」

早足で義人の部屋に向かった。義人の部屋のドアを開けると、机に義人が突っ伏していた。

「……！？おい義人！？大丈夫か！？」

焦って義人に駆け寄り、義人の体を強く揺すった。そうして揺すり続けると、義人が何かをつぶやいた。

「……」

「義人！？どうしたんだ！？」

「……もえたよ……」

「……燃えた！？」

「何が！？何が燃えたんだ！？」

「……真白に……」

「だから何がどうして燃えたんだ！？」

「そう俺が強い口調で尋ねると、義人はこう言った。」

「……萌えたよ……萌え尽きた……真白にな……」

机の上ではパソコンが<fin>の画面を映し出していた。

「つまり徹夜でパソゲーをやっていたと」

「うむ」

「しかも十八禁のを」

「ああ」

「それをクリアして気がゆるんでそのまま寝てしまったと」
「その通りだ」

「……ふざけんなぁー！！！！」

「うわ、どうした旦那！暴れるな！」

「俺の純粋な心配を返せえー！！！！」

「心配って何の？」

「うるせえー！！！！」

第十四話 姉

昼休み、俺、義人、石井の三人で昼食をとっていると、石井がこんなことを聞いてきた。

「そういえばさー、三井と杉田ってー、兄弟姉妹っているー？」

俺と義人は、二人同時に昼食を食べる動きを止めた。……いや、動けなくなった。

「……アネナンテイナイヨナ、スギタクン？」

「……ソウダヨ。アネナンテイキモノハ、イナイヨ、ミツイクン？」
しばらくしてから、俺たちは少ばかり現実逃避を試みた。

「ふーん、二人ともお姉さんがいるんだー」

……残念ながら、石井にはばれてしまったらしい。

「……ナニライツティルンダ、イナイヨ？」

義人はまだ抵抗を続けているようだ。

「いるんでしょー？」

「……イナイヨ？」

「悪あがきはやめなよー」

「……ナンノコトカナ？」

「いいなー、お姉さん。姉萌えでー」

「なんだと！？お前、実際に姉がいる気持ちかわかるか！？日々怯え、パシリに使われる気持ちができるんでもいうのか！？」

「やめる義人！お前の気持ちはわかるが、石井に罪はない！」

「……わかったよ……」

そう言うと義人は疲れ切ったように椅子に腰かけた。

「……姉萌えなんていうのは、姉がいない奴らの幻想にすぎないんだよ……」

屍のようになりながら、義人は語った。

「……幼少のころから姉の影に怯え、力づくで言うことを聞かされる……。これが、現実なんだよ……」

「力づくってー？」

何も知らない石井が尋ねた。

「……義人の姉さんは、柔道の有段者なんだよ……」

むせび泣く義人の代わりに、俺が答えた。

「でもそれはー、一例にすぎないよねー。三井のほうはどうなのー？」

「……うちのは空手の黒帯を持つてるんだよ……」

護身術の技を試させると言われ、三日文字を書けなくさせられた記憶が頭をよぎった。

「でもー、性格がよければー」

「……弟に少女マンガ（＜赤ずきんチャチャ＞と＜おこじよさん＞。両方とも全巻）を買いに行かせるのを、優しいと呼べるのか……？」

「……」

「だが今、俺たちの姉は大学生活のため下宿している……。ようやく俺たちにも、平和が訪れたんだよ……」

だから過去のことを思い出して泣くのはよそう、義人。輝かしい未来を喜ぶんだ……！

「でもゴールデンウィークにはー、帰ってくるんじゃないのー？」

「……うわあああああ」

「大丈夫か、義人！気をしっかり持つんだ！」

第十五話 数学教師

「いいかー、このようにだなー、確率の求め方はだなー、」

数学の授業中、この日は確率の求め方についての説明をほぼ終えたところだった。

「いくつかのパターン化をしてだなー、場合の数として求めてだなー、」

佐藤先生は説明に長々と必要のないことまで付け加えて話し続ける傾向にある。

「そしてだなー、この公式をそのまま覚えるのではなくてだなー、根本的にだなー、」

さらに根本的だの加速度的だの幾何学的だの……的という言葉をよく使いたがるようだ。

「つまりだなー、このように確率の求め方を利用することだなー、宝くじの当たる確率などもだなー、計算することができてだなー、」

そう言うとおもむろに黒板へこまごまとした計算式を書いていった。

「この式はまだお前らには早いかもしれんがなー、いずれ大学入試までにはできるようにするからなー、その覚悟をだなー、」

黒板の式には数多くの記号なども交じっており、俺には理解できないものもあった。

「この式から導き出される結論はだなー、宝くじに当たる確率なんてだなー、天文学的にひくいことであることがだなー、」

なるほど。実際の生活にも数学が役に立つことを説明しているのか。

宝くじは当たらない、金の無駄だ、と。

「センサー、ならセンサーは宝くじ買わないんですかー？」

「いやそうではなくてだなー、」

……ん？

「宝くじは当てることを目的とするのではなくてだなー、夢を買うものであってだなー、」

……あれ？確率論云々は？

「当たる確率が低いと理解しながら買うことに意義があつてだなー、」

……つまり買つてゐるのか……。

……今までの説明の意義は……？

……数学の意味は……？

「そういうところに男のロマンというものを感じてだなー、」

……この後もぐだぐだと言いつつ訳を続けるダメな大人がいた。

……がんばれ、佐藤先生（机の上が片付けられない大人）。

……負けるな、佐藤先生（もうすぐ四十代、フィリピン人女性と離婚歴あり）。

……たたかえ、佐藤先生（現在数学教師陣唯一の独身者^{ひとりもの}）。

第十六話

「明日からプール掃除だ」

強面こわもての水泳部顧問、小倉先生はそう言うのと、続けて掃除方法、分担、終了まで一週間ほどかかることなどを説明して体育教官室へと帰って行った。相も変わらずいるだけで強烈なプレッシャーをかける人だ。

その帰宅途中。

「なあ旦那、俺たちは結局明日何をすればいいんだ？」

「今の説明の間何聞いてたんだよ……？」

「いや、隣のテニスコートで名勝負が繰り広げられてたから」

プールの中にはテニスコートがある。そのため筋トレ中にもボールが入ってきて迷惑をするときがある。そのことを先輩に言ったら「別にいいじゃん。入ってきたボールはもらっちゃうし」という返答が返ってきた。それは体のいい泥棒ではないのだろうか。

「それにしても小倉さんの前だぞ？ 怖くないのかよ？」

ちなみに俺はよそ見などできないと断言できる。ビビりと呼びたければ呼ぶがいい。俺は自分の身が第一だ。

「別に？」

その度胸と図々しさを少し分けてほしいものだ。かつての担任に「三井と杉田は二人を足して二で割ればちょうど良くなるのに」と言われたが、そんなことをしたら、こいつに吸収されて俺の自我は掻き消え、義人が二人になるのではないだろうか。

「……お前は大物だよ……」

中学の時同じような件で怒られたのを全く教訓にしていないのか。
「……で明日何するんだ？ 筋トレ？」

……そもそも話の頭から聞いていなかったようだ。俺の親友は大

物ではなくただの馬鹿だった。

最終的に一から説明すること五分。その後の会話。

「うわー、面倒くせー。さぼるかなー」

「……首根っこをつかんでも連れて行ってやるから覚悟しとけ……」

「……すみません。やりますから急所は勘弁してください……」
うむ。説得がスムーズにすんでよかった。

第十七話 プール掃除と会話

プール掃除一日目。すでにプールの水は抜いてあるが、底には砂などがこびりついているので、見た目はかなり汚くなっている。しかし俺たち水泳部はまず、プール内にある落ち葉や泥を外へ出して捨てる作業を始めた。

水の入っていないプールを見たことがない人にはわかりにくいだろうが、25メートルで9コースもあるプールというのはかなり広く、深さもある。そのためプールの中に入り、落ち葉や泥を集め、バケツに入れる係と、その落ち葉や泥を森に捨てに行く係とに分かれた。効率よく掃除を進めるためである。そうして係で会話をしながら掃除をしていた。

ゴミ捨て班（一年）

松田「そう言えば、>バンブ<のアルバム聞いた？」

片山「ああ、いいよなー」

田村「最近は>RED WINGS<がいいぞ」

浜口「>藍坊主<も捨てがたいよなー」

今時の高校生らしい会話が聞こえてくる。高校生といったらやはりああいう会話をするものなんだろうな……。

掃除班（一年）

杉田「……いいじゃないですか奥さん。嫌いじゃないんでしょう？」
石井「もう嫌です！こんなこと主人に知られたら……」

杉田「もはや私たちは一蓮托生ですよ」

石井「……そ、そんな……」

なんだこの小芝居。

杉田「……もう我慢できませんよ……」

石井「ああ、誰か助けて……！」

なぜそこで二人揃って俺の方を見る。小芝居には付き合わんぞ。

杉田「……いい加減にあきらめたらどうなんです」

石井「……もうやめてください……」

だからこつちを見るな。目で会話に参加するよう訴えかけるな。

杉田「……奥さん。何の冗談です」

石井「……あなたを殺して私も死ぬわ……」

話は佳境に入ったようだった。決して関わらないようゴミ集めに集中する。俺があいつらに何も言わないのは、向こうも掃除自体はやっているからである。無駄話をしながらでもやることをやっていれば何も言う必要はない。

杉田「……た、助けてくれ……。うわああああ」

ついに不倫相手は殺されてしまったようだ。そう考えたことで、俺もこの話を楽しんでいたのだと知って苦笑した。俺もあいつらと同じレベルかな……。

石井「……さよなら、三井さん」

……不倫相手俺かよ……！！

第十八話 内容

水のないプールは広くて、水を張っているときにはわからないほど深い。その広さはたいいていの競技はできてしまうほどである。……というわけで水泳部一年は、掃除の前にボール鬼をすることになった。

ボール鬼というのは、鬼ごっこのタッチの代わりにボールを当てるというシンプルな競技である。ただし、<ドキッ!? 水泳部特別ルール>疾風のボール鬼編>（命名：義人と石井のオタクコンビ）により、ボールは壁（プールの内壁）に跳ね返って当たっても有効、バウンドして当たっても有効ということになった。ボールはどこかに落ちていたのを池内先輩（平泳ぎで県入賞、二年）が「水泳部が保管しておこう」と言って拾ってきたを使用する。……使っているのか？

25メートルプールは逃げ回るのは狭く、当てる鬼には有利なので、普通にやるよりも白熱した展開になった。鬼がめまぐるしく変わることもあり、かなりおもしろい。機会があつたらぜひやってみることをおすすめする。機会なんて水泳部以外ないだろうが。

しばらくして、鬼が浜口（例の全国レベルの猛者）になったところで、古川部長（200メートル平泳ぎとバタフライで県出場、三年）が掃除を始めるよう言ってきた。

……さて、今日も掃除を始めるか。

本日の作業は、水でプールの底にこびりついた砂を洗い流していくことだった。水を上からホースで出す係に三年と二年が付き、一年がブラシで底をこする係に付いた。雑談をしながら作業を進める。田村「浜口と片山って中学同じだよな」

片山「そうだね、保育園のときからずっと一緒だね」

浜口「いわゆる腐れ縁だな」

おれ「二人って去年の県大会団体優勝してるよな、確か」

片山「昌史は県の記録も塗り替えたしね」

まじでか。

杉田「片山も東三大会の記録は塗り替えてるぞ」

松田「二枚看板が二人とも北高^{うち}にきたわけか」

石井「松田は一年の時、杉田と三井は二年の時に東三大会団体優勝してるよねー」

おれ「……そうだな」

俺は200バタフライで五位がせいぜいだったが（タイムは三分二秒）。ちなみに、中学のときの大会は＞市内大会＜、＞東三大会＜、＞県大会＜、＞東海大会＜、＞全国大会＜の順番で大きくなっている。高校では市内大会がないらしいので一つ減ることになる。

石井「このメンバーはみんな賞状をもらったことがあるんだよねー」

俺は市内新人戦二位（二年）だから価値はほかの人より低いけどな。……ん？

おれ「……なんでそんなこと知ってるんだ？」

石井「三井は新人戦二位だよー」

浜口「なぜそんな細かいことまで」

細かい言っな。傷つくぞ。

杉田「俺は言ってないぞ」

石井「……先生に聞いたんだよー」

視線をそらすな。口笛吹くな。あやしすぎるぞ。

そうして話しながら掃除を終えると、小倉先生が来ていたのでその件を聞いてみた。

小倉「そんなこと話してないぞ」

おれ「本当ですか？」

小倉「個人情報がどうなので教育委員会がうるさいからな、あの脳なしどもは」

脳なしは教師として言っているのか？小倉先生がそう言うのは物凄く怖いんですけど。

……それはともかく石井に対する疑念が強まった。すると石井が小倉先生の耳元で何か囁いた。

石井「……………」

小倉「アアソウダ。オレガイッタンダ」

何した石井！？

おれ「大丈夫ですか！？」

小倉「アアソウダ。オレガイッタンダ」

小倉先生が廃人同然になってる！？

おれ「しっかりしてください！」

小倉「アアソウダ。オレガイッタンダ」

駄目だ！頭にヤのつく自由業にしか見えない小倉先生がやられた！

石井「だってさー」

おれ「……………何したんだ？」

石井「ちよつとしたお話だよー」

……石井の謎が深まった一日だった。……小倉先生、何を握られてるんだ……。

第十九話 親睦

この日の作業はプールの内壁に塩素を塗ることだった。と言っても個体の塩素をそのまま塗るのではなく、バケツに水を張り、その中に塩素を溶かしてブラシで塗る。塩素はプール全体に塗るので、壁と底の隅々まで塗らなくてはならないので注意が必要だ。

この作業は一度だけでなく乾いたらもう一度やる。これが終われば後はプールに水を張るだけなので、気合いを入れてやるようにとの部長のありがたい訓示で説明は終えられた。例によってだべりながら作業を始める。

松田「水泳部の親交を深めるのにはどうすればいいと思う？」

田村「なんだ突然。どうかしたのか？」

松田「いや、水泳部の仲を深めるにはどうすればいいかと思って」

片山「カラオケに行くとか？」

浜口「そういうことでいいのか？」

松田「そうだな、カラオケはいいかもしれんな」

杉田「でも先輩がゴールデンウィークに新入生歓迎会するって言うてたぞ」

おれ「そのときにカラオケもするかな？」

石井「そうみたいだよー」

松田「そうか……、ほかには何かあるか？」

浜口「昔話をするとか」

田村「昔話？」

浜口「昔話と言うと語弊があるか……。要は俺たちの小、中学校時代を話そうってことだよ」

片山「過去を話すってことだね」

石井「それは好都合だねー」

田村「好都合……？」

おれ「ごめんなさいどうか勘弁してくださいお願いしますそれだけはっ！」

田村「……どうしたんだ三井、その土下座するんじゃないかってほどの勢いは……？」

松田「悲壮感にあふれまくりだな……」

杉田「旦那の過去はトラウマの宝庫だからな。ただでさえネガティブだし」

浜口「やめにするから元気出せよ」

杉田「また嫌な思い出でも思い出したんだろ、大丈夫か？」

おれ「……ありがとう……」

石井「残念だねー」

松田「別の意見はあるか？」

片山「うーん……、あだ名をつけるっていうのはどうだろう？」

田村「いいんじゃないか？」

おれ「……」（あだ名に関するトラウマを思い出してる）

浜口「よし、反対意見はないな。まず俺のは何かあるか？」

杉田「アニマル」

浜口「却下」

松田「まさる」

浜口「却下」

石井「文句つけすぎだよー」

浜口「今の二つは問題あるだろ！」

片山「もう昔みたいに浜ちゃんていいんじゃない？」

浜口「……何かほかには？」

石井「>モーレイ<っていうのはー？」

浜口「なんかカッコいいな、それ。どういう意味だ？」

石井「ある魚の英名だよー」

浜口「なんて魚だ？」

石井「ウツボ（硬骨魚。口、歯が強大。性質は凶暴で激しく噛みついてくる）だよー」

浜口「……浜ちゃんでもいいです……」

その後も一人一人あだ名をみんなで考えていった。最後の一人、俺。

田村「>保護者<はどうだ？」

浜口「>ツツコミ<も捨てがたい」

片山「>ストッパー<でもいいんじゃない？」

おれ「……意味は……？」

浜口「もちろん>スギ<（義人のあだ名）と>イッシー<（石井のあだ名）に対する位置付けだ」

おれ「……何で俺のあだ名は役割なんだよ……」

結局俺が泣いて頼んだので>みつちゃん<という平凡なものに落ち着いた。

……小学校の時みたくならなくてよかった……。

第二十話 大戦

体育のための着替えは、男子は教室、女子は更衣室で行うことになっている。だから体育の授業後は、一時的に教室が男子だけになる。

この日の体育の授業後、俺はソフトの後片付けをさせられたので教室に戻るのが遅くなってしまった。鼻歌（>モンゴル800の<小さな恋の歌<）まじりに教室に戻ると、何やら中が騒がしかった。扉を開けると、大声で議論が行われていた。

「女子のパーツで一番重要なのは胸だ!!」

「何を言っているんだ!! 尻だろう!!」

……本格的に転校を考えようかな……。

そこそこ仲のいい大林（鉄道、車マニア。演歌でNHKのど自慢に出場経験あり。特技は覆面パトカーを見破ること……らしい）に事情を聞いてみたところ、清水ら一部の男子が女子の体でどこを重視するかという話をしていたのが白熱してしまい、クラス全体に飛び火したそうだ。……しょうもないことにここまで熱中できるのはある意味称賛に値する。もっと別のところにその力を注いでほしいが。

「議長、我ら>ムネン老師軍くに発言の機会を!」

なんだそのどこから怒られそうなネーミングは。

「認めます、どうぞ」

「ムネン老師様、お願いします」

「よろしい」

……ムネン老師って義人かよ! 何やってんだあいつは……。

「我らは女性とは生命を育む神聖な存在と考えておる。女性はその

胸で幼子を生き延びさせ、

成長を支え続ける……まさに胸こそが我ら人類、いや哺乳類にとどまらない数多くの生命を育てる要かなめと言っても過言ではないだろう……このことから我らが胸に興味を持つことは必然である。よって女性の最高のパーツ、それは胸である……！！」

わーっとムネン老師軍から歓声が上がった。盛り上がってるところ悪いが、早く制服に着替えさせてくれ。次は昼休みとはいえ、汗かいた体操服のままではいたくない。

「>シリ仙人<勢にも発言権を！議長！」

「どうぞ」

「シリ仙人様、あなたにかかっています」

「わかっていますよー」

今度は石井か。大活躍だな、水泳部は。

「生物というものはー、お尻からうまれるものだよねー。それだけでなくー、生き物は陥入が進むことでー、生物の形を形成していくんだけどー、その陥入場所というのがー、お尻なんだよねー。つまりー、人間も生物である以上ー、最初に形作られてー、生命を産み落とすー、お尻に興味を持つことはー、至極当然なんだよねー。だからー、女性にはー、お尻に一番関心が向くんじゃないかなー」
うおーっとシリ仙人勢から感動の声が上がった。周りのクラスに迷惑だな、これは。

「そろそろ時間ですので、議決を取りたいと思います」

議長がそう言うと、クラス内は静まり返った。

「議決は当初の予定通り、>ムツツリ師範<に一任します、よろしいですね？」

異議なし、と声を揃えてみんなが言った。

「では>ムツツリ師範<こと三井、議決をお願いします」

……俺かよ！……こんな二つ名がつくことになるうとは……悲しくて死にそうだ。

「お願いします」
なぜに。

「早くしろ……それとも不能か？」

いらつときで、つい叫んでしまった。

「俺は太もも派だ……！」

「……………」

クラス内が静まり返った。

結局議論はうやむやのうちに終わった。……恥ずかしさで死にそうな俺を残して。

「三井、ドンマイ」

「お前は頑張ったよ」

「気にするな」

「……頼むからもう忘れさせてくれ……」

……引っ越したい……。

第二十話 大戦（後書き）

ついに二十話到達です。感想とか意見、要望などお待ちしております。

第二十一話 付き合い

プール掃除最終日。もう一度塩素塗りを終えれば、晴れてプール開きとなる。……水温二十度以下のプールなど、とても入れたものではないのだが。まあそれはさておき、皆の衆と話しながら作業を開始する。

松田「みんなって、彼女いる？」

浜口「何を藪から棒に」

片山「いるよ」

田村「……いる」

片山と田村は水泳部一年きつてのイケメンコンビである。……俺の主観だが。

松田「そのトリオは？」

おれ「トリオ？」

松田「イッシーとスギとみっちゃんの三人。変人トリオ」

この二人と同類にみなされるとは……。おまけに変人て何だよ。俺は北高に残った最後の常識人にして良心だと自負してるくらいなのに。

片山「少なくとも普通ではないと思うよ」

そんな馬鹿な。

田村「……現実を認めろ」

おれ「なら現実のほうが間違ってる」

浜口「……で彼女いる？」

無視ですか。俺の意見は何かおかしいですか。

おれ「いない」

松田「スギは？」

杉田「いるよ、二次元にたくさん」

駄目人間だ。

片山「イッシーは？」

石井「僕もいるよー、二次元に」

こいつらが将来ニートにならないか本気で心配だ。

おれ「浜ちゃんと松ちゃんは？」

浜口「今はいない」

松田「俺も。今はね」

ということとは昔はいたのか。

片山「みっちゃんは付き合ったことないの？」

おれ「……ないよ」

杉田「小学校の時にちよつとあったからな」

松田「何があつた？」

石井「教えてよー」

おれ「……そのうちにな」

石井に話したら脅迫材料になりかねん。

「ではこれでプール掃除を終わります。ご苦労様でした」

一週間に及ぶプール掃除は部長のあいさつで終わった。汚れていた部分がなくなり、プールが輝いて見える。苦労のかいがあつた。

「なお来週からプール開きです。水着を忘れないように」

もつと時間をかけてじっくりやればよかった。

「先生、どれくらい泳ぎますか？」

初めだから水慣れ程度だよな、というかそうしてくださいお願いします。

「二キロ位だな」

「……ギャグ？」

小倉さんが「ギャグだよーん」などと言ったら、それはそれで恐ろしいものがあるが。

「もつと多いほうがいいか？」

鬼だ。

「……わかりました……」

……雨が降ったら中止にならないかな……。

第二十二話 設立

「旦那、新しく部活を立ち上げたいと思うのだが」

「何を唐突に」

義人が突然わけのわからないことを言うのは、今に始まったことではないが。

「まあいい、言いたいことがあるなら手短かに話せ」

「冷たいな」

「聞いてやるだけありがたく思え」

「いや、昨日ニコニコ動画で昔のアニメを見ていたんだ」

ふむふむ。

「>ドラゴンボール<と>あずまんが大王<と>魁！クロマティ高校<を見たんだ」

またすごい組み合わせだな。

「その三つのアニメを見て気付いたんだよ」
何に。

「若本さんの素晴らしさに」

解説しよう。若本さんとは日本の声優の第一人者にして、六十歳をこえる年齢にもかかわらず、今なお男らしい美声を保ち続ける男性声優である。>ドラゴンボール<では>セル<役をこなし、>あずまんが大王<では>ちよ父<役、>魁！クロマティ高校<では>メカ沢<役を好演した。これでもまだわからない人は>サザエさん<の>アナゴさん<役の声だと言えばわかるだろう。とにかく凄い声優である。

「そこで部活を立ち上げようと思ったんだよ」

意味がわからない。

「……なんて部活にするつもりだ？」

見当がまったくつかないので聞いてみる。

「若本部」

……謎がさらに深まった。

「……その若本部の活動内容は？」

さらに踏み込んで聞いてみる。

「若本さんを崇め讃えること」

どこの宗教団体だ。

「……そもそもお前は水泳部に入っているだろう」

「それとは別にだよ」

「部員のあてはあるのか？」

「今二人」

「誰だ？」

「俺と旦那」

……やっぱり。

「俺は入らんぞ」

「あとは顧問だな」

話を聞け。

「健三さんがどの部の顧問もやってないらしいから、そこから当たろうと思う」

勝手にしろ。俺はその部には入らんしな。

「勝負は授業後だな」

この情熱をもっと別のことに注いでほしいものだ。

そして授業後。

「健三先生、俺が部を立ち上げるので顧問になってください！」

「いやですよ面倒くさい」

やはり撃沈したか。部の内容も聞いていないのに、生徒の頼みをばつさりと切り捨てるのは教師としてどうかと思うが。

「旦那、もっと別の方法を考えてみるよ」

勝手にやってくれ。できれば俺を巻き込むな。どうせ無駄だと思

うが。

そして翌日。

「旦那、宿題見せてくれ」

「……若本部はどうした？」

それが原因で宿題を忘れたんじゃないだろうな。

「ああ、あれはもういいや」

もういいやって。なら何で宿題忘れたんだ？

「いや、ニコニコ動画見てたら徹夜して」

馬鹿だ、馬鹿がここにいる。

「……若本部はもう本当にいいのか？」

昨日の俺が付き合った時間を返してほしい。

「いや、どう考えても非現実的だろ」

お前が言っな、この大馬鹿野郎。

第二十三話 開始

ついにこの日がやってきた。

できることならもつと後になってからのほうがよかった。

せめて快晴なら抵抗も少しは軽減されるのに。（今日の天気は晴れときどき曇り）

しかし俺たちには絶対に避けては通れない日。

……プール開きである。

「何をそんな悲痛な顔をしとるんだ」

いいですよ、先生は水の中に入らずに、外から声出してるだけでいいんですから。

「本日の水温は十七度だ
いっそ殺してください。」

「この前言ったようにたったの二キロでいい。簡単だろ」
問題は距離じゃなくて温度と時間なんですけど。

「メニューは特にない。とにかく二キロ泳いで来い」

ちくしょう、覚えてろよと心の中で毒づく。決して声には出さない。怖いから。

「では始めろ」

……逃げ出したい。

「石井、お前先入って」

「えー、いやだよー。僕は見た目通り寒さに弱いんだからー」

石井は身長175センチだが、ひどくやせている。風が吹けば、飛ばされそうなほどだ。

「なら松ちゃん、GO!」

「頼む、勘弁してくれ」

「浜ちゃん、いつも泳いでるんだろ。なら一番乗りで飛びこんでくれ」

「心臓止まるわ! だいたい俺はいつも温水プールだから、十七度なんてありえん」

「よし、マサ(片山のあだ名。名前がまさとしなので、マサ)、君に決めた!」

「ポケモンじゃないんだから……もちろんまだ入らんよ」

と一年でガヤガヤとやっている、誰かに背中をつつかれた。

「……ん? どうした?」

田村だった。

「……先輩達もう泳いだる」

確かに先輩たちは、俺たち一年を無視して泳ぎ始めていた。

「先輩たちだけ先に泳ぎ終えるつもりか……」

「よし、こうなったらじゃんけんで入る順番決めるぞ!」

「わかった。最初はグー、」

確率は七分の一(男子のみ。一年女子二人は本日欠席)だ。まあ一番にはならないだろう。

「……じゃんけんなんか嫌いだ」

見事に一番に入ることとなった。

「みっちゃん、逝け!」

「漢字違う!」

実際逝ってしまいそうな水温だけに、変に現実味がある。

「屍は拾ってくれよ……」

水死体(死因は心臓麻痺)が浮かぶかもしれないから。
「早く入れ」

……みんなが冷たい。

「ちくしょー！」

叫びながら入った。……足から少しずつ。飛び込みは危険なのでやっではいけない。

「……冷てえ……」

心も体も。

「よし、みんな続けー！」

「「「おおー！！！！」」」

みんな入って自分のペースで泳ぎ始めた。

開始から五分後。石井脱落。

「先生！石井が真つ青でやばいくらい震えています！」

「許してやる。上げれ」

「……………」

「大丈夫か石井ー！死ぬなー！」

「なんだか眠くなってきたよ…………」

「石井ーっ！」

幸い、命とか体とかに異常はなかった。……あつたら問題だが。

開始から十分後。松田、片山相次いで脱落。

「……もう無理です…………（寒さが）」

「……僕ももう駄目です…………（もちろん寒さが）」

「上がってよし」

開始から十五分後。田村脱落。

「……限界…………（当然寒さが）」

「とつととシャワー浴びてこい」
「……………」

開始から二十五分後。浜口完泳。

「……………終わった……………」

「よくやった」

「……………死ぬ……………」

開始から三十五分後。俺、義人完泳。

「……………」（二人とも凍えて言葉が出せない）

「お疲れ」

「……………」（震えながらシャワーを浴びに行く）

シャワーを浴びて、着替え終わった後。

「……………人間寒さを耐えてると感覚なくなるな……………」

「……………俺泳いでる途中の意識ないわ……………」

「……………立ち止まったら余計寒くなるから泳ぎ続けてたほうがいいな……………」

「……………何メートル泳いでたかわからなくならん……………？」

「……………あー、それわかるわ……………」

「……………後途中で頭の中に変な音楽流れてきたな……………」

「……………生きてるって素晴らしいな……………」

「……………ごもつともだ……………」

一緒に臨死体験をしたことで、部員内での団結力が高まった。

「……これからこれが毎日あるのか……」
「……それを言っとな……」

第二十四話 年号

「お前たち、中学の時に習ってるはずの年号が覚えきれてないな」
日本史の授業が始まると、田山先生がそう言って以前にやった年号のテストを返してきた。

俺の点数は87点と上々だったが、平均点が良くなかったらしく、先生はご立腹のようだ。

「だから年号を覚えられるよう、ごろ合わせを教えてやる」

ああ、確かにただ黙々と暗記するよりいいだろうな。

「メモしたい奴はしてもいい。では始めるぞ」
始めてください。

「57（こんな）金印いかがです」

奴国王が金印を授かったのが57年。なるほど、よく出来てる。

「239（ふみく）ださい卑弥呼より」

卑弥呼が魏に使いを送った年か。

「538（こみや）ま君百済から仏教伝え聞く」

……こみやま君関係ねえ！

「みまやとみ厩戸王（聖徳太子）は593（コックさん）」（593年厩戸王
摂政に就任）

コックさんじゃねえ！摂政だ！

「607（ぶれいな）こと言う遣隋使」（607年初めて遣隋使を
送る）

……これはまともだ。

「645（むしこ）ろして大化の改新」

蘇我入鹿を虫呼ばわり！？ひでえ！

「710（なつとう）もりもり平城京」（710年平城京に遷都）

もはや意味わかんねえ！710（なんと）大きな平城京でいいだろ！納豆関係ないだろ！

「794（なくよ）坊さん平安京」（794年平安京に遷都）
ウグイスは！？

「ちなみにこれは遷都を命ぜられた坊主が多くいたことを示している」

意味あつた！びっくりしたよ！

「894（はくし）に戻した遣唐使」（894年菅原道真の進言で遣唐使を中止する）

……落ち着け、俺。まともだ、これはまともだ……。

「935（くみこ）さん好きだ。結婚しよう。平将門の乱」

……くみこさんって誰だ！？前半と後半に接点が見当たらねえ！話に脈絡なさすぎ！

「1086（いとうはむ）が好きな白河上皇」（1086年白河上皇が院政を始める）

伊藤ハムの宣伝かよ！

「平清盛、1167（いいむな）げ」（1167年平清盛が太政大臣になる）

胸毛関係ねえ！

「1185（いいやこ）ろして。壇ノ浦の戦い」

投げやりだ！

「1185（いいやこ）ろして。鎌倉幕府成立」（1192年は征夷大將軍となつた年）

幕府成立に何があつた！？年が一緒だからって覚え方まで一緒にしないでいいだろ！

「1274（意地なし）元寇軍」（1274年文永の役）
攻め込んできたのに！？

「これは元寇軍の多くは高麗（朝鮮半島の国）の人々で、日本を攻めようという気概に欠けていたことも意味している。日本が負けなかったのは、高麗の人々のおかげと言っても過言ではないだろう」

また意味あつたよ！ややこしいな！

「1467（医師^{いし}むな）しい応仁の乱」

……意味はあるのか？（疑心暗鬼）

「ああ、意味は特にない」

ないのか。

「1543（以後^{いじ}しみ）増える鉄砲伝来」

……しみ？

「1549（以後^{いじ}よく）伝わるキリスト教」

……普通だ。

「織田信長、1582（いちこのパンツ）はいて死ぬ」

ひでえ！謝れ！織田信長に謝れ！

「1590（異国^{いこく}ゼロ）に。豊臣秀吉全国統一」

……なんでこうまともなものと変なのが混ざってるかな……。

「1716（いらないむ）だ。享保の改革」

享保の改革を無駄呼ばわり！？

「1782（いいなはちじ）だ全員集合。天明の大飢饉」

ドリフターズ関わってない！

「1825（いやにこ）うふん異国船打払例。ハアハア」

最後の興奮した声意味ねえ！

「1837（いや、みな）いで！大塩平八郎の乱」

反乱起こしてるのに見ないでって何だよ！

「1841（いやしい）改革、天保の改革」

改革に卑しいって言ってやるなよ！

「1867（いちやむな）しい大政奉還」

……平凡だ。

「1871（いやない）いかた廃藩置県」

言い方の問題！？

「1889（いややく）るしい大日本帝国憲法」

なぜ急に関西弁！？

「まあこの辺でやめておくか」

……ようやく終わった。なんか物凄く疲れた……。

「ほかに覚え方、高校で覚える年号編のプリントがあるから、ほしい奴は後で職員室まで取りに來い」

……まだあいつのがあるのか……。ちょっと見てみたいかもしれない……。

「一部二百円だ」

……金取るのかよ！

第二十五話 情報

情報Bという授業がある。この科目はパソコンの基礎から応用まで、幅広い活用法を学ぶ、現代社会に必要な知識と技術を手に入れる重要なものである。最終的には自分たちで一人一つづつゲームプログラミングしなければならぬらしい。

俺はというものの、パソコンなんてものはインターネットのために家族共用で使うくらいしか使用歴がないため、この科目にはかなり苦戦している。しかしこの学校にはそういうことを得意とするものがかなりの人数いた。具体的には義人とか石井とか。そしてまた一人、明らかに文字を打ち込む速度が異常なやつがいた。……隣の席に。

情報Bの授業では、工学棟と呼ばれる校舎の情報室（二つある）にクラスの半分ずつ、名簿の奇数番号と偶数番号に分かれて入るのだが、その隣の席の松尾がすごかった。むしろ現在進行形ですごい今は自由にパソコンを使っている時間なのだが……

「……………」（無言でタイピングゲームをしている）
なんだこいつは。手の動きが見えん。

「……………」（最終面を新記録を出してクリア）
何か感情に出せよ。新記録なのに。

「……………」（裏面が出現した）
無表情にもほどがあるだろ。

「……………」（裏面も無言のままクリア。また新記録）
見てるだけの俺が興奮してるのに、何でこんなに冷静なんだ。
「今日の授業はこれで終わります。いつものように電源を切っておいてください」

いつの間にか授業の終わる時間になっていたらしい。パソコンの

電源を切った後、せつかなので松尾に話しかけてみた。

「松尾、すごいな。なんであんなに速く打ち込めるんだ？」

あまり返事を期待せずに聞いてみる。

「んー、やっぱりいつも打ってるからかな」

返事がきた。驚きながら、また尋ねてみる。

「何であのゲームやってるとき無表情で無言なんだ？」

「集中してるとそうならない？」

そついうものか。松尾の場合極端すぎる気もするが。

「部活は何やってるんだ？」

「卓球部だよ」

意外だ。何かの研究会みたいなのに所属してそうだが。

その後もいろいろと問い尋ねてみると、科学の大会で東海大会奨励賞とかいうのを取っていたとか、自己紹介の時「暇なときは数学をしている」と言っていた弓削（こいつは数学コンクールで全国大会に出場していたらしい。情報のクラスは俺とは別だが、松尾と同じ程度にパソコンを扱えるそうだ）と親友だとかいうことを教えてもらった。やはり類は友を呼ぶのだろうか。そう話してみると、
「そうかもね、三井も杉田と石井と仲いいし」
という答えが返ってきた。

……俺はあいつらと類だと思われているのか……。

他人の目からはそう見えているという悲しい事実に凍りついた一日だった。

第二十六話 新歓

水泳部の先輩方が新加入の一年のために歓迎会を開いてくれる。スケジュールとしては、ボーリングをして、めしを食べて、カラオケをするというシンプルなものだ。俺が集合場所のボーリング場に着いたとき、先輩が三人いるだけで一年が一人もいないという困った状況だった。気まずいことこの上ない。

「ああ、三井か。杉田は一緒じゃないのか？」

「……俺はあいつの飼育係でも保護者でもありませんよ……」

「似たようなもんだろ」

それでいいのか。

その後少しずつメンバーが集まってきた。最後は義人だった。

「では全員揃ったところで始めるか」

ガヤガヤとみんなで賛成の意思表示をしたところでボーリングが始まった。

「何でこんなに高得点が多いんだ……」

俺のアベレージ100をあざ笑うかのように、他の面々は高得点を連発していた。特に原先輩（自由形フリーで県大会に出場、絞り込まれた肉体を持っている。三年）に至っては、スピードボールでストライクやターキーを出しまくり、200点オーバーをたたき出した。

……あなたが神か？

食事の前に時間が余ったので、ゲーセンで時間をつぶそうということになったのだが、また部員の変な一面を見つけてしまった。

「くらえっ！」

「はやつ！」

などと声を出しながらやったエアホッケーでは片山、松田が超反応を見せるし、

「……………」

と無言のまま太鼓の達人をやる石井は手の動きが見えないほど（後で話を聞いたらランキングで全国十位以内に入っている曲もあるらしい）だった。おまけに義人がUFOキャッチャーで大量に景品をとっており、この面々の異常さをあらためて知らされたようだった。

この後の食事では、村松先輩（バタフライの選手。椎間板ヘルニアが原因で全力で泳げない状態。まじめで京都大学を目指す二年）が女装で現れたり、俺も巻き込まれて女装させられたりとさんざんな目にあつた。…………俺のトラウマ図鑑にまた新たなページが刻み込まれてしまった…………。…………もうお婿にいけない…………。

締めのカラオケでは田村が美声を響かせ（バンブやミスチルの曲）、義人と石井がアニソンメドレーをデュエットしたり（二人も歌は物凄くうまい）、なぜか最後にみんなで「贈る言葉」を歌って終わった。選曲は謎だが楽しい一日だった。そして最後に部長の言葉。「明日の部活はメニューを小倉さんが考えるそうだ。お疲れ、解散」

…………テンションが一気に下がった。

第二十七話 寒泳

「なあ、今日はまだゴールデンウィーク中だよな、旦那」

「そうだな」

「ゴールデンウィークってのは休みだよな」

「そうだな」

「ならなんで俺たちは学校に向かっているんだ？」

「水泳部の活動があるからだろ」

「なんで休みなのに部活動があるんだ？」

「小倉さんの趣味だろ」

「ならなんで俺たちは水着を持ってるんだ？」

「泳ぐからだろ」

「まだ五月も始まったばかりだよな？」

「そうだな」

「ならなんで泳ぐんだ？」

「水泳部だからだろ」

「まだ水温二十度にも達してないよな？」

「そうだな」

「ならなんで二キロ以上も泳ぐんだ？」

「小倉さんの趣味だろ」

「小倉さんの趣味ってなんだよ」

「生徒いじめ……いや生徒を鍛えて立派にすることだろ」

「今いじめって言ったよな？旦那もそう思うよな？」

「生徒を鍛え、立派にすることが趣味なんて、なんて立派なんだ！

（棒読み）」

「無視！？いつもながらひでえ！」

「そんなことよりもう学校だ」

「つつこもうよ！」「いつもながらって何だよ」みたくつつこもうよ

「！」

「今日は小倉さんのメニューらしいし大変そうだな」

「人の話を聞けーっ！」

「はいはい、いつもながらって何だよ。今日もがんばって泳ぐかー」

「何その>もうお前には付き合いきれないくみたいな態度!？」

「おおさすが義人。俺の考えることがわかるなんて。さすがに付き合い長いだけあるな」

「ほめられたのに全く嬉しくねえ!……いやむしろ、ほめられてないのか!？」

「お願いしまーす」

「俺を無視して部室に入ってる!？新手的いじめ!？」

今日も部活が始まる。

十五分後には部員ほとんどがプールサイドに集合していた。いじけていた義人もそろっている。現実逃避もほどほどにしてほしいものだ。

部室まで車（高級車アウディ）で来た小倉さんが、移動式の黒板にメニューを書き込んでいた。……不気味だ。

「旦那、ちらちらと>全力とか>できないとやり直しくとかいう文字が見えるんだが」

「……気にするな、きつと幻覚だ」

「旦那まで現実逃避しようとするなよ」

「よしできた」

そう言うと、小倉さんは全員にメニューが見えるようにした。とりわけ目を引いたメニューは>全力で泳げ。ベスト+三秒以内で泳げなければやり直しく（自由形五十メートル）^{フリー}というものだ。

「……まじですか……」

浜口が悲壮感あふれる表情で尋ねていた。このメニューではベス

トが速いほど辛いだろうことは想像にかたくない。俺のベストは三十一秒、浜口は二十七秒弱だから四秒の開きがある。それだけに浜口はすぎるようだ。

「まだだ」

「……………」

ドンマイ、浜ちゃん。

人間寒くなりすぎると麻痺して何も感じなくなる。その後また寒くなるが。そんな環境でも俺たちはなんとかメニューをこなした。そして最後のメニューをやりきった後、浜口を筆頭にみんな死にかかっていった。

「……………やっと終わった……………」

「……………死ぬ……………」

「……………感覚が……………」

「お疲れ、明日は九時半から。マッサージしとけよ」
「そう言い残して小倉さんは車に乗って帰っていった。」

「……………明日もか……………」

「……………旦那、小倉さんの趣味って何かな……………」

「……………生徒いじめかな……………」

「……………俺もそう思う……………」

第二十七話 寒泳（後書き）

二人目の感想を頂きました。うれしくてたまりません。こんな短い小説ですが、楽しんでくれる人がいて本当によかったです。5000アクセスも突破して絶好調な>ええじゃないか<はまだ続きます。感想、要望、批評などががん送ってください。

第二十八話 姉弟

家でゴロゴロとしていたら、ゴールデンウィークで帰宅中の鬼神^{あね}（本名、三井弘美。身長百五十センチ。この前の空手の大会で骨折しながら三位。その時はどのマンガの住人だと本気で恐怖した。利き手の握力は五十五キロオーバー。ちなみに俺は四十キロ弱）に言われた。

「直樹（俺の名前）、あんた変になったね」

……盛大に椅子から転げ落ちた。

「……なんだって？」

まさか実の姉に変と言われる日がこようとは。

「いや、前から変ではあったんだけどさ」

以前から!?

「よけい変になったっていうか」

だいたいあんたにだけは言われたくない。

「学校で変な人とでもつるんでるんじゃないの」

心当たりが多すぎる。

「姉としては弟が心配なわけよ」

俺もあなたの将来が心配だ。二十も間近に迫ってきてるのに彼氏作ろうとしないし。

「それはあんたもでしょうが」

心の中を見るのはやめてくれ。確かに俺も彼女なんてものはいないが。

「やっぱりか」

……だからやめてくれ。

「どこが変になったっていうんだ？」

「テレビでバラエティ番組見ても冷めた目で見てるし」

もっとおもしろいのがすぐ近くにいますから。作られた笑いには限界があるし。

「ドラマとかで笑うところなのになぜか涙ぐんでるし」

周りの人に苦勞させられている人を見ると感情移入してしまつて「びつくり人間とか見ても驚かないし」

リアルびつくり人間つてのは、内面がびつくりなんだとこの一ヶ月で学んだからな。

「変になつたと自分でも思わない？」

……反論できない。

「……てことを言われたんだよ」

AKR（姉に恐怖する連合）会員、義人に携帯でこの話を報告した。

「旦那、きっとそれは旦那を心配してんだよ」

「そうだな、パシられる回数も大学行く前より減つてるし、姉ちゃんも成長してるんだな」

「俺のところも昨日珍しく>アニメイト<に自分で行つたんだよ。前は俺に行かせてたのに」

「大学行つて心が広がつたんだな、きっと」

「そうだいいいな」

「……悪い、姉ちゃんから呼び出しくらつた。また何かやらされるらしい」

「俺もこれから>のだめカンタービレ<買いに行かされる」

「……お互いまだ大変だな」

「お互いにな」

「最後にいつもの言つとくか」

「そうだな、せーの」

「いつかきつと見返してやる」
情けない二人の声が重なった。

「……いつになるんだろうな……」
「……俺そんな日來ないんじゃないかと思う……」
「……そう思ったら負けだ……」
いつまでたっても姉に逆らえない、駄目駄目な二人だった。

第二十九話 トランプ

寒中水泳という名の拷問も今日の分は終了し、俺たちは部室でトランプ（田村が持ってきた）をしていた。ちょっと前までは泳ぎ終わった時には死にかけていたというのに、人間というものは成長するのだなあと思う。これからの人生に役立つ成長かどうかは微妙だが。

松田「次、何する？」

今までやっていたババ抜きにも飽きてきたところだし、変えるか。

片山「ポーカ―は？」

浜口「何か賭けるのか？」

田村「……小倉さんがいつ帰ってくるかもわからないのに、そんなことをするのは無謀」

おれ「……確かに小倉さんに見つかったら、えらいことになりそうだな」

小倉さんはあんな顔して優しいところがある（最近ようやくわかってきた）ため、賭けごとを見つかっても停学などにはしないでくれると思う。……ただ、翌日の練習は死人が出ることになりかねない。そういう意味でのえらいことくだ。

杉田「銀行は？」

松田「ルール知らん」

浜口「七並べは？」

おれ「スペースが狭すぎるな」

田村「……神経衰弱」

杉田「それもスペースがないな」

石井「なら大富豪はー？」

松田「いいな」

片山「いいね、でも人数多くない？」

水泳部一年男子は総勢七人。確かに大富豪をやるには多いかもし

れない。

石井「階級も増やせば、おもしろくつていいんじゃないー？」

おれ「大富豪の上つてことか？」

杉田「あと大貧民の下だな」

浜口「そうだな、面白そうだ」

全員意義はない様子だった。

松田「なら階級名はどうする？」

片山「まず大富豪の上だね」

杉田「>神くだな」

種族をも超越！？

石井「いいねー」

おれ「いいのか！？平民 富豪 大富豪ときて、次が神だぞ！？明らかに言いすぎだろ！？」

浜口「いいな」

片山「いいよ」

松田「異議なし」

おれ「みんな目を覚ませ！奴らのペースに巻き込まれたら駄目だ！」「階級名>神<に反論していると、田村に背中をたたかれた。

田村「……………」

おれ「た、田村……。お前はわかってくれるよな……………」

田村「……俺も賛成」

おれ「うわああああああ」

最後の砦も崩壊した。よく考えたら田村も北高生だった。

杉田「旦那、トップは>神<でいいな？」

おれ「……好きにしてください……………」

なんかもう疲れたよ…………パ ラッシュ…………。

廃人みたくなつた俺を無視して会議は続いた。

杉田「大貧民の下はどうする？」

浜口「一番上が>神くだからな……」

片山「インパクトが欲しいよね」

……そんなものいらないから妥当なところで落ち着いてくれ……。

石井「ひとつ思いついたよー」

杉田「よさそうか？」

石井「結構ねー」

松田「おいおい期待持たせるなよ」

田村「……それでその階級名は？」

石井「階級名はー」

……階級名は……？

石井「……>エロ大魔王くだよー」

おれ「待てえええええい！！！」

突っ込みを入れるために、俺復活。

おれ「>エロ大魔王くって何だよ！？>神くの反対にしたいなら>魔王くだけでいいだろ！？>エロ<の部分の意味がまったくわからん！平民 貧民 大貧民ときて最後だけ>エロ大魔王くって！？

ビリになった人可哀想にもほどがあるだろ！トランプで>エロ大魔王く呼ばわりされる人の身にもなってやろうよ！？」

杉田「お疲れ、旦那」

石井「それでいいー？」

無視ですか。俺の突っ込みは。

松田「オツケー」

浜口「異議なし」

片山「おもしろいね」

田村「……よし」

石井「というわけだけど、三井はいいー？」

おれ「……好きにしてください……」

民主主義なんて嫌いだ。

その後の会議で、>神<は>エロ大魔王<と三枚トランプを交換すること、ローカルルール（八切りや階段革命など）を使用すること、>エロ大魔王<がトランプを配ること、水泳部内ではこのゲームを>大富豪<ではなく>エロ大魔王<と呼ぶことなどを決めた。

……>エロ大魔王<、権力低っ！

杉田「じゃあ始めるか」

ちくしょう、この鬱憤を>神<になって晴らしてやる。

松田「>エロ大魔王<はトランプの切り方がエロいなあ」

浜口「>エロ大魔王<は配り方もエロいなあ」

おれ「……ちくしょう……」

部室には、見事>初代エロ大魔王<を襲名した俺の姿があった。

>エロ大魔王<は何をするにもエロいと言われなければならないらしい。……いじめだ。

おれ「次は絶対のし上がって>神<になってやる……！」

杉田「はやく配りたまえ、>エロ大魔王<」

義人に顎でこき使われることになるとは……。恐ろしいゲームだ。

ちなみに>エロ大魔王<はこの後北高水泳部の恒例行事となった。

第二十九話 トランプ（後書き）

第30部分にしてようやく60分……。一話二分の短い小説ですが、まだ続けると思うので読んでやってください。

第三十話 宿題

県立豊橋北高等学校 通称北高は、県内公立校では五指に入る進学校である。県立高校であるがゆえに、他県から成績のいい生徒を引っ張ってくるようなことはできない。それなのになぜ好成績を維持しているのか 答えは明瞭である。勉強量が多いのだ。他の一般高校に比べて宿題も多い。だから自分のような存在が出るのもやむを得ない、いや必然なのだ。悪いのは自分ではない。大学入試の合格率を上げるため生徒に無理難題を課す、今の教育制度がすべての諸悪の根源なのだ。

「だから宿題見せてくれ、旦那」

「何を言おうと宿題をやらんのはお前の責任だ。自分でやれ、馬鹿」

ゴールデンウィーク最終日。俺たちは午前中に小倉さんの地獄のメニューを泳がされた。その練習が終わった後、小倉さんは教師らしく尋ねてきた。

「お前ら、宿題終わつとるか？」

その言葉にわかりやすく反応を示したのは三名。浜口、片山（推薦入試組）と義人（一般入試組）である。視線を逸らして口笛吹くな。不自然にもほどがある。

「終わつたらん奴が何人かあるようだ……。部室解放しておくから、ここでやりたい奴はやってもいいぞ」

「先生！別にここでやらなくてもいいですよね！」

「浜口、片山、杉田はここでやれ」

「なぜに!？」

「四月の提出率が極端に悪いと佐藤先生（数学）から連絡があった」「サッティー（佐藤先生のあだ名）め……」

「あと一人誰が残って勉強見てやれ。では今日はこれで解散」
残り四人で誰が教えるか相談したが、結局みんなで集まって、暇なときはトランプでもしておくということになった。さすがに四人では>エロ大魔王<はできないが。

一旦帰って一応自分の宿題を持ってくると、義人が理屈をこねて宿題を見せるとこねてきた。冒頭の会話がそれである。

「いいじゃねえか、減るもんじゃなしに」

「どこの不良だ、お前は」

「宿題が残ってしまった理由があるんです」

「話してみる」

「ポケモン金にはまってしまって」

「いまさら!？」

「ニコ動にもはまってしまって」

「またかよ」

「>世界でいちば だめ NGな恋<にはまってしまって」

「……なんだそれは」

「エロゲー」

「お前は一人で全問とけ」

「そんな!？俺が何をしたというんだ!？」

「法律に触れる行為」

「それはともかく」

「ともかくじゃねえよ」

「宿題写させてくれ」

「より直接的になつたな」

「で、写させてくれるのか？」

「わからんところはアドバイスしてやる」

「写させてはくれんのか」

「なんで俺が努力してやったものをお前に楽させてやらんといかん

のだ」

「親友だろ」

「親友だからお前の力がつくようにしてるんじゃないか。何て友達思いなんだ、俺」

「……初代工口大魔王が」

「貴様、それを言っただけにはただですむと思っなよ」

「何をするつもりだ？」

「お前の姉さんに「義人に聞いたんですけど体重百キロ超えてるって本当ですか？」と聞いてやる」

「やめてくれ！そんなことをしたら俺はミンチにされる！」

「なら謝れ」

「ごめんなさい」

「よろしい」

「それで写させてくれるのか？」

「それとこれとは話が別だ」

部室でわいわいと一時から六時まで勉強会をした結果、なんとか全員宿題を終えることができた。三人は詰め込みすぎて大変なことになっていたが、大丈夫だろう。

「義人、明日実力テストだな」

「……ポンペイウス、カエサル、クラスス」

「がんばって平均以上取りたいよな」

「……オクタウィアヌス、アントニウス、レピドウス」

「……たぶん、大丈夫だろう。」

第三十話 宿題（後書き）

友達がToHeart2を買ったそうです。受験が終わったからって調子に乗るな！まあ作者は国立の二次を受けてないので、もっと早く受験を終えているんですが。

京都のR大学に合格したので、同類がいたらメッセージください。

第三十一話 明け

ゴールデンウィーク明けの俺のクラスは緊張感に包まれていた。実力テストが行われるため朝早くから登校して、教室で勉強している生徒が多いためだ。これから朝のホームルームが始まるうというのに手を休める生徒はいない。しきりに宿題のチェックや単語の確認をしている。教室の静寂を破るように、扉が開いた。

「うちゅーうせんかん、やー　ーとー」

……空気を読んでください、健三さん。

「最後の悪あがきをしていますね、ご苦労なことです」

担任だったらその生徒の意をくんでくれ。なんで宇宙戦艦ヤマトを歌って登場するんだ。久しぶりに聞いた担任の第一声が「宇宙戦艦　マト」って意味わからないにもほどがある。

「あなたがたはこの休みで十代の青春を満喫したことでしょう」
俺は泳いでばかりだったか。

「……ちっ」

今舌打ちしたよこの教師！

「私は家族サービスに努めていたというのにいい気なものです」
そうなのか。たしか小学生の娘さんが一人いたはず（石井情報）
だしな。

「家族で健康ランドに行きましたよ」

もろ自分の趣味じゃん！

「娘も満足してましたよ」

渋いな、健三さんの娘！

「風呂に浸かった後はあれも飲みましたしね」

あれか、コーヒー牛乳か。

「リポビ^{デー}ンD」

風呂の後に！？

「娘はオロナミ^シ C飲んでましたけどね」

明らかにこの人の変な血をひいてる！？

「そんなこんなで大変な休日でしたよ」

むしろ充実した休みだろ！世間一般のお父さん方に謝れ！

「もう時間ですね、筆記用具以外は鞆にしまってください」

しまった！健三さんに気を取られて最後の追い込みができなかった！

「最初は私が作った現代文です。家族サービスが原因で時間がなかったため、テキストです」

この高校教師テキストとか言っちゃったよ！

「てへ」

てへ じゃねーよ！

「魔が差してやった。反省はしていない」

誰か教育委員会に通報を！駄目だこの人！

「ではテストを配ります」

流れ無視！？

「テストを始めてください」

「テキストとか言った割に健三先生のテスト普通だったな」

「難しくも易しくもない平凡なやつだったな」

「誤字脱字もないし……何がテキストだったんだ？」

そこで本人に聞いてみた。

「ああ、一時間で作ったからですよ」

……一時間であの出来映えのテストを作るっておい。

「面倒だったんで」

……この人実は相当の天才じゃないのか？

「次の連休はまだまだ先ですねえ」

……健三さん、あんた何者なんだ……。

第三十二話 委員会

俺は図書委員会に所属している。北高では委員会や係など何かの仕事を一入一つやらなくてはならないので、読書好き（歴史小説から推理小説、ライトノベルから新書まで何でもこなす。悪く言えば雑食）な俺としてはなかなかの選択だ。図書委員会には俺と同じような読書好きが多く集まるに違いない。そして読書好きに悪い人はいないだろう。この論理から導き出される答えは一つ。そう、図書委員会にはまともな人が集まるだろうということだ！

「ついに北高内に安息の場所ができるんだ……」

初の図書委員会の集まりがあると聞かされた時、俺は思わずそう呟いていた。連絡をしていたHR会長（健三たんにんさんは会長に連絡を押し付け、職員室で休憩中ティータイム）が怪訝な顔で俺を見ていたが気にしない。俺に安息の地ができるのだ。そんなことは些細な問題だ。

「三井君って時々変になるよね」

「やっぱりあの杉田君と石井君の仲間だもんね」

……こんな声が聞こえても気にしない。目から塩分の混じった水が出てきてるのも、きつと些細な問題だ。がんばれ、俺。昼休みまでの辛抱だ。

そして昼休み。俺は図書室にいた。図書委員に眼鏡をかけた人が多いのは、きつと本を読みすぎて目が悪くなったひとが多いからだろう。

「では第一回図書委員会を始めます。最初の議題は図書委員一年の仕事の分担です……」

この後、仕事の分担を進めていったのだが、それは実にスムーズに進んだ。俺は月曜日にカウンター当番（図書の貸し出しと回収）

と新聞記事の切り抜きをすることになった。やはり俺の思った通りだ。図書委員会にはまともな人ばかりなんだ……！

「では次の議題です。>BLEACH<の>日番谷<君を好きになるのはシヨタコンに当たるかどうかです。本日のメインの議題となるので真剣に考えてください」

……なんでやねん。

「ねえねえ、それってどういう意味？」

隣の人が俺に尋ねてきた。……この人はまともな人だろうか。ほとんど人を信じられなくなっていく自分が怖い。

「シヨタコンっていうのは男の子を偏愛すること。BLEACHはジャンプの漫画で、日番谷っていうのは長い年月生きてるけど見た目は子供な死神のことだ」

「へー、漫画とかくわしくないから知らなかったよ」

……ジャンプの漫画を知らないくらいだ。俺はこの人をまともな人だと信じてもいいのかもしれない。

「俺、三井。お前の名前は？」

「細貝だよ」

「図書当番いつ？」

「月曜日だよ」

「なら俺と一緒に曜日だな。一緒にがんばろう」

「よろしくね」

「メールのアドレス教えてもらえるか？」

「いいよ。そっちもちょうだい」

「わかった」

そう言って二人とも携帯を取り出したのだが、細貝の携帯に張つてあるシールが気になった。……どこかで見たことのあるマークだ。この高校に入ってから鍛えられた嫌な予感リーダーが警報を鳴らしている。聞いてはいけけない。恐ろしいことが起きてしまう……。

「なあ、そのマークって何だっけ？」

それでも問わずにはいられない性格（義人には＞天性の突っ込み体質と呼ばれている）が今は非常に恨めしい。そんな俺の葛藤を知らず、細貝は何の悪意もない表情でこう告げた。

「＞ネルフだよ」

＞ネルフ＜

アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」に登場する特務機関。正体不明の敵・使徒を殲滅する目的の組織であり、職員の役職は軍の階級制で統制されている。おもて向きは国連に属する団体であるが、実際にはゼーレの下部に位置する組織である。　　くはてなダイアリーより抜粋く

「……携帯につけるくらいだ。エヴァオタか？」

「ネルフに将来入隊できればいいのにね」

……前略、母さん。なんか俺はもう人が信じられなくなりそうです。

第三十二話 委員会（後書き）

今日は作者の卒業式です。ごたごたして投稿できないと困るので朝早くの投稿です。三年間いろいろあったなあ……感慨深いものがあります。卒業してもこの作品は続けていくので、感想、評価をいただけるとうれしいです。

第三十三話 結成

「六月の初めにはクラスマッチがあります」

朝のホームルームで、健三さんはそう告げた。

「クラスマッチの種目は男女合わせて七種目くらいあったと思います」

>くらいとか>思うとか言うな。担任としてそれくらいは報告してくれ。

「詳しくはこの生徒会のプリントを読んでもください」
説明する気ゼロか。

「種目決めとか面倒なことはあなた方で勝手にやってください」
それって職務放棄じゃないのか？

「では、あでいおーす」

そう言って職員室に帰って行った。……仕事しろよ。

「一人一種目必ず出ないといかんから、とりあえず自分のやりたい種目に集まってくれ」

HR会長はそうやって、俺たちが出る種目を決めようと努力していた。担任があんなのだから、うちのクラスのHR会長はおそらく学年で一番忙しいHR会長だろう。……不憫だ。

「……よし、だいたいこんなものだな。この種目でみんな選手登録するけど異論はないな？」

異論などあるはずもない。あの担任にやる気がない以上、俺たちは自分たち自身でクラスの仕事をしているのだ。クラスの団結力は他のクラスとは一線を画している。仕事の進むスピードも段違いに速い。……まさかこれをねらって健三さんはあんな行動を！？

そうして決まった俺の種目はソフトボール。ソフト経験者である清水を筆頭に、土気の高さはあやしい宗教団体並みの激しさだ。

「クラスマッチ優勝するぞーっ！……！」

「……」

「他クラス蹴散らすぞーっ！……！」

「……」

「全国大会出るぞーっ！……！」

「……」

「……いや、全国大会には出ないだろ……。」

「花園行くぞーっ！……！」

「……」

「……いや、ラグビーじゃないから。」

「古川さん、好きだーっ！……！」

「……」

「どさくさに紛れて告白！？」

「童貞は悪くないーっ！……！」

「……」

「そんな力ミングアウトされても。」

「温泉は好きかーっ！……！」

「……」

「だからなんだ。」

「お前らうるせえ！……！」

「……」

「………こんなんで勝てるのだろうか。」

第三十四話 編成

クラスマッチの登録票には、名前、ポジション（暫定）、利き腕、所属する部活、この人を表わす一言（これはクラスの別の人が書く）、自分のアピールポイント、最後に一言（これは本人が書く）とこれだけを書かなくてはならない。登録したら全校生徒のそれをまとめてクラスマッチのパンフレットとしてクラスに一部ずつ配布されるらしい。……滅多な事は書けんな……。

わいわいがやがやと相談して完成した、その登録票（ソフトボールに出場するメンバーのもの）を見せてもらった。……なんかすごいことになっていた。

〈例1〉

ピッチャー

リビングレジェンド

投手 > 生きる伝説< 清水 右投右打 ラグビー部

おそらく北高最速の剛球とラグビーで鍛えたパワー

「目指せ全国！俺がいるからには打たれはしない！フォーエヴァー・ラヴを俺に！」

リビングレジェンド

スケールでさえ！生きる伝説って誰が書いた！？

……フォーエヴァー・ラヴ……全くソフトに関係ねえ！！っていうかだせえ！！

〈例2〉

キャッチャー

アンラッキー

捕手 > 不運属性< 深谷 右投右打 野球部

野球部では投手もこなし遠投100メートルを超す強肩

「清水の球を受けるのが怖え^{こえ}。じゃんけんをやり直してくれ」

……野球部でも清水の球は怖いのか……。ドンマイ。不運属性つて言つてやるなよ。

でもじゃんけんは二度とやり直さない。俺はまだ死にたくない。

〈例3〉

遊撃手^{ショート} > 超俊足の斬り込み隊長 < 柳 右投左打 野球部

50メートル走6秒を切る快速

「一番バッターとして塁に出てかき回す。じゃんけんに勝つてよかった」

……身体能力^{たけ}高え。

〈例4〉

右翼^{ライト} > 文武両道 < 原 右投右打 卓球部

獣医を目指す文武に優れた野球経験者

「怪我だけはしたくない。深谷君ドンマイ。でも捕手は変わります」

……ほんとにみんな清水の球受けたくないんだな……。

〈例5〉

控え > しゃくれ < 佐々木

しゃくれ!?

〈例6〉

控え　> 佐藤先生サツテイの天敵<　玉野

宿題は出せよ、玉野。

こんな感じでみんな書いてあった。最後に俺のも追記しておく。

ファースト

一塁手　> 珍獣ジンベ使い<　三井　右投右打　水泳部

特筆すべきところのないソフト経験者

「…………この学校の生徒がおかしいのであって、俺は至って普通だ
……………」

第三十五話 結婚

「結婚というのは、何なんでしょうね」

授業中、健三さんが語りだした。もつとも、授業を脱線するのはいつものことなのだが。

「結婚で大切なことは何だと思えますか？では清水」

清水か。何て答えるのだろうか。

「愛です！愛！誰か俺にも愛を！！」

即答か。相も変わらず暑苦しい。

「ふっ」

鼻で笑った！？

「若いですね……若い、若すぎる。あまりにも青臭くて、ついつばを吐きそうになりましたよ」

おい高校教師。その態度は問題ありすぎだろ。

「別の人に聞きましょう。原。あなたの意見は？」

真面目で獣医志望な原君だ。きつといいことを言うだろう。

「経済力です」

リアルすぎるよ！

「何事も金です」

獣医目指す人間がそれでいいのか！？

「いい答えです」

認めちゃった！この教師認めちゃったよ！！

「しかしまあ年長者として金がすべてという考えは変えさせなければなりませんね」

そうだよな。年上としてビシッと言ってやってください。

「金以外にも大切なことはたくさんあります」

それは？

「だらだらと過ごす時間とか」

……………。

「仕事をやっているように見せかけてサボる術とか」

おい。

「校長とかの長話を聞き流して別のことをする技術とか」

人はこのような人物を駄目人間と呼ぶのではなからうか。

「などなど大切なことは数多くあるのです。わかりましたか原君」
仮にも教える立場でそんなこと言っているのか？

「目から鱗が落ちました」

原君！？

「先生の言うとおりです」

目を覚ませ原君！その鱗は人として落としてはいけない大切なものだ！！

「では本題に戻りましょう」

…… 本題？…… 結婚で大切なことか。

「結婚で大切なのは結婚相手の古典の教養です」

…… なぜに？

「古来から女性は男性を立てるものとされてきたからです」

男尊女卑だな。いいのかそれで。

「だから男子諸君は古典の教養をもった女性と結婚しなさい。女子は逆です」

なるほど。それを言いたかったのか。

「センサー、センサーはそうしたんですか？」

健三さん自身はどうなんだろう。

「はい。古典の教養をもっている人と結婚しましたよ」

健三さんの体験談だったのか。

「それで今どうですか？」

きっと今幸せなんだろう。

「残念ながら結婚してからの私は邪険に扱われています」

…… 駄目じゃん。

「やはり今の時代にはそぐわないのでしょーうね」

今日の話、全面的に無駄かよ！！

第三十六話 体力テスト

「今日は体力テストだな、旦那」

「そうだな」

「今年はA判定取れるといいな」

「ああ」

去年までの俺の体力テストの判定（A～Eの五段階判定）はB、B、C、D、C、Bと一度もA判定を取ったことがない。義人は何回かA判定を取っているの、高校生の間にその身体能力の差をすこしでも埋めておきたいところだ。

「でも今年の旦那ならA判定になるだろ」

「……そうだな……」

頭に浮かぶのは小倉さんに筋トレをさせられた日々。これで能力値が下がっているわけがないだろう。というかむしろ、これで下がっていたら小倉さんを訴えたい。それほど四月は入念に鍛えられたのだ。

「……クラスごとに並んで、クラスの最初の競技に……」

スピーカーから学年放送が流れてきた。俺たちはまず外の競技からやるらしい。

「さあ頑張るか」

「怪我だけはしたくないな」

「……こんな行事消えてなくなればいいのに……」

「学年トップの成績取るぞ！」

みなそれぞれに感想を述べながら運動場へ出ていく。……感想バラバラだな、おい。

「最初はハンドボール投げだな、旦那」

「いきなり俺の得意競技だ」

小学生の時ソフトボールをした経験なめてはいけない。これでもチームでは強肩を誇っていたのだ。

「うおりゃああああー！」

「三井、記録三十四メートル」

「こんなもんか」

うむ、なかなかの好成績。そう自画自賛したのも束の間。

「うわー、清水四十メートル超えたぞ」

「今度は深谷だ。四十二メートルだ」

……あいつらの身体能力はどうなっとるんだ。

「おい、宇都宮さん女子なのに四十メートルだぞ」

……この学校何かがおかしい。いや、いまさただけど。

「旦那、五十メートル走だ」

「全力疾走せんとな」

結果、俺の記録は七秒ジャスト。全国平均七秒四。北高平均六秒八。なんでやねん。

「体育館での最初の競技は反復横とびだな」

「これはバスケ部有利だろ」

そんなことなかった。ミニバス経験者もこの学校の生徒には多いらしい。

「……動きが速くて気持ち悪い……」

気持ち悪いやつの中には義人と石井も入っている。

……普段の素行のことじゃないよ？

「握力測定だ。旦那、これで最後か？」

「そうだな」

ほかにもあつたが都合上省略。何の都合かは聞かないでくれ。
「ふおりやあああ！」

「三井、右四十キロ、左三十七キロ」

全国平均は両手の平均で四十二キロ。……憐みの目で見ろな。水泳に握力はいらないんだ……たぶん。

そんでもって最終結果。

「旦那、どうだった？」

「ついにA判定だ。これで運動も平凡だとは言わせんぞ」

「俺もAだったよ」

「よかったな」

めでたしめでたし。

……とここで終わらないのが北高である。

後日譚。全員の結果と自分の学年順位が発表された。

「……何でA判定なのに学年順位が男子百六十人中百十一位なんだよ……」

「ドンマイ、旦那」

しかも内わけがさらにひどかった。

A判定	百二十四人
B判定	十五人
C判定	零人 ^{ゼロ}
D判定	八人
E判定	十三人

「……C判定が普通だろ！零人^{ゼロ}ってどういうことだよ！A判定多っ
！極端にもほどがあるだろ！ありえねえ！」
「旦那、落ち着け。事実だからしょうがない」
「落ち着けるかあー！」

第三十七話 朝練

開催まで二週間に迫ったクラスマッチのため、俺たちソフトボールのメンバーは朝練をすることとなった。キャプテンになった清水の気合いは尋常ではなく、朝練に不参加の者にはペナルティを与えろとまで言いだした。

（回想）

「お前ら、朝練やるぞ！」

「……まだいいだろ」

「……やりたい人だけやればいいじゃん」

やる気のない俺と原君（なんか気が合うようになった）が反対する。

「いや、全員参加だ。出なかった奴はペナルティありだ」

「……どんな？」

たいていの罰なら甘んじて受けよう。金がかかるのはやめてほしいが。

「出なかった奴は幼女趣味だと言いつらす」

「「謹んで参加させていただきます」」

そんでもって朝練の集合時刻。男子十一名全員がグラウンドに集合していた。

「よし、全員揃ってるな」

清水の声が誰もいないグラウンドに響く。

「なあ、ちよつといいか」

一言だけ、どうしても言わなければ納得ができない。というかツッコミ待ちだとは思えない。あり得ないだろこんな状況。

「なんだ、三井？」

「朝五時集合は早すぎだ馬鹿野郎！！」

始発ですら動いていないこの状況で全人参加できてるのはどう考えてもあり得ない。

「三井、突っ込むなら提案した時に言うべきだろ」

「原君、こういうものは集まってから言うのがルールなんだよ」

「……どんなルールだ……」

まあそれはどうでもいい。朝練参加を強制された時点で、俺の発言権などあつてなきが如しだったのだから。

「……で、電車通学の奴らはどうやって来たんだ？」

「清水んちに泊まった」

馬鹿だ、生粋の馬鹿たちがここにいる。朝練にそこまでかけて何になる。

「……外泊は校則違反だろ……」

原君、ナイスツツコミ。いいかげんこの人数を俺一人でさばくのはうんざりしてきたところだ。ツツコミの援軍は何人いてもありがたい。

「ルールつてのは、破るためにあるんだよ！」

そんなダメなことを堂々と言われても。

「……もついいや、どうでも」

「原君！？あきらめちゃ駄目だ！いつかこの人たちだってわかつてくれる！今は努力ツツコミを続けることが大事だ！あきらめたらそこで試合終了だ！」

「……スラムダンクか」

「その調子だ！俺も頑張るから原君も頑張れ！」

「……その頑張りが報われたことはあるのか……？」

「……どういうことだ？」

「……杉田」

「……努力すればいつかきつと変わってくれるさ……。……ただ十年くらい一緒にいて、まだ目立った成果は出ていないというだけで

……」

あれ、どうしてだろう。雨が降ってきたぞ？俺の目のあたりだけ集中的に。

「……頑張れ」

「……ありがとう」

それしか言えなかった。

「守備練習始めるぞ！各自の守備位置ボジションに付け！」

非常な無気力感に襲われる中、守備練習が始まった。

「これ取れなかったら>スク水フェチくだと言いふらす！」

「うおりやああああ！」

……ペナルティありだからみんな死に物狂いだな……。

三時間に及ぶ特訓が終わりを告げた時、全員くたくたになっていた。その結果、朝練参加者の九名（俺と原君以外全員）が授業中に爆睡していた。……学生の本分は勉強だろうが。せめて起きていようとする努力はしろ。枕を学校に持ってくるなよ。

第三十八話 水泳部と二つ名

今日も今日とて悪夢のようなトレーニング（泳ぐ距離は二キロから三・五キロにまでアップ。それプラス筋トレ）を終えた俺たち水泳部一年一同は、部室で>エロ大魔王<（大富豪の強化バージョン。詳しくは第二十九話）をしながら談笑していた。

松田「そう言えばクラスマッチ何出る？」

片山「俺はバスケかな」

田村「……俺も」

浜口「俺も」

石井「僕もだなー」

杉田「俺もだ」

おれ「俺はソフトだ」

松田「……ということは、水泳部はバスケ五人にソフト二人か」

松ちゃんもソフトらしい。男子単独の種目はバスケ、ソフト、バドミントンの三つ。それと男女混合のバレーなので、男が出場できるのは四種目ということになる。その中の二種目しか出ないというのは結構偏ってるかもしれない。

片山「ならあれは？あの二つ名みたいなのやっ」

おれ「……言わないとダメか？」

杉田「旦那、なんでそんなに悲しみにあふれているんだ？」

石井「どうせ後でわかることだよなー」

おれ「……そうだな」

松田「で、みっちゃんのは何てやつ？」

おれ「……>珍獣使い<」

クラスメイトは俺のことを何だと思ってるんだ。……いや、ツッコミと思ってるのか。この学校ツッコミの人数が少なすぎる。ところ構わずボケまくってる奴が多すぎるし。

杉田「でも珍獣使いってどういう意味だろうな」
石井「ねー。ツッコミはまだわかるけどー」

杉田（珍獣その一）と石井（珍獣その二）がごちゃごちゃ言ってた。

……俺って友達選びが下手なのだろうか。

おれ「……それよりお前らは？マサとかは？」
片山「俺？俺は>笑顔の侵入者<だって。ほら、PGやるから」

いつも笑顔を絶やさず、バスケ（水泳部でたまにやる）ではドリブルで敵陣に切り込む片山らしい二つ名だな。……なんで俺とこんなに差があるんだ。訴えたい。

松田「タムは？」
田村「……>沈黙の狩獵者<。SGやるからな」

……静かに外から三点シュートを狙い打つ。……かつこいい。なんだこの不公平さ。この学校での過ごし方に問題があったのか？田村みたく周りで何か起きても無視すればよかったのか？

杉田「俺なんて>純粹な悪魔<だぜ。かつこいいだろ」
石井「僕は>混沌の天使<だって。なかなかいいよねー」

とにかくわけのわからない、矛盾した存在だと認識されているわ

けだ。うん、それは間違いない。十年義人と一緒にいても、未だに行動がつかみきれんからね。

松田「俺は捕手やるから>守備の要くだってさ。芸がないよな。もつと考えてくれてもいいのに」

おれ「ふざけるな！考えられた揚句「いいの思いついた」とか言われて>珍獣使いくにさせられた俺の気持ちがわかるか！？その時満場一致で賛成しやがったクラスメイトに憎悪を覚えるよりずっとましだろう！？」

松田「……すまなかつたから落ち着け。そしてドンマイ」
おれ「……ちくしょう……」

慰めないでくれ。余計につらくなる。

杉田「浜ちゃんずっと静かだけどどうした？」

田村「……何て二つ名だ……？」

浜口「……言わないとダメか……？」

おれ「聞かないでやってくれ」

松田「何で？」

それは、ある意味では俺のより悲惨だからだ。

石井「別にいいじゃんー。どうせ後でわかることだしー」

浜口「……武士の情けだ、頼む……」

石井「僕武士じゃないしー」

そっという意味じゃねえよ。

石井「浜ちゃんのはー」

松田「浜ちゃんのは？」

石井「>驚異的な胸筋くだよー」
全員「……………」

浜口信也。全国レベルの自由形泳者であり、その極度に発達した胸筋による水を掻く力は東海でも入賞できるレベルにある。胸筋がすごすぎて下手な女子よりも胸があるというから驚きだ。

……まさかそれに関連した二つ名がつくとは思ってもよらなかっただろうな……。

田村「……ちよつといいか」
全員「なんだ？」

田村「……みっちゃんのクラスだけ競技と関係ない二つ名ばかりだな」

……………確かに。

第三十九話 命名

「だんな、舌で嘗めろ」

「みついいー、踏みつけろー」

「だんな、噛みつけ」

「みついいー、暴れろー」

「だんな、毒ガスだ」

「みついいー、悪あがきだー」

「…………お前ら、ポケモンに人の名前つけるな!!」

今日は石井の家に義人と二人招待された。石井には兄弟姉妹がないらしく、近くに年の離れた従弟（小学校低学年）がいて、時々遊びに来るくらいだそうだ。

…………こいつの近くにいと変な菌が感染するから、近くに寄らせないほうがいいと提言すべきだろうか。

「何でだよ、別にいいじゃん」

「そうだよー、減るもんじゃないしー」

「俺の精神が磨り減るわ！特に義人！何でベトベトンに>だんなくなんてつけるんだ！？俺のどこが毒だって言うんだ!？」

「毒舌」

「……………」

旨いと思ってしまった俺は負けたのだろうか？

「それにベトベトンだけじゃないしな」

「…………なんだって？」

ゲームの画面を覗き込むと、そこには>だんなA<>だんなB<>だんなC<…………といったように>だんな<の文字が組み込まれて

いた六体が縦一列に並んでいた。……シュールだ。

「毒ポケモンとかギャラドスとか嫌な感じのやつばかりだな……」
「それはあれだ、旦那。旦那のイメージ」

実に嫌なイメージを持たれていたものだ。まあ俺がポケモンに>義人<と名づけるとしたら、筆頭候補はメタモンだが。謎な感じが正にそっくりだ。対抗馬はアンノーンといったところか。

「石井も石井だ。バンギラスなんか俺の名前をつけるんじゃない」
「えー」

えーじゃねえよ。悪っぱさ満載じゃねえか。しかも一体一体微妙に名前を変えるな。何だよ>ミツイー<とか>ミーツイー<って。他のに紛れこませたらわかんなくなるような名前じゃねえか。

「まあいいや、イツシー、第二ラウンドは旦那なしでいくぜ」

「いいよー、かかってきなさいー」

「行けっ、>アヤノA<っ！」

「まてや」

綾乃とは義人のお姉さんの名前である。

「お前今度は姉シリーズか？」

「ああそうだ」

画面に映っているのはカビゴンである。初期ポケモンでは最重量として名をはせた、素早さの遅い眠ってばかりのポケモンの。それ以外にはカイリキー（力が馬鹿強いポケモン）やルージュラ（悪魔のキッスを使う気持ち悪いポケモン）などがいた。

「……知られたら怒られるんじゃないか……？」

「うるさいぞ、旦那。ゲーム内くらい使役者になってもいいじゃないか！現実であれだけこき使われてるんだ。罰は当たらないだろう」
「……天罰は下らないだろうが、人災に襲われないことは祈ってる」

もちろん義人のお姉さん（柔道有段者。かなりの重量級らしい）による人災である。

「スギ、がんばれー」

対戦相手の石井にも慰められていた。姉の話をする俺たちは、人の目にはよほど可哀想に映るようだ。……実際悲しいし。

後日、義人のお姉さんが帰省した時に発覚して、義人が心と体に癒しきれない傷痕を残されることとなるが、それは又別の話である。

一万アクセス突破記念 奔放教師山本健三の華麗なる半生（前書き）

一万アクセス突破です。読んでくださった皆さんのおかげです。あんまりいつもと変わらない気しますが、本文をどうぞ。

一万アクセス突破記念 奔放教師山本健三の華麗なる半生

～出生時～

父弘志、母良子の一人息子として愛知県の一地方の病院で生まれる。命名健三。

その日、看護婦数人が窓の外に>激しく光る何か<を見る。

看護婦Aの証言「それは病院の敷地内に落ちたように見えたがよくわからない」

看護婦Bの証言「>光る何か<は見ていないが、掃除中にお札ふだを見つけた」

看護婦Cの証言「健三君は生まれてすぐに目を開いていた」

～幼少期～

母良子の証言「始めて話した言葉は>あんらくし<」

父弘志の証言「昔から絵本など本ばかり読んでいた」

二歳の頃、>健三失踪事件<が発生。数時間後、家から離れた駅近くの本屋で発見。

通行人の証言「一緒に大人がいないので変だとは思った」

店員Aの証言「一人でこの店に入ってきてずっと座り読みしていた」

店員Bの証言「読んでいたのは絵本ではなく小学生向けの本」
警官に保護され、理由を問われるも「もくひします」の一点張りで何も話さず。

～幼稚園児時代～

保育士Aの証言「この時すでに吉川英治の本を愛読していた」

保育士Bの証言「孤立しがちだったがそれを気にする風ではなかった」

六歳頃、>健三愛読書廃棄事件<発生。少年らが健三の本を無断で廃棄。

数日後、首謀者の少年は原因不明の失語症となる。

理由を尋ねられるも青ざめるばかりで情報を与えず、数日後転園。転園後は言葉を回復するも、理由は決して明かさなかった。

健三の関連は不明である。

～小学生時代～

授業で書いた詩や文が数々の賞を受賞。各学年で教師から>神童<の名を受ける。

しかし授賞式には出席せず。大いに顰蹙を買つも気にする素振りを見せず。

当時の友人の証言「>面倒くさい<が口癖だった」

当時の担任の証言「国語力がずば抜けていた。きっと大人物になると思った」

～中学校時代～

生徒会選挙の応援演説を頼まれる。「面倒くさい」と嫌がるも六法全書で買収。

校長が直々に褒めるほどの名演説を披露。応援された生徒は見事当選する。

三年時には六法全書の大半を記憶。将来を期待される。

しかし九月>第二次健三失踪事件<発生。>探すなく<のメモを残し消失する。

半月後何事もなかったかのように帰宅。この半月は謎のままである。

三月、高校をいくつか受験。有名校含む全てに合格するも一番近い高校に進学。

理由を「通学が面倒くさい。受験したのは気分」と語る。

～高校生時代～

文系科目では全国区の実力を誇る。理系科目（主に数学）では追試も受ける。

当時の発言1「「数学をやったおかげで幸せです」なんて聞いたことがない！」

当時の発言2「数学？食べられるんですか？」

二年時＞文化祭中止計画くを練る。生徒集会では役員と大議論。

「文化祭の準備なんて面倒くさい」を信念に華麗な話術で議論を有利に展開。

しかし数の暴力により敗北。このころから＞言葉の魔術師くと呼ばれる。

三年時には多くの有名私大への推薦を進められるも辞退。

家から通える教育大学に進学。理由は「教職は食いつぶれがなから」

～大学生時代～

文学サークルに所属。＞本山蔵兼くの名で某文学賞佳作を受賞。成績はいいものの対人関係に難あり。

教職には向かないのではと指摘を受けるも教員免許を取得。見事高校教師となり公立高校に赴任。

～若手教師時代～

早くも自分はほとんど指導をせず生徒に丸投げする現在のスタイル

ルを確立。

当時の生徒の証言「先生が何もしないから自分たちでやらざるを得なかった」

二度目に赴任した高校で>終生の敵ライバル>竜虎くと称される藤田先生と邂逅。

生徒の自主性を重んじる（つまり自分は何もしない）ことで反感を買う。

>読書感想文の是非<>宿題の存在<などをめぐり対立は悪化。
しかしこの二人のクラスだけ極端に成績が良いという謎の現象で沈静化。

藤田先生の転任で>第一次藤山戦争<は終息。

〳中堅教師時代から現在〵

初のお見合いを経験。出会ってから数分でプロポーズする。

「古典の教養はありますか」

「……はあ、学生時代にやりましたけど」

「結婚しましょう」

「……はあ？」

結局、数度デートを重ね、結婚ゴールイン。夫婦仲は上々らしい。

四度目の転任。藤田先生との再会。ここに>第二次藤山戦争<勃発。

「……そして現在に至るんだよー」

「突っ込みどころが多すぎて突っ込みきれんな」

なんでお前がそんなこと知ってるんだとか証言はどうやって取ったとか。

特に健三さんの行動には突っ込みきれん。

「俺たちってすごい人が担任なんだな、旦那」

「そうだよなー、かなりの変人だよなー」

「お前らが言うな」

こいつらもそのうちに伝説になるんじゃないかと考えてしまっただった。

第四十話 頼み

「杉田、確かあなたは古典の文法テストで赤点でしたね」

「はい、そうです」

「追試は受けたくないですよね」

「それはもう。できそうな気配が感じられないですし」

「それなら明日の朝七時半に職員室の私の机にきてください」

「何するんですか？」

「来ればわかります。あともう一人誰か呼んできてください」

「はい、わかりました」

「それでは頼みましたよ」

「……というわけで明日の朝一緒に来てくれ、旦那」

「……どう考えても面倒事を頼まれそうなんだが」

「いいじゃんか、貸しがあるだろ」

「貸しはあるかもしれんが、それを言ったら俺のほうが超過貸出だ
ろ」

延滞料金も加算して、義人の信用バンクは破産寸前だな。

「それは置いておいて」

「それじゃ、別の人に頼んでくれ」

「三井直樹君は小学校五年生のバレンタインデーの時に」

「黙れ！！それを喋るんじゃないやねえ！！！！」

学校で大声出しやがって。その忘れたい過去トッスリーに入る
ことを他の誰かに知られたらどうしてくれるつもりだ。

「今までも黙ってきただろ。だから手を貸してくれ」

「……わかった。その過去は一刻も早く忘れるように」

「善処する」

「忘れる気ないだろお前」

まあなんだかんだいって秘密にしてくれてはいるのだが。

そして翌朝。

「てめえ義人俺に手伝えと言っておきながら寝坊してんじゃねえーっ！」

「ドンマイ」

「お前が言っな！」

「いやー、谷川先生に土まんじゅう（円形の芝生。寝ころぶと浪人するという恐ろしい伝説がある）の芝刈り頼まれましてね」

「断らなかつたんですか」

「だってあの先生柔道三段ですよ。英語教師なのに」

「暴力に屈したんですか」

「それより先生、この掃除手伝ったら追試なしにしてくれるんですよー！」

「はい、適当に小テストの点数いじっておきますから」

おい教師。それでいいのか。絶対いけない行為だろ。

「話は聞いたな、旦那。俺のために芝刈りに励むのだー、はっはっは」

うぜえ。

「……旦那、何を思ったのか知らんが、無言で喉突きは反則だろ……」

……

「うるさいわ馬鹿野郎」

「仲いいんですねえ」

「……先生、目の前でいじめが起きてますよ、助けてください」

「先生、朝のHRホームルームまであまり時間もないですし、てっとり早く済ませましょう」

「そうですね、三井」

「何この扱い！？ひどい！生徒いじめだ！
自業自得という言葉を知らなのか、馬鹿。」

第四十話 頼み（後書き）

いつも通りの生活です。感想、ご要望、特に評価をお待ちしています。褒めると伸びる性格なのでよろしくお願いします。

第四十一話 意見

「来週には中間テスト、それが終わればクラスマッチがあります」
帰りのHRでは、今日の健三さんの連絡が終わろうとしていた。

「そのクラスマッチには、クラスユニフォームでの参加が認められます。その詳細についてはHR会長、後で皆さんに説明してください。さようなら」

そう言って職員室へと帰って行った。この説明も本来担任の仕事ではないかと思うのだが、それについては突っ込むまい。何しろ健三さんなのだ。

「では代わって説明します」

HR会長も動じず、いつものように代わりを務めていた。……不憫だ。

その不憫なHR会長の話によると、クラスユニフォームというのは、クラスマッチ、文化祭、体育祭などで使用する、Tシャツなどの服だそうだ。遠目からでも学年とクラスがわかるようにと考案され、デザインは自分たちで考えるらしい。

「抽選の結果、私たちのクラスユニフォームの色は紫色となりました」

また毒々しい色だな、おい。

「デザインの案はありますか？」

紫か……難しいな。紫陽花とかそういうのか？

「ファンタのグレイプの缶をイメージしたやつとか」

「インパクトが足りないですね」

確かに、インパクトは必要だよな。

「ならこれはどうだ？」

「はい、杉田君どうぞ」

誰かと思えば義人か。何かいい案でもあるのか？

「それはだな……」
ふむふむ。

「>血を流したピツコロくだ!!」
インパクト!!っていうかグロいわ!!
候補にしておきましょう」

「いいのか!?それでいいのか!?
ほかに意見はありますか?」

「ポケモンのベトベターはどうだ」
「ゲンガーも捨てがたい」

「いつそのこと工場の廃棄水にしたらいんじゃないか」
お前らにまともに考えるという選択肢はないのか。

「旦那、俺たちはいつでも真面目だぜ」
なおさら悪いわ。

その後の会議で、何とか>血を流したピツコロくではなく>バイ
キンマンくをデザインとすることに決まった。……著作権とかの問
題はいいのだろうか……?

クラス会議も終わり、部活に行くと、テスト前だというのに大量
に泳がされた。息も絶え絶えになりながらも完泳すると、小倉さん
の話が待っていた。

「これからテストになるが、毎日一・五キロは泳ぐように」

「……テスト週間は原則部活禁止なんですけど……」

「気にするな。生徒指導部長は俺だからなんとでも誤魔化せる」

「……大人ってずるい。」

「

第四十二話 一週間

テスト一日目 現代文 数学Ⅰ 家庭科

「旦那、どうだった？」

「比較的楽な教科だったな」

「えー、現代文は結構難しかったよー」

「確かにそうだな」

「……お前ら、あの問題は問題集に出てたやつだぞ」

「不意打ちだよなー」

「ああ、卑怯だ」

「……問題集から出して卑怯なら何が正々堂々なんだよ……」

テスト二日目 英語^{リーダー}R 情報 古典

「イッシー、あの情報のテストは生徒を馬鹿にしてるよな」

「そうだねー、あんな簡単なのじゃテストの意味ないしー」

「もっと難しくすべきだよな、生徒を見くびってる」

「そうだよなー、もっとプログラミングとかー、やってて面白いやつにすればいいのにー」

「……お前らネット廃人と一般人を一緒にするな」

「十分難しかったわい。」

「旦那は勉強不足だな」

「そうだよー、日頃からもっと勉強してないからだよー」

「お前らは勉強の内容が偏りすぎだろ……」

テスト三日目 日本史/地理 英語^{グラマー}G 化学

「今日はテストが二科目しかなかったのに、ずいぶん長く感じたな！」

「旦那、現実逃避はやめろ。無駄な抵抗だ」

「そうだよー、どうせ追試はあるんだしー」

「ぐはっ」

「旦那が吐血！？」

「三井もどんどん変になっていくねー」

お前が言っな。

「化学なんて将来使わないのにどうして習わんといかんだ！」

「……旦那、子供みたいだぞ」

「ちくしょー！今日は全力で泳ぐぞー！」

「明日もテストはあるのにー？」

「それでもだ！頭の中が白くなるまで泳ぐぞー！」

「……旦那が自暴自棄に……」

テスト最終日 漢文 数学A オーラルコミュニケーション 英語OC

「旦那、どうだった？」

「……全身がだるい……」

「それはあれだけ泳げばねー」

「で、テストのほうは？」

「OCは駄目だった……が他のはそこそ良かったな」

「よかったねー」

「旦那、これで心おきなく小倉さんのメニューに打ち込めるな」

「……………」

「一週間近く指導してないからー、小倉さんもたまってるだろうねー」

「さあ、行こうか旦那」

「……待て、俺は昨日の練習でかなりばてているんだが……」
「それは小倉さんには関係ないだろうねー」
「どんなメニューになるか楽しみだ。涙が出るほどに」
「……………」

その日、小倉さんは喜々とした表情で俺たちに五キロ泳がせたのだった。

「先生！三井が沈んでいます！」
「引き上げとけ」
「大丈夫かみっちゃんーっ！」
「………幸い大事には至らなかった。」

第四十三話 練習試合

「クラスマッチを来週に控えたということで、練習試合を行う!」
俺たち一年七組ソフトボールチーム>流血のピッコロたち<(命名清水)のキャプテンである清水はそう言い放った。

「いつだ?」

「今日の昼休み」

ちなみに今は二限後の十分間の休憩中。北高は午前中は三限を行う。

「えらく急だな」

「相手は?」

「一年八組」

「強いのか?」

「それは後で自分たちで確かめろ」
それはごもつともだな。試合つてのは強さを図るためにやるようなもんだし。

「各自ウォームアップはやっておくように」

「了解」

さてどんな試合になることやら。

そして昼休み。

「これから一年七組と一年八組の練習試合を始めます。礼」

審判(他のクラスの野球部に頼んだ)の合図で試合開始。俺たちは後攻となった。先発は清水である。

「フルパワーでいくぜ!!」

「やめてくれ!」

悲痛な声がグラウンドに響いた。敵チームの悲鳴ではない。キャッチャーの深谷の叫び声だ。……清水の球、痛いもんな。ご愁傷様。

試合経過は省略するが、結果。9 - 0で俺たちの勝利。相手チームの野球部でも清水の球をクリーンヒットにはできず、俺たちはソフト経験のない相手ピッチャーの棒球を打ちまくるといっ一方的な試合展開となってしまった。相手ピッチャーは半泣き。ごめんなさい。

「相手が弱すぎていい試合にならなかったが仕方がない！批評を行う！」

あれだけ打っておいてそこまで言うか、清水よ。相手可哀想すぎるだろ。

「まず一番、柳！一番なのにホームラン打つバッティングしてんじやねえ！」

「はい、すいません！」

「そんなんじやこのチームは甲子園に行けねーぞ！」

いや、行こうとしてないから。

「以後、気をつけます！」

「次、二番小坂！苗字に＜小＞が入ってるのになんで180センチもあるんだ！」

試合と関係ねえ！しかもいまさらかよ！

「以後、気をつけます！」

どうやって!?

「次、三番俺！二本のホームランは立派です。よくできました」
自分には採点あめえ！

「次、四番深谷！俺の球受ける時いちいち顔をしかめるな！」

「無理だ！」

……だよな。

「次、五番……………」

「次、七番三井！打て！」

俺の今日の打席は送りバントと四球。^{フオアボール}打っていないのは事実だ。

「以後、気をつけます」

「次、八番……………」

「批評は以上だ！クラスマッチ優勝するぞ！」

「「「おおーっ！」」」

「声が小せえ！優勝するぞー！」

「「「おおーっ！！！！」」」」

「うるせえー！」

……………こんなんで大丈夫なのだろうか……………。

第四十四話 開幕

「えー本日は晴天となり、絶好の競技日和であります。しかしクラスマッチだからといって北高生にあるまじき行為に及ばぬよう、節度のもった試合や観戦を……」

せっかくのいい日和が校長、あんたのせいで台無しだ。節度をもつて、とつと話を終わらせてくれ。誰も聞きたいと思ってないから。

「うーん、待て待て、一人ずつだ……」

義人は立つたまま寝てやがる。無駄な能力だ。だがうらやましい。俺も寝たい。どんな夢を見ているんだか。

「はっ！大吟醸！」

……どんな夢だったんだ？

「……………」

健三さん。あんた教師だろ。校長の話くらい聞け。なに普通に読書してんだよ。

「……………」

かと思つたら本を閉じて運動し始めた。何するんだ？

「……………」

なぜにムーンウォーク！？しかも上手い！

「……このように去年の佐賀北高校は優勝したのですが、これは必然だったと言えるでしょう。佐賀北高校の生徒に負けぬよう、がんばってほしいものです」

ようやく校長の話が終わった。他に気を取られて全く内容を覚えていないが。

その他もろもろの話（ルール確認やごみをどうするかなど）も滞りなく進み、最後に生徒会長の開会のあいさつが残った。台に上る

生徒会長。

「お前らーっ！クラスマッチが楽しみかーっ!?」

「「「おおおおおーっ!!!!!!!!!!」」」

なんだこのハイテンション!?

「準備はできてるかーっ!」

「「「おおおおおーっ!!!!!!!!!!」」」

確かにグラウンドに白線とかはすべて書かれているが。

「それもほとんどの準備をこなした執行部のおかげだ!わかってるかーっ!?」

「「「わかってます!!私たちはあなた様の奴隷です!!」」」

なんだこの儀式!?

「ではまず俺の足を嘗める!」

「「「調子に乗るな。屑が」」」^{クズ}

「……申し訳ございません」

なんだこれ!?しかもなんでみんな声がそろってるんだ!?打ち合わせとかしたのか!?>奴隷とか>屑^{クズ}とかの声がそろってあり得ないだろ!?

「旦那、そこはフィーリングで」

「この学校の生徒は心まで読めるのかよ!」

恐るべし、北高生。俺はまだこの生徒たちのハイスペックを測りきれていないようだ。

「それではここに>ドキドキ!?俺の北高ハーレム化計画<……じやなかった」

何考えてるんだ生徒会長!?

「ここに>燃えよ北高!春の全校クラスマッチを開催する!」

「「「おおおおおーっ!!!!!!!!!!」」」

ついに開幕したクラスマッチ。俺も気合いが入ってきた。

「はあ、面倒くさい」

……健三さん。生徒のテンションが下がるようなことを、クラスに聞こえる距離で呟かないでくれ……。

第四十五話 一試合目

我が一年七組ソフトボールチームの初戦は、最上級生である三年五組だった。

二、三年になると理系と文系に分かれるので、一組から四組は理系、五組から八組は文系になるそう。そして男子は理系に多く、文系には少ない。つまり三年五組は男子の数が少なく、戦力が少ないということだ。おまけに石井の情報によると、三年五組はバレーに戦力が集中しているそうで、ソフトのチームは戦力外通告者で構成されているらしい。

この状況で負ける可能性は限りなく低いだろう。清水の檄にも自然と力がこもる。

「お前らあ！初戦で負けたら洒落にならんぞ！！」

「「「おおおおおーっ！！！！」」」

「先輩だからって手え抜くんじゃねえぞ！！」

「「「おおおおおーっ！！！！」」」

「これに負けたら残りの今学期の行事はテストだけだぞ！！」

「「「おおおおおーっ！！！！」」」

中間テスト、清水の赤点の個数は八つらしい。頑張れラグビー推薦合格者。

「追試なんかいらないだろ！クラスマッチよ終わらんでくれ！！」

こらこら。私情が入ってるぞ。原君なんて学年三百二十人中十位なんだから。ちなみに俺は九十六位。追試は化学だけだ。

「そんなわけで、全力で優勝してやるから足引っ張るなよ！！」

「「「おおおおおーっ！！！！」」」

……エラーしたらジューズ一本奢り（チーム全員に）とか言っただけど本気か……？本気なんだろうな……。目が血走ってたし。どこの狩猟民族だ、清水は。

「一回戦を始めます。両チーム集合」

審判を務めている二年の野球部（審判は各部活のメンバーが駆り出されている）がやる気なさそうに集合をかけた。三年五組は黒のクラスユニフォームだ。

「では一年七組＞流血のピッコロたち＜VS^{たい}三年五組＞黒の二ーソックスって萌えね？<の試合を開始します」

……こんなチームに負けたら切腹ものだな。コールドでちゃっちやと終わらせよう。

試合は予想通り俺たちの優勢（18-0。三回裏相手の攻撃）で進んでいた。相手は清水の吠えながらの気迫の投球に圧倒されたのか、今のところ完全試合に抑えられている。

「サッティー（数学の教師）きえろおーっ！……！」

それは言いすぎだ。サッティーは頑張ってるよ。

「小林（化学の教師）死ねえーっ！……！」

気持ちはわかる。追試やめろ。七十歳だろ。早く引退して墓場^{おうち}へ帰れ。

「辻さん好きだあーっ！……！」

今清水は何連敗中なんだろう。俺が知っている限りでは三回ほど振られていたが。

「ゲームセット。集合」

くだらないことを考えているうちに試合が終わった。外から「ごめんなさい！」の声も聞こえる。清水個人の戦いは、試合にすらならなかったようだ。どんまい。

「……ありがとうございました」「」

清水が泣いている。勝ったのに。相手チームにまで慰められてるな。勝ったのに。

「……試合に勝って勝負に負けたんだな……」
いや、勝負の時と場所を選べよ。

第四十六話 バスケ（前書き）

コメディー要素少ないです。すみません。

第四十六話 バスケット

一年七組バスケットボールチーム>淫靡な紫くは、優勝候補の一角を相手に善戦していた。五人全員がミニバス経験者とはいえ、現役バスケット部三人をスターティングメンバーに含んだ二年四組>深緑アウトローの無法者相手には分が悪い。そこで義人たちは一計を案じたのだ。

「しかしまさかここまで競るとは、正直思わなかったぞ」

ハーフタイム（10分×2で、間に二分の休憩）で俺は義人に話しかけた。

「まさか二人の司令塔ポイントガードで攻めるとはな」

一年七組の作戦とは、>ディフェンス面では経験がものをいって勝ち目はない。だったら点の取り合いに誘ってバスケット以外にシュートを打たせる機会を増やし、ミスさせるくというものだ。攻撃面では、身長165センチ弱の義人と身長175センチ強の石井の二人が司令塔ポイントガードとして敵を攪乱していた。低いドリブルから広い視野で空いた味方にパスを回し、敵がドリブル突破を警戒して下がれば三点シュート（スリーポイント）を狙う義人。ゆったりとした動きながら幻惑のドリブルで敵を翻弄し、自らもダブルクラッチなどの技で点を取りに行ける石井。この二人の息の合ったコンビネーションで敵を惑わせていた。それ以外にも中距離からのシュート成功率が七割を超えている浜ちゃんなど、それぞれの個性を十分に出してプレーさせる技術に優れた二人は、攻撃面では相手に通用していた。バスケット部が誰かを事前に調べ、マッチアップを計画していた石井個人の功績も大きく、今のところ28-22と立派に試合として成立していた。

「ただー、警戒は必要だよー」

石井が息を切らせながら指摘する。

「相手はー、なんてったって現役なんだからー」

「紫三番！チャージング！」

石井の不安は的中した。相手はその優れたディフェンス技術で、ファウルトラブルを誘ってきたのだ。ルール上ファイブファウルで退場となるバスケで、五人だけしかない一年七組は一人でも欠けたら四人で戦わなければならない。そしてドリブルが多い司令塔^{ポイントガード}二人がその被害に直にさらされていた。義人は三つ、石井はこれですつ目だ。試合は残り十分近く残っている。

「これは、万事休すか……」

退場を恐れ、ドリブルで攻めきれなくなった石井にバスケ部二人がダブルチームで襲いかかる。運動量が多かった石井はもはや虫の息となっている。どう考えてももう終わりだ。敵チームの応援にも熱がこもり、こちら側は暗い雰囲気^{モラ}が漂っていた。

「負けるのか……」

おそらく誰もが一年七組の負けを確信したであろうその時、義人が三点シュート（スリーポイント）を決めた。この状況下でなお、義人は全力でプレーしていた。点差はこれで五点に縮まった。ここで敵の攻撃を止めればまだ勝ち目はある。そう確信した目で俺の方を見た。どうやら奴はこのまま負けるのを潔しとしないらしい。

「がんばれーっ！！義人！！一年七組！！」

できる限りの大声で応援する。それこそ敵が怯むような大声。そしてその怯んだ隙を待っていた義人がすかさず迎撃^{インターセプト}。速攻を決めて三点差。

「まだいける！！がんばれーっ！！」

健闘むなしく一年七組は六点差で負けた。誰一人としてここまで競った戦いになるとは思っていなかっただろう。だからその結果自体はよかったのだが……。

「がんばれーっ！……か。三井、お前結構熱いやつだったんだな」

「まだいける！！……か。かつこ良かったぜ、三井」

「……お前ら五月蠅い。黙れ」

大声を出した代償として変なイメージがついてしまった。

「変なイメージじゃなくて本性が出ただけだろ。旦那が隠してた」

「……お前のせいだろうが。少しは払拭するの手伝え」

「だが断る！！」

……失敗した。

第四十六話 バスケ（後書き）

腹痛で一日動けない状態で書きました。つまらないようでしたらごめんなさい。……でもたまにはこういう話もいいんじゃないかとも思ってます。

第四十七話 二試合目

前期クラスマッチ一日目、ソフトボールの部第二回戦。俺たち一年七組はいわゆる逆シードのため、優勝するには五連勝しなければならぬ。しかし組み合わせ抽選の結果、バスケットは反対に野球部が多かったり、経験者九人といった強豪とは三回戦まで当たらない。そのため、この試合も楽勝かと思って余裕をかましていたのだが。

「……どうせ俺には恋人なんてできねえよ……」
エース清水の大乱調（主に精神的なものによる）で、まさかの点の取り合いとなってしまうた。

球の切れがそこまで悪いわけでもないのだが、ストライクがほとんど入らない。そして清水の球でも打てるバッター（主に野球部員と経験者）が、カウント有利にしてからこちらの守備の弱点（運動神経がいいが野球、ソフト未経験のサード城田とセカンド兼子）をついてきた。そのためファーストの俺とショートの柳はカバーでてんでこ舞いだ。

「清水、いい加減立ち直れよ」

「このままじゃ分が悪い」

「……所詮この世はイケメン有利……」

……駄目だ、清水はもう当てにできん。

「……そーらーをこーえてー、らららほーしーのかーなたー……」

あいての応援も活気づいてきた。応援の歌が鉄腕アトムなのは謎だが。

「おい！こっちの応援ももつと盛り上がれよ！」

一年七組の応援は試合を終えたバスケット組と、バドミントン組だけ。女子はソフトの前に試合開始したドッジボールの応援に行っている。ドッジもハンド部の一年エースがいるらしく、なかなか強いチーム

らしい。

「わかったよー」

「さっき旦那には応援してもらったしな」

……ついさっきできたトラウマに触れるな。

「次のバッター！」

「三井、次だ」

いつの間にか俺の打順だったらしい。五番金澤のツーベース、六番原君のセンター返してノーアウトでランナーが一三塁。絶好のチャンスだ。三回の表で7-9と負けている。下手を打ったらこのまま試合終了になりかねない。

「わかった。応援、頼むぞ」

「りょーかい」

「任せとけ、旦那」

「お願いします」

バッターボックスに入るときには一礼。これは大事だ。審判の印象もよくなるし、バッテリにも悪印象は持たれまい。遅い球とはいえ、ぶつけられたら痛いには変わらない。

相手の球自体は大したことない。冷静に守備の手薄な右方向を狙うか、もしくは意表をついたセーフティバントで相手守備の攪乱を狙うか……

「「ひかるかーぜーをーおいーこしたらー、きみーにーきつとあーえるねー」」

「応援歌にハピマテなんか使うんじゃない！」

俺がそっち系の人だと思われるだろうが！

「バッター、静かに」

「……すみません」

何この状況。もしかしてあいつらが何やっても突っ込めないのか……？

「「あるーはれーたひーのことー」」

今度はハレ晴レかよー！しかも踊りつきって応援する気あんのか！

？……と心の中で突っ込む。もはや俺に冷静な思考など出来そうもなかった。

「わたしのおはかのーまーえでー、なかないでくださいー」

>千の風になってくってテンション下がるだろ！むしろ打てなくなるわ！……と大声で突っ込みたい……！拷問だ。集中できん……！

「カウント、ワンツー」

……くそう、この状況じゃ何ともできん。

「あつたまてつかてーか、さーえてぴっかつぴーか」

お次はドラえもんだと……！？何考えてやがる……？

「そーれがどうしーた、ぼく、>フランソワーズ大木く」

誰だー！っ！？しかもハモってんじやねー！っ！と突っ込みたいのを耐えに耐え、その怒りを歯を食いしばって球に伝える。
「いったあー！っ！！」

打球はライナーで左中間を抜けた。球場とは違い、フェンスがないので打球は点々と転がっていく。その間に俺は一気に三塁ベースを駆け抜ける。本塁^{ホーム}までいけるか……！？しかしさすがに身体能力の高い北高生。ボールは本塁^{ホーム}に戻ってきた。しまった、挟まれる……！？

「つつこめーっ！！」

三塁コーチに入っている深谷の声が響く。……それなら存分に突っ込ませていただく。

「>フランソワーズ大木くって何者だー！っ！！！！」

……俺の気迫に押されたか、キャッチャーはボールを取り落とし。そのままホームに滑り込んだ俺は大声で叫んだ。

「よっしゃー！っ！！」

「よくやった三井」

「ナイスガッツ」

「逆転スリーランか、劇的だな」

「サンキュー、みんな」

われながらよく打てたな。自画自賛していい仕事っぷりだ。

「お疲れー、三井」

「旦那、かつけー」

「お前ら……」

……俺の体が震える。もちろん感動などの理由ではない。

「踊りつきで応援にハレ晴レ歌うな！！>千の風になつてくはテンション下がるだろうが！！応援歌にドラえもんって！？しかもフラソワーズ大木って何者だ！？」

「……そんなに突っ込みたかったのか……」

原君がぼつりとつぶやいたのが印象深かった。

その後、ドツチを応援していた女子が戻ってきたことで清水が復活。試合は15-9で決着した。……清水は調子に乗せておかないと大変だな……。教訓として覚えておこう。

第四十八話 休憩

ソフトの二試合目で発覚したこと。それはエースである＞生きる伝説＜清水が、＞女子に振られる＜＞女子の応援がない＜などで力を存分に発揮できなくなってしまうことだった。つまりは女子に關することでは打たれ弱いということだろう。回復も早いことがせめてもの救いだが。

そこで昼の休憩中。

「清水はスゲーよ。運動神経ずば抜けてるし」

「そうだよ。体力テスト学年総合三位だろ？清水にはかなわんな」

「そうか？俺ってすごいかな」

「ああ。清水は最高だよ」

俺たちは清水を褒め称えまくっていた。

清水のメンタル面を少しでもいい状態でマウンドに送るため、みなでできる限りのお世辞を言う。今のところこの作戦は好調のよう
で、清水はかなりリラックスしているようだ。

「ならみんな、俺のスゲーところを言ってってくれよ」

……訂正。清水はかなり調子に乗っているようだ。

「……一人ずつ言うのか……？」

おお、原君の眉がぴくぴくと動いてる。癪に障ったんだな。

「一人ずつ言ってくれ」

それに気づくそぶりすら見せない清水。お前のKYっぷりは称賛に値する。

「……では古今東西清水のすごいところー」

山手線ゲームかよ。

「運動神経のよさ」

うん、それは間違いない。

「感情を内面に隠せるところ」

教師相手限定だな。

「つまづいても何度も立ち上がるところ」

振られても何度も復活するという意味だな。

「地震が起きる前に暴れるところ」

清水はナマズか！？

「映画になるといいやつになるところ」

ジャイアン！？

「俺が入院した時にエロ本を持ってきてくれたその優しさ」

入院患者に何してんだ！？

「空気の読めなさ」

もはや長所じゃねえ！

「%& \$#*」

何語！？

「地震が起きる前に暴れるところ」

それ聞いたよ！マジで地震予知できるの！？ナマズ！？

「夢が>黒柳徹子に「髪型おかしいですよ」と言っただけでなく、
ころ」

勇者だ！そして無謀だ！

「消してやる……あの地球人のように！」

クリリンのことかーっ！！……って何が！？

「色々ドンマイ」

清水が振られたこと蒸し返すなーっ！！

「……なるほどな。俺ってすごいよな！」

いろいろなフォローの結果、清水のメンタル面は絶好調になった
ようだ。これで次からの試合は全力で戦える。俺も自分の仕事をこ
なさないとな。

「深谷！ピッチング練習する！手伝え！！」

「いやだよ！休憩くらいさせてくれよ！痛えよ！」

「気にするな！お前はやればできる子だ！」

「やりたくねえよ！」

「お前に拒否権はない！」

「ひでえ！！」

……仕事が大変な深谷には悪いが。

第四十九話 暇

ソフトの試合は明日までないので、調整は各自でやることとなった。清水ー深谷のバツテリーは嫌がる深谷を無理やり連れて、投球練習を行っていた。深谷、アーメン。

俺としてはやることもなく、かといって浜ちゃんのように部室に行つて>エロ大魔王<（大富豪の発展版。うちの水泳部名物）をやる気分でもない。どうしたものか……。

「なら三井ー、ドツヂの応援に行つたらー？」

「……あれ、俺何が言つてたか？」

「うんー、つぶやいてたよー」

しまった。独り言なんて怪しい人の代名詞みたいなものじゃないか。この学校に来て毒されている気がしないでもない。気をつけよう。

「……で、ドツヂは今から試合か？」

「そうだよー、二回戦でー、相手は二年八組ー」

「じゃあ応援しに行くか。ちなみに義人どうしてるか知ってるか？」

「杉田なら部室で寝てるよー」

「そりゃあれだけ動きまわればな……ただでさえあいつ十時半には寝るのに」

「さあ応援に行こうー」

「はいはい」

試合会場の第二グラウンドに行くと、すでに試合は始まっていた。序盤ではあるが一年七組が優勢のようだ。

「おーい、三井連れてきたよー」

「誰に言ってるんだ？」

「いいからいいからー」

そう言って石井はどこかへと消えていった。石井の行動は謎が多いからな。いちいち相手してても無駄だ。よって気にしないことにする。せっかくなので隣の大林（剣道部。車、鉄道マニア）に尋ねてみる。

「うちのクラスでドツチ強いのは誰だ？」

「……知らないの？」

「ああ」

「威張ることではないな」

「いいから教えてくれ」

「……藤村さんと菅原さん。どっちもハンド部で肩がいいよ」

「なるほどな……で、どれがその藤村さんと菅原さん？」

「……クラスメイトだろ、覚えてないのか……？」

「ああ。勿論」

「威張るなよ」

それでも大林は教えてくれた。

「ふむふむ。ライセンスのでっかい人に似ているのが藤村さん。力サゴ（海産の硬骨魚。棘が強い。美味）に似ているのが菅原さんだな」

「……言い得て妙だが、他の言い方はないのか……？」

「ない。俺はこれから、心の中であの二人を>ライセンス<と>力サゴ<と呼ぶであろう」

「……ごめんなさい、二人とも」

「大林が謝ることじゃないよ」

「……お前が謝ることだ」

試合は見事一年七組>凍傷の唇<が勝利。戦利品として>なんだかよさげなあだ名<を手に入れた。

「ほんとごめんなさい、二人とも」

「大林が謝ることじゃないよ」

「……だから三井が謝ることだ」

第五十話 名誉会員

前期クラスマッチ一日目は無事終わり、俺たちはクラスでHRホームルームを受けていた。クラスマッチであるうとHRと掃除は欠かさない。北高の美化担当谷川先生（柔道黒帯所有）の圧力がかかっているという噂もあるが。

「……ではこれでHRを終わります。かいさ」

「センサー、今日センサーは一日、何してたんですかー？」

今日一日クラスマッチの間、健三さんを見かけた人がいないのである。朝、開会式で変なことをして以来行方知れず。応援にも全く姿を見せなかった。

「今日は図書室で読書をしていましたよ」

……は？

「……確か今日はすべての棟が封鎖されていたはずじゃ……？」

「教師ですから」

……教師なら自分のクラスの応援にくらい来てください。

「今日も暑かったですしね」

それが理由で！？

「スポーツに興味ありませんし」

生徒の活動には興味持つてくれ！

「ぶっちゃけた話、生徒の活動にも興味ありませんし」

言っちゃった！言っちゃったよこの教師！！

「だから図書室で優雅に読書タイムです」

のばすな。……あれ？でも待てよ？

「司書の上村さん（図書館の主。女性。おそらく北高で最も良識派。一ヶ月に五十冊もの本を読むということ以外は普通の人）は外で俺たち（主に図書委員）の応援をしてましたよ？」

上村さんはいいい人だ。しっかりしてるし、鍵のかけ忘れなどもないだろう。会ったとき「図書館は閉めてある」とか言ってたのに、

健三さんはどうやって図書室に入っただ？

「ああ、私図書室の鍵持ってますから」

……なんだって？

「名誉会員ですからね」

……そういえばこの人、国語の教師だったな。忘れがちだけど。

「以前、何度かつまらない会議を抜け出して図書室で読書したら、上村さんがくれたんですよ。先生、そんなに本が好きならいつでもいらしてください、だそうです」

……上村さん、この人にそんなものあげたら仕事しなくなるでしょうに……。それよりも、会議サボってよく何ともならないな。

「センサー、会議サボって罰とか受けないんですかー？」

そうだ。減俸くらいあつてしかるべきだ。

「私は校長が学校外で講演するときの台本を書いてあげてますからね。そのおかげで演説がうまくいって言われてるから、いまさら私にへそ曲げられて書かない、なんて言われたら困るでしょうね」

……。

「……先生、それって要するに……」

……脅迫？

「ギブアンドテイクですよ。それでは解散」

「センサー、明日は応援に来てくれますよね？」

「断る！」

断言した！！

第五十一話 三試合目

「点が取れねえな……」

前期クラスマッチ二日目、ソフトボールの部三試合目。俺たち一年七組は予想以上の苦戦を強いられていた。

「朝倉先輩のワンマンチームだとばかり思っていたが……守備が堅いな」

朝倉先輩というのは、現在の野球部キャプテンにして三番バッター。走攻守三拍子そろった名選手として、高校入学時には野球留学の話もあったという強者だ。^{つわもの}野球部の柳や深谷から他に野球部の先輩はいないと聞いたので、その人だけをマークすればいいと結論付けたのだが……。

「あれは相当守備練してるわ」

現時点で0 - 1。相手の一点は朝倉先輩のソロホームラン。清水の重い球をライトオーバー（朝倉先輩は左打ち）するとは、野球部のレギュラーの実力は半端じゃないようだ。こちらの攻撃は、ランナー三塁までいっても、あと一本がでない嫌な状況。相手に主導権を握られていると言わざるを得ない。

「三年はこれでクラスマッチ最後だしな。胸に期するものがあるんだろ」

何事にも全力投球するのは、我が北高の長所でもあり短所でもある。

「……でなにか状況を打開するための具体策はあるか？」

「ねばって四球を選ぶとか……」

「時間が残り少ないから……四球か、もしくはセンター返しを狙おう」

「次のバッターは？」

「八番兼子だ」

先ほどは二死三塁のチャンスで俺が凡退してしまっただけに、こ

の回の攻撃は重要だ。クラスマッチのルールでは、三回戦までは四十五分を過ぎたら即座に試合終了となる。現在、試合開始から十分過ぎ。この回で点を取らないとかなり厳しい。

「ボールよく見て！相手も疲れてるからな！」

兼子は結局一度もバットを振らずに四球。

「審判！代打！出番だ！>しゃくれく！！」

「しゃくれ言うな！」

九番城田のところで代打>しゃくれくこと佐々木。陸上部に所属しており、チーム二位の俊足（一位は野球部の柳）だ。

「>しゃくれ！しゃくれ！しゃくれ！しゃくれ！」

「お前らうるせえ！」

……はっ！俺まで調子に乗って叫んでしまった。

「ストライク！バッターアウト！」

「やつぱり駄目か……」

「しゃくれだもんな……」

やはりしゃくれは駄目だった。野球未経験者の中でもレギュラー落ちしたくらいだから、実力はもとも大したことないのだが。

「やはり野球部頼みだな」

一番柳がレフト前ヒット。二番小坂（野球推薦のくせに、なぜか軽音楽部所属）が四球。一死満塁でバッター清水。

「清水君、がんばれー！」

女子の応援が響く。よし、これなら清水はやってくれる……！

「うおりゃあああああ」

気合い十分で打席に向かったものの、結果はショートゴロ。しかし三塁ランナーがホームに帰り、併殺崩れで同点となった。二死一三塁でバッターは四番キャッチャー深谷。時間もそろそろ終了するのでここで決めたい。同点の場合、じゃんけんで勝敗を決めることとなる。

「>深谷！深谷！深谷！>深谷！」

「……………」

おお、応援に全く動じない。すさまじい集中力だ……っ！
「……清水いつか殺す……少しは力抜けや……っ！」
……ただの私怨でした。

試合は負のオーラに包まれた深谷の、三塁線を破るツーベースで
逆転。3 - 1となって相手の攻撃に入る前に時間切れで勝利を得た。
次はいよいよ準決勝。是非とも勝ちたいものだ。

第五十二話 準決勝と相手

「お前らぁー！っ！！準決勝だ！！覚悟はいいかー！っ！！」

「「「おおおおおー！っ！！！」」」

「相手は二年一組！！理系だが勝機は十二分にある！！」

「「「おおおおおー！っ！！！」」」

「そしてなんと！！我らが担任健三さんが！！応援に来たー！っ！！」

「「「おおおおおー！っ！！！」」」

……来るのが当然だと思ったら負けなのだろうか。

「絶対勝つぞ！！先輩方に遠慮すんな！！」

「「「おおおおおー！っ！！！」」」

「オーエスッ！！」

何そのかけ声！？

「「「オーエスッ！！！」」」

なんでみんな揃ってるの！？今までそんなのなかったじゃん！！

「前期クラスマッチソフトボールの部、準決勝第一試合を始めます。先攻、二年一組＞真つ赤な弛緩く、後攻、一年七組＞流血のピッコたちくのメンバー！集合！礼！」

「「「お願いします！！！」」」

そして、激闘が幕を開けた。

相手チームは五人の野球部を擁し、他のスタメン四人も野球経験者らしい。初回からヒットが飛び出し、四球も絡んで二死一二塁のピンチ。バッターは五番。ここまで全員が野球部だ。

「清水、落ち着け！」

「お前の球はそうは打たれん！」

最初に打たれたのも、打者のカウント有利だったから、思い切っ

て振ったのが当たっただけみたいだしな。

「うおらあああああつ!!!」

清水が吠えた。投げた球はキャッチャーミットに吸い込まれ、三球三振。

「よしっ!!!」

序盤のピンチを無失点に抑えた。おそらくあの五人が野球部員だろう。その五人を無失点に抑えたのだ。清水がこの試合の主導権を握ったといっているだろう。

「この試合、勝てるぞ!!!」

手を痛がらせながらも、捕手の深谷が嬉しそうに言った。

一回の裏。一番バッターは俊足柳。

「それゆけ! ヤナギンマン!」

なぜアンパンマン風に応援!?

「ゆっけーゆけーえ、やーなぎー、みつばちやーなぎー」

柳はミツバチじゃないよ!

「あーあ」

残念ながら柳はショートゴロ。さすがの俊足を見せたが、ショートが強肩が勝った。内野はすごい堅守だな……。

次打者は二番、大きいのに小坂。

「アイル、ビー、バック」

こっち戻ってきたら駄目だよ! 打ちとられるってことじゃん!

「よしっ! …… あああああ」

なかなかのいい当たりは右中間を破るかと思われたが、センターが回り込んで捕球。外野守備も堅い。隙はあるのか……?

「俺の出番だな……」

三番清水。

「清水君、がんばってー!」

「いよっしゃあああああ!!!! 任せろおおおお!!!!」

訂正。三番、座右の銘>七転び八起き、清水。多くなった観客の女子の声援を受け、さらにパワーアップしたようだ。

「ほんだらあああああ！！！！」

カウント1-2からの直球をフルスイング。打球はレフトの頭上を越えた。誰が見てもそれとわかる、ソフトボールの球の飛ばし方を理解しつくしたホームランだった。

「本当に勝てる……」

現実を見ることに定評のある、原君もつぶやいた。俺もそう思う、勝てるぞ……！

得点は清水のソロのみのまま四回の表、二死まできた。この回はランナーが出ていない。準決勝は五回までやることになっているので、あとアウト四つで俺たちの勝ちだ。

「三井っ！」

「うわっ！」

油断が生じたところで、左打者の引つ張った打球が飛んできた。清水の球威に負けたのか、ぼてぼての当たりだ。このままじゃ内野安打になる……！

「三井っ」

カバーに入ろうとする清水にトス。ぎりぎりのタイミングだと思ったのか打者はヘッドスライディングをする。危険だ！

「うっ」

「清水！！」

ヘッドスライディングの手をよけた清水はバランスを崩して転倒。皆が清水のところに集まる。

「大丈夫か清水！？」

「怪我は！？」

「……右腕が……」

……！やばい、右腕が青くなってる……！素人目にも無事でない

ことがはつきりとわかる。

「……悪い清水……俺が油断してたから……」

「……気にするな……」

「どうすればいい？」

「とりあえず保健室に」

「でも投手どうするんだ!？」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろう!」

清水の離脱は痛すぎる。今のプレーで二死ながらランナー一塁。

相手バッターは野球経験者ばかり。しかしこの怪我じゃどうしようも……

「ラッキーラッキー」

そんなとき、相手のベンチから声が聞こえた。一人が大怪我しているというのに、相手はその程度の認識しかしていないらしい。

そうか、相手はそういう態度をとるんだな。それなら

こちらもそれ相応の対応をさせていただこう。

「投手はどうする!？」

「誰かいないのか!？」

「もういい」

「……三井？」

いいだろう。相手が相手だ。やってやる。

「俺が投げる」

第五十二話 準決勝と相手（後書き）

一話完結じゃなくすいません。

第五十三話 けつ

「ピッチャー、投球練習は？」

「結構です」

「バッター、入って」

前期クラスマッチソフトボールの部第一試合。1 - 0で、後攻の俺たち一年七組が勝っているものの、四回表、エース清水の思わぬ負傷で二死一塁ながら最大の山場がやってきた。俺がピッチャーに入り、代わりにファーストには控えの玉野が入っている。

「み、三井、おおお落ち着けよ！」

玉野、お前が落ち着け。今、俺は気持ちいくらいに集中できてる。
「ストライク！」

こちらの有利な点は、相手にデータが一切ないということが一つ。そして清水の速い球に慣らされて遅い球にタイミングが合いづらいだろうということ。そしてもう一つ、俺がソフト出身でピッチャーとしての練習も積んできたことだ。

「ストライク！」

だからこそ俺が今頭に描いている作戦が使える。相手の意表を突くことに重点を置いた作戦。それは

「ストライク！バッターアウト！」

「なんだあの投げ方は！？」

いくつかの投法を組み合わせさせて抑えるものだ。

ソフトボールにはいくつかの投法がある。後ろに手を引き、そのまま投げる>スリングショット<。腕を一回転させ、勢いをつけ投げる>ウィンドミル<。そして今ではほとんど投げられていないしかし俺は第二のピッチャーとしてこれを重点的に練習させられた八の字を書くようにして投げる>フィギュア・エイト<。俺が投

げられるのはこの三投法だ。

本来ソフトボールでは、二つ以上の投げ方をすることは禁止されている。それをしてはさらに投手有利となってしまうからだ。しかしこのクラスマッチではそのルールは除外されている。なぜならば、ソフト投手経験者のいるクラスがどうしても有利になる以上、経験者以外にもせめて始めだけ>ウインドミル<を投げさせてやろうとするためだ。このルールが除外されれば、ストライクが入らなくて四球ばかりになったとき、後から下からほえるようにしてストライクを入れる投法に変えることもできる。その弱者のためのルールを最大限に活用させてもらったのが今回の作戦だ。卑怯というなら言えばいい。人が怪我して喜ぶような相手に同情の余地はない。

「三井、お前普通に投げられるじゃねーか！」

「誰も投げられないなんて言ってないだろ？」

「清水とは比べ物にならないが、今まで対戦した相手より球も速いし比べ物にならないと言っただけだ。俺だって傷つくぞ。まあ、ソフト投手経験者の中では遅い方だろうな、俺の球は。別ブロックの投手経験者の球見てへこんだし。」

「でもまだあと一回あるからな、油断大敵だ」

「この調子じゃこの回も点取れそうにないしな」

鉄壁の相手守備陣は崩れず、長距離砲清水が消えた以上ホームランも期待できない。勝負は最終回で俺が一点を守り切れるかどうかだ。

「ああーっ！おいしい！」

五番右翼手^{ライト}原君のセンター返しはセカンドの好守に阻まれた。打者の構えなどから打球の行方が事前にわかるのだろう。野球部の守備は本当にいやらしい。

「さて、最終回だ」

「清水の叩き合戦といきましょうか。それとも振り返り打ちですか」

……健三さん。ぱつと出てきて不吉なこと言わんでくれ。

先ほどの攻撃で、俺の作戦は相手にわかっただろう。あとアウト三つ。相手の実力なら十分に対応してくることは予想できる。俺の残る切り札は一つ。できれば使わずに終えたいところだ。

「かつ飛ばせー、茂手内！」

相手バッターの名字は茂手内らしい。可愛いそうな名字だ。心中お察しする。

「かかってこい！」

しかしなかなかの美男子だった。一瞬同情した俺自身に腹が立つ。集中。

二死一三塁。打順は一番。ここまで無失点はよく持った方だろう。

この回は三振こそとれていないがクリーンヒットもない。そして、

「ファール！」

このバッターも追い込んだ。最後のカードを切るときが来たよう

だ。深谷、頼むぞ……！

「いけっ！」

「ストライク！バッターアウト！」

俺が投じたのはチェンジアップ。コントロールはいまいちだが、ツーストライクでは振らざるをえまい。ぎりぎりまでチェンジアップを見せなかった俺の作戦勝ちだな。

「三井！チェンジアップ持ってるなら先に言え！危うく取り損ねるところだったぞ！」

……深谷には悪いが。

「それではこの試合、1・0で一年七組の勝ち。礼！」

「……ありがとうございました……」

あいさつを終えベンチに戻ると、クラスメイトに囲まれた。

「三井すげえ！」

「やるときはやる男だと思ってたよ俺は」

「お前の机の中にエロ本隠しておいて悪かった」

「かつこいいぞ、三井！」

「待て！今エロ本隠した犯人名乗り出ただろ！誰だ！」

あの時は女子に白い目で見られて大変だったんだぞ！

「さすが三井です。私が教えたものを出しつくしましたね」

俺健三さんにソフト教わってねえ！！

「そうだ！清水は！？」

清水の腕が気になる。俺が決勝も投げるのかもしれないし。

「怪我は右腕だけ。数日で治るそうだ。ただ……」

「決勝は投げられない、か……」

「まあいい！ここまできたら勝とうぜ！」

「そうだ！俺たちは清水のワンマンチームでないことを見せてやるんだ！」

そして決勝。三年三組＞白い光の中に萌える山波くとの対戦。 1

5-0で敗北。

「ソフト出身ピッチャーってすごいな、ありや打てんわ」

「清水味方でよかったよ」

「野球部レギュラー四人はすぎるすぎだろ」

「俺たち頑張ったよな」

「ドンマイ三井」

「……ソフト怖い」

一年七組ソフトボールの部。記録準優勝。

第五十四話 閉幕

「……以上をもちまして、前期クラスマッチを終了いたします」

名勝負あり、ハプニングあり、悲劇ありのクラスマッチもついに終わり。一年七組は総合八位（全24クラス中）と大健闘。一年では一位だった。準優勝という俺の予想をはるかに上回る結果（清水を筆頭とする数人は「順当だ！むしろ優勝できなかったのがおかしい！」と負け惜しみを言っていたが）を残したソフトボールとベスト8に残ったドッチボール、敗者戦で見事勝利したバスケットなどが点数を稼ぎ、最高の結果となった。

「……なお、生徒会長がまたよからぬ計画を立てていたので肅清しておきました。ここで副会長である私が挨拶しているのは、そういう理由です。ご理解ください」

……あの頭のねじが一本外れている生徒会長がいないのはそういうことか……。黙祷しておこう。ご冥福をお祈りいたします。

「これでクラスマッチは終わりですが、原則として打ち上げは禁止となっています。もしやるならこそそと、できる限り気づかれなように計画してください。なにかあったら学校に連絡が来ることは目に見えていますので、必要以上に騒がないように」

なるほど。了解した。

「続けて生徒指導部長である小倉先生から話があるそうです」

小倉さんの話か。また叱責かな。やめてほしい。怖いから。

「えー、二日間、皆よくやった」

ん？指導とかじゃないのか。小倉さんが褒めるとは。

「ゴミのポイ捨て等の報告がほとんどない。これからも意識して行動するように」

そっちな。

「水泳部は活動があるので休まないように」

あるの！？クラスマッチ直後なのに！？

「といっても二キロだ。安心しろ」

安心できるか！この疲れた状況じゃ泳げんわ！怖いから行くけど！

「短距離練習中心だ。喜べ」

喜べねえよ！鬼！あんたから血の匂いが漂ってくる！

「ほかに連絡のある先生方はおられますか」

「あー、柔道部もあるから来るように」

「バレー部もあるぞ」

「第二グラウンド集合だ、ラグビー部」

ぶーぶーという生徒からの大ブーイングのなか、クラスマッチは終了したのだった。

「ベスト＋三秒以内で五十メートル十本やってこい。それが終わったら、上から（飛びこんで）二十五メートルベスト＋二秒で泳げ」

「……旦那いけるか？」

「無理だろ」

断言できる。

「マサとかは？」

「バスケット組の運動量なめんなよ！」

「それは泳ぐ体力が残っているという意味ととらえていいか？」

「もちろん、もう走りつかれて泳げないという意味だ！」

「……だよな」

全員で小倉さんを説得し、なんとかメニューの量が減ったのだった。

水泳部の団結力が上がった！

「旦那、なぜRPG風？」

「そこは突っ込むな」

第五十五話 川端康成

「クラスマッチも終わりましたねえ」

そうですね、健三さん。今はクラスマッチ明け一発目の古典の授業。担当はもちろん健三さんである。いつもながらに無気力だ。

「いやー、実に疲れました」

あんた応援にすらほとんど来なかっただろうが。決勝も応援に来てないし。

「朝から職員会議で校長がぐだぐだと長い話をしてまして
そっちかよ！」

「聞くのも面倒なんで不貞寝してました」
なら疲れる要素ねえ！

「あなた方も昨日の疲れが残っているでしょう」

それは……まあ。

「勉強する気力もないでしょう」

……まさか。

「というわけで授業は今日は中止。別のことをやりましょう」
……やっぱり。

「皆さんは川端康成を知っていますね」

それはもちろん。……おい義人。そんな「何それ？食べられるの？」みたいな表情するな。

「それでは>雪国<の冒頭もわかりますね」

>国境の長いトンネルを抜けるとそこは雪国であつた<ってやつか。……おい義人。そんな「ふん！そんなもの知らなくても人生に支障などないわ！」みたいな顔して開き直ろうとするな。常識だから覚えとけ。

「この>国境<は>コツキョウ<とも、>くにざかい<とも読めま

すが、どちらで読んでも構いません。本題はそこではないので」
何をさせる気だ？

「この>国境の長いトンネルを抜けるとそこはく_くに続いて、面白おかしい文にしてください」

…… またですか。

「ではまず清水」

右腕を負傷中の清水か。

「>国境の長いトンネルを抜けるとそこは追試のない世界であつた_く」

現実から目を背けるな！俺もその世界行きたいけど！

「次。菅原」

ドツチで大活躍だつた>カサゴくこと菅原さんか。

「>国境の長いトンネルを抜けるとそこは同人誌即売所であつたく_く腐女子だ！菅原さんやつぱり腐女子だ！

「ああすいません。間違えました」

そつだよな！もっと別のがあるよな菅原さん！

「>国境の長いトンネルを抜けるとそこはB L限定の同人誌即売所であつたく」

修正箇所そこ！？いらないよその付け足し！

「次。原」

よかつた。まじめな原君ならまともなのを言ってくれる……！

「>国境の長いトンネルを抜けるとそこは工事で封鎖中であつたく_{リアル}現実的だ！夢なさすぎだよ！話そこで終わりだよ！

「次。小坂」

野球推薦なのに軽音楽部の小坂か。

「>国境の長いトンネルを抜けるとそこはトンネルの入口であつた。その長いトンネルを抜けるとそこはトンネルの入口であつた。その長いトンネルを抜けるとそこは……」

無限ループ！？

「もついいです。次、浜口」

浜ちゃんか。頼む、まともなのを……。

「> 国境の長いトンネルを抜けるとそこは実家であった。

帰省！？トンネルの出口が実家とか立地条件悪いにもほどがある
だろ！

「次、……」

「授業を終わります、解散」

…… やつと終わった。なんてカオスな空間なんだここは……。高
校の教室とは思えん……。

「旦那、ようやく終わったな」

「ああそうだな」

「……でさ」

「なんだ？」

「> かわばたやすなりくつて何？」

「やつぱり知らなかったのかよ！」

第五十六話 健康

「クラスマッチも終わったことだ。メニュー増やすぞ」

まだ増える余地があつたんですか、小倉さん。

「今まではドリル（基礎能力向上のためのメニュー）中心だったが、これからは泳ぎ込みに力を入れる」

今までだつて十分泳いでたのに……。あれは泳ぎ込みではないのか。

「とりあえずノルマは一日四キロだ。内容も充実させる」

内容も俺にとつては毎日が限界への挑戦だつたんですが。そうですか、まだやりますか。

「それでは本日のメニューだ。心してかかるように」

そりゃ真剣に取り組まないと、水死体となつて上がりかねませんからね。

「よし、確認したらストレッチを始めろ」

「これからまた量が増えるのか……」

考えるだけで憂鬱だ。

「そうだよー、やりすぎだよー」

石井が俺の悲しみに同意した。石井は短距離に関しては、トップクラスの實力を持つ。しかしスタミナが足りないため、後半ばててしまう。そのため、小倉さんに最重要育成予定者に位置づけられている、いわば一番の被害者である。

「僕はー、健康でいらればいいと思つてー、水泳部に入つたのにー」

實力があるのに生かしきれないのはもったいないと思う。しかし本人が望まないのなら、その才能を開花させずにいるのも一つの生き方だろう。だから俺はそこまで石井に泳げとは言わない。俺と同

じ量を泳いでくれれば全く問題はないのである。

「そうだな、毎日二キロくらい個人個人で泳げればな
別に競技水泳である必要はない。」

「そうだー、いいことを思いついたー」

「どうした？」

「僕たちで部活を立ち上げるんだよー」

「……は？」

「だからー、競技水泳でない水泳部をー、僕たちで作るんだよー」
「なるほど。でもそんなことできるのか？」

「やってやれないことはないんじゃないかなー」

「そうか。で、部活名は？」

「>健康水泳部くだよー」

その後小倉さんと交渉。

「健康水泳部を作りたいんですけど」

「練習の後にしろ」

交渉失敗。

「ダメだよー、もっとねばらないと」

「かといって練習後でないと、話は聞いてくれないだろ」

「そうだねー」

「だからとりあえず泳ぎ切ろう」

「わかったー」

そして練習後。

「……………」（疲れきって何も考えられない）

「……………」（ばてて倒れ込んでいる）

「……俺たち何か大切なこと考えてたんじゃなかったっけか……？」
「……ぜー、はー……………」

「……気のせいじゃないー……？……はあ、はあ……」
そして健康水泳部創設は見送られたのだった。

第五十七話 野球漫画

一年七組にて。昼休み、俺たちはスポーツ漫画談義で盛り上がっていた。

「旦那、野球漫画で一番の傑作は何だと思う？」

「俺は>スピリッツ<に連載してる、>ラストイニング<かな」

>ラストイニング<は監督が主人公の高校野球漫画で、他の野球漫画よりも現実に近い……と思う。野球部とかから見たらまた違うのかもしれないが、少なくとも、やたらと新しい変化球が出てきたり、妙にサヨナラ勝ちが多かったりはしない。実在する変わった練習方法が出てきたり、選手の心理状態や捕手のリードが重視されていたり、高校野球のしがらみがでたりと魅力が多い。ぜひ一度読んでみることをお勧めする。

「>ラストイニング<？知らない漫画だ。俺は>メジャー<か>おおきく振りがぶつてくだな」

「両方ともアニメ化したやつじゃねえか。おもしろい漫画は自分で開拓しろよ」

「でも面白いだろ？」

「確かに>おおきく振りがぶつてくはいいいけどな……>メジャー<はあんまり好きじゃないんだよな。子供っぽくて」

「漫画読んでる時点で子供だろ」

「幹事長経験者が漫画好きの時代だぞ。そんなことない」

「それもそうか」

「石井は好きな野球漫画は何だ？」

「僕はスポーツとかの漫画は読まないから」

「もったいないな……面白いのも多いのに」

「駄作も多いけどな」

「確かに」

「旦那、せっかくだから他の人の意見も聞いて回ろう」

「そうするか」

「清水、お前の一番好きな野球漫画は？」

「ん？そうだな、>タッチくだ」

なるほど。野球漫画の傑作の一つではあるな。

「あのラブコメ具合がたまらん！南みたいな彼女が欲しい！ギブミーステディー……」

「……お前の脳はピンク色にでも染まってるのか」
やはり清水だった。

「深谷ー、好きな野球漫画を上げてくれ」

「突然だな。えーっと……>ドリームズとか>風光るとか>4P田中くんとか>天のプラタナスとか……」

「全部同じ作者じゃねえか！どんだけその作者好きなんだよ！？」
全部読んだことがある俺も相当なものだと思っが。

「好きな野球漫画を教えてくれ、玉野」

「そうだな、>Mr・FULLSWINGなんて面白いんじゃないか？」

「ギャグ漫画じゃなくて野球漫画を聞ってるんだけど」

「野球漫画扱いじゃないのか！？」

「旦那、時間もあるし、人気漫画を選ぶためにも投票をやらないか？」

「それはいいな。さっそく集計用紙を作ろう……よしできた」

「おーいみんなー、人気野球漫画を調べるための投票をするから協力してくれー……」

そして集計結果。

「……なんで一度も出てこなかったのに、侍ジャイアンツが一番人気なんだ……？古っ！！」

相も変わらず謎の多い学校である。

第五十七話 野球漫画（後書き）

二万アクセス突破しました。嬉しいものですねえ……。

第五十八話 夢

部室で>エロ大魔王くをやっていると、松田がこんなことを尋ねてきた。

「みんなって将来何になりたいんだ？」

松田「俺ってあんまり将来のこと考えてないからさ、みんなのこと聞かせてくれ」

まあ高校一年から将来の仕事考えてる奴なんて、そこまで多くないだろうな。いたとしても途中で挫折して、別の職に就くのが大半だろうし。

片山「んー、俺は保育士かな」

そうか。片山は優しいし、面倒見がいいからいいかもしれないな。

片山「いや、俺はロリコンじゃないぞ!？」

聞いてない聞いてない。

浜口「俺はスイミングのインストラクターとかだ。もしくは体育教師」

なるほど。浜口は泳ぐの速いし運動神経もいいからな。

浜口「ただ、小倉さんみたいな威圧感がない教師になりたい」

望んでもあんな威圧感は手に入らんとするぞ。

田村「……俺は福祉関係の仕事」

田村はいいやつだな。

田村「……今蔓延^{はびこ}ってる金目当ての関係者を叩き出してやりたい」

……田村はいいやつだけど黒いな。

石井「僕はー、飛行機とかを作る仕事に就きたいなー」

そうか。航空関係は就職したい人も多いだろうから難しいだろうな。

石井「アニメとかのキャラを書いた飛行機をもっとたくさん飛ばしたいんだよー」

おれ「日本の恥になるだろ！やめてくれ！」

石井「そんなことないよー、日本のキャラは外国にも人気が高いんだから」

おれ「それは一部の外国人だろ！日本がオタクの国だと思われるから！」

松田「みつちゃん落ち着け。……スギは将来何になりたい？」

杉田「俺は医師志望。小児科担当がいいんだけど今の成績じゃ難しい」

義人は昔から小児科の病院を建てるのが夢だからな。

片山「それで理由は？スギはロリコンなのか？」

さつきから片山は妙にロリコンに反応するな。……まさか……いや、人を疑うのはよくない。よくないからこの話題に触れるのはよしておこう。

杉田「違う。単純に人を助ける仕事に就きたいだけだ」

浜口「……スギがまともなことを言ってる……！」

杉田「そこ驚くところか！？」

そういうことは普段の行動を省みてから言え。

松田「そういえばみつちゃんは？まだ言っていないだろ？」

言っただけだ。

おれ「俺の夢は銀行員だ」

田村「……地味」

片山「でもみつちゃんらしいな」

石井「三井は細かいしねー」

杉田「旦那は重箱の隅をつつくような性格だし、適任だ」

……ほっとけ。

第五十九話 模試

「この前の模試の結果を配ります。取りに来てください」

帰りのHホームRで健三さんが何か大量の紙を持ってきたと思ったら、

この前の模試の結果だった。この模試は主要三教科（国語、数学、英語）のみのテストであり、化学という文系志望の人間がやるべきでない教科が抜けているため、ひそかに自信のあるテストだ。

「次、早く取りに来ないと、全面コピーして全校生徒に配りますよ」
さらっと恐ろしいことを言わないでください。

「次は……三井ですか。ほう、なかなかですね」

結果、学年五十七位（三百二十人中）。模試とはいえ、全国や県の順位はよくわからないので、学年の順位がこれだけ良ければ十分だろう。むしろ完璧である。

「旦那はいいな……主要三教科に強くて」

「義人、横から人のを勝手に覗くな。お前はとうだったんだ？」

「聞くな」

「ふーん、二百十八位か。ちょっと低めだねー」

「イッシー！横から人のを勝手に覗くな！」

「お前にその言葉を言う資格はないと思うぞ。二十秒前の自分の行動を思い返せ」

「イッシーは何位だ？」

「無視か」

「二十位だよー」

「ちっ」

「旦那、自分よりだいたいいいからって舌打ちするな」

「よかったじゃないか、すごいな、石井」

「無視か」

「そつでもないよー。他のクラスには全国一位がいるしー」

「ふーん、そうなのか」

……ん？

「ちよつと待て。今のお前の発言にはいくつか疑問点がある」
「どうぞー」

「なんで他のクラスの結果をお前がもう知ってる？」

「ハッカードもしてるのかお前は。」

「他のクラスはー、二日前に結果がもう配られてるからー」

「……なんでうちのクラスはこんなに配られるのが遅いんだ？」

「健三さんだからだよー」

「……なるほど」

「いやそこで納得しちゃ駄目だろ、旦那」

でもまあ健三さんだし。何があってもおかしくない。それが健三さんである。

「それで、お前は今全国一位と言ったな？学年一位の間違いじゃないのか？」

「三井の耳は正しいよー。僕は今ー、全国一位と言ったからねー」

「……まじか」

「まじだよー」

「……なんだ夢か」

「旦那、現実逃避すんな」

「でもだつて全国一位だぞ！？そんなの実際に存在するのか！？架空の人物じゃないのか！？」

「いやそりゃあ全国のどこかには存在するだろう。それがうちの学校だつたつてだけだ」

「……義人、お前冷静だな」

「俺その情報二日前には知ってたし」

「教えるよ！その時点で教えるよ！」

「そんなこと言つたつて信じなかつただろう？」

「だろうな」

「即答するなよ、旦那。悲しくなる」

義人の話の半分はデマだからな。今までの経験がものをいう。

「で、どうするー？三井も奥村に会いに行くー？」

「奥村って誰だ？」

「だから全国一位の奥村だよー」

「……行く」

本当なのか確かめないといかん。……まだ事実だと認めたくない自分があるし。

結論から言おう。……事実でした。

「なんで全国一位のテスト結果を机の中で丸めて放置してあるんだよ……！」

「旦那、天才とはそういうものなんだよ」

「そういうものなんだよー」

「……ほんとなんだ……？この学校のハイスペックさは……？」

「旦那もその学校の一員だからな？忘れるなよ？」

……泣くな、俺。

第五十九話 模試（後書き）

全国一位なんて普通いねーだろ！というツツコミを入れたい方もいるかもしれませんが、うちの学校（しかも同学年）に実際にいました。この小説は事実をもとにした内容がいくつかありますが、全国一位がいたのも事実の一つです。ちなみにその人はめでたく東大現役合格。センター試験でも全国一桁の順位でした。……ちっ。お前の学校はどんな愉快な学校だという意見は受け付けておりませんので悪しからず。

第六十話 同乗

初めてというのは何だっけ緊張するものだ。初めてではいつもの力が出し切れず、悔いを残して終わることも多い。それを克服するためには、日ごろの練習をしつかりとやっておくことも重要だが、大切なことをぶつつけ本番でやらないこと。場数を踏むことが必要である。

「というわけで、この土日は静岡で行われる大会に出場する」
小倉さんはそう言って話を終えた。

「まあでもー、僕たち中学で大会には出てるから、初めてではないよねー」

「そうじゃなくて今年初の大会ってことだろ」

「ああそっかー、なるほどー」

「で、旦那。俺たちどうやって行く？」

「やっぱり電車か？みんなもそうだろう？」

「いや、俺とマサはうちの車で行くから別行動だ」

「浜ちゃんとマサはリレー二種目にも出るから……疲れる電車は避けるのか」

「そういうこと」

「ほかのみんなは？」

「俺は電車」

「……俺は池山先輩の車に乗せてもらう」

「僕も電車ー」

「となると電車が多いか……。旦那、俺たちも」

「そうだ、言い忘れとった」

体育教官室に戻っていった小倉さんが戻ってきて言った。

「ストレッチ用の毛布とか運ぶから、一年の三人くらい俺の車に乗れ」

「……………」(電車組四人で顔を見合わせる)

「「最初はグー！じゃんけんぽい！！」」

「いよつしゃああ！！」

まっちゃんが勝利したため、必然的に小倉号に乗るのは俺、義人、石井の三人に。

「……………なんだお前ら、そんなに騒いで……………で、誰だ？俺の車に乗るのは？」

「三井、杉田、石井です！」

勝った喜びが冷めないのか興奮したまま、まっちゃんが報告した。
「わかった。その三人は朝五時半に正門前集合な」

「……………わかりました」

捕虜になった敗残兵の気分だ。

「遅れたらただじゃ済まさんからな。覚悟しとけ」

小倉さんはそれだけ言い残して去っていった。

……………三河湾にでも沈めるつもりですか？その顔で脅さないでください。

「まあ、あれだな！運が悪かったと思ってあきらめる！」

「……………まっちゃん、一言いいか？」

「なんだ」

「うぜえ」

「断ってから直接言う言葉じゃないと思うんだけど！？」

「うぜえ」

「うぜえー」

「スギとイッシーまで！？」

「一人勝ちしやがって……………新月の夜道には気をつけることだな！」

「どこの不良だお前は！？」

「月の出てる日の夜道にも気をつけることだな！」

「俺、夜道を歩いたら必ず襲われるのか！？」

「むしろー、太陽が出てる道も気をつけることだなー」

「もはや外を歩けないじゃん！」

「いやー、最近事故が多いから」

「ただのアドバイスかよ！優しいなおい！ありがとう！」

「その話は置いておいて……小倉さんと二時間一緒に車の旅か……憂鬱だ」

「……ドンマイ」

「……田村はいいやつだな、ありがとう」

「……香典は出してやる」

「俺たちの死亡は確定済かよ！」

第六十一話 小倉号

高校初の大会当日。今日は義人の親も仕事がないそうで、義人を起こしておいてくれたので俺が起こす必要もなかった。……とか幼なじみの男子を毎朝のように起こしてる俺っていったいなんなんだろう。自分の運の悪さに涙が出てきそう。

「ふあゝ、おはよう旦那。朝からテンション低いな、どうしたんだ？」

「……お前のせいだ。せめてお前が可愛い女の子だったら、まだよかったのに」

「何言ってるんだ？」

「……すまん、今言ったことは忘れる」

俺も朝早いからどうかしていたようだ。現在の時刻は朝の五時だし。

「てつきり小倉さんの車に乗るのが憂鬱なのかと思ったよ」

「それは間違いなく憂鬱だ」

「即答すんなよ」

「事実だからしょうがねえじゃねえか！」

「逆ギレすんな」

したくもなるわ。

そして五時二十分。俺たちは北高の正門にいた。石井はまだ来ていないようだ。

「イッシーはまだみたいだな」

「そうだな……。義人、小倉さんの車ってどんなのだと思う？」

「やっぱりワゴンじゃないか？部員を連れて行くくらいだし」

「そうだよな、ワゴンとかだよな。……ならあれは幻覚か」

「どうした？旦那」

「……後ろ向け」

「なんでだ？まあいいけど……っておい！」

「……やはりお前にも見えるか。見えてしまうのか」

「あれって外車じゃねえか！」

そう義人が言ったとおり、俺たちの目の前には外車アウトディが止まっていた。その中には当然のように小倉さんが座っている。高校教師（しかも体育課）なのに外車ですか。本当に「教師は副業で本業はヤザだ」とかい言い出さないよな？お願いしますよ？

「お前らもう来とつたのか……中入れ」

「……旦那、中で簀すま巻きにされて三河湾に沈められないよな？」

「……俺に聞くな。普段の素行を思い返してみろ」

「なら大丈夫だな」

「その根拠は！？」

「何しとる。とつとと乗れ」

「「了解」」

「石井は」

「そのうち来ると思います」

五分後、石井が来た。その五分間、車の中は静寂に包まれていた。……恐ろしい威圧感だ。あの義人ですら話題に困ってしゃべれないでいるとは……！

「おはようございますー」

「ああ、おはよう」

「よく来た石井。待ってたぞ」

「イッシー、歓迎する」

「どうしたのー？二人ともなんか衰弱してるけどー」

「気にしたら負けだ」

「先生、どこ行くんですか？静岡に向かうなら、こっちの方に来なくても……」

「ああ、高城も乗せていくからな」

「そうなんですか？」

「あれー、知らなかったのー？」

「そんなこと聞いてないからな」

高城さんとは水泳部一年の紅一点（もう一人いた女子は途中で退部した）。この人も自由形フリースタイルで中学時代、県大会に出場している。五月後半まで自由形で俺より速かったのは、ここだけの秘密だ。泣いてなんかいないよ？

「おお、おったおった」

「……おはようございます」

未だにこの人の性格は読めない……俺が女子苦手だという理由が大半でもある。そのくせ夢見るなって？余計な御世話だ。俺だって女子に好かれないという思春期男子のむなしい欲望くらい持っているんだ。

「全員揃ったな。出発するぞ」

この後のドライブも、俺の胃を痛くしたのは言うまでもない。

第六十二話 屋外（前書き）

今日は大学の入学式なので早めに投稿。一人暮らしも始まり、すっかり新生活です。読者の皆さんも新生活ががんばってください。

第六十二話 屋外

「おい、みつちゃん。小倉号に乗った感想はどうだ？」

「……異空間にいたような気分だ……」

「イッシーとスギはどうだった？」

「結構快適だったよー」

「上々だったな」

「……この感想の違いはなんだ？」

「この二人だから小倉さんのプレッシャーの中、話ができたんだ。俺がどうこうできるレベルじゃない」

「……なんだその達観したような眼は」

「ようやく解放されたしゆっくりするかー」

「……大会はこれからだろ……」

気分転換にアップにでも行くか。

……油断していた。俺は寒さにだいが慣れてきており、しかも六月に入ったことで水温も二十度を越えるようになっていた。それが心の緩みにつながっていたのだろ。警戒というものを全くしていなかった。屋外の五十メートルプールがどれだけ冷たいかを知らないまま俺は飛びこんでしまったのだった。その結果。

「冷てえー！ーっ！ー！ー！」

馬鹿みたいに叫んでしまったのだった。

「……大会主催者何考えてんだ……？こんな凍える状況でどういいタイムを出せと……？」

「旦那、情緒不安定気味だぞ。大丈夫か」

「大丈夫じゃねえよ。見る。石井なんかプールから上がっても一言

もしやべれない状況だぞ」

「……………」(凍えて死にそうになっている。唇真っ青)

「でも旦那、石井の朝のテンションはどこへ逝ったんだろうな」

「漢字違う!」

「同じようなもんだろ」

「本人が逝きそうな時にそんなこと言うなよ!」

「……………」みっちゃん、あんたも何気にひどいこと言ってるぞ」

「でもほんとタイム伸びないだろうな、このコンディションじゃ」

「待て、発想の転換をするんだ!速く水から上がりたいという気持ちでいけばより速く泳げるかもしれん!」

「それはいい考えかもしれんな」

「……………」それならー、そもそも入らないのが一番だよー、……………」

「石井!死にそんな状態(凍死の危険)でネガティブなことを考えるな!」

「イッシー!もつといいことを頭に思い浮かべろ!」

「……………」いいこと……………?……………ああー、ヤンデレがいつぱいだー……………」

「それいいことじゃねえー!っ!」

この大会、北高は無難な成績を残し、なんとか死亡者ゼロで帰還できたのだった。

……………俺はもちろん小倉号で帰還したのだが。しかも二日間なので、行き二回帰り二回の合わせて四回小倉号に乗車。……………寿命が十年は縮んだかな……………。

三井の記録……………	50	自由形	29	・80	自己ベスト更新
100	自由形	1	・07	・55	自己ベスト更新

第六十三話 飛翔

「旦那……俺、もつと飛べると思うんだ」

「ついに壊れたか義人。いつか絶対なるとは思っていたが、案外もつたな」

「ひどっ!!」

「……で実際は何の話だ？」

「わかってないなら、初めからそういう対応をすることを要求する」

「おーい、松ちゃん。義人がおかしくなったぞ」

「は？いつものことじゃないのか」

「悪化した。「俺は飛べる。神だ」とかい出したからな」

「その言い回しだと俺が痛いヤツみたいじゃん！しかも俺は神だなんて言ってるねえ！」

「そうか……重症だな、みつちゃん。スギを精神科に……」

「ええっ！？俺の言葉は全面的に無視!？」

「義人、日頃の行いで人の信頼は変わる。肝に銘じることだ」

「その信頼を悪用するなよ!!」

「おーい、浜ちゃん、義人がおかしくなったぞ」

「は？いつものことじゃないのか」

「もうやめてくれーっ!!」

「……っていうか相談しようとしたのに、どうしてこんなことに……」

「急にお前が「飛べる」とか言うからだろうが」

「飛ぶって言ったって飛び込みのことだよ……」

「それで「もつ」とか言ってたのか」

「覚えてたのかよ!？」

「もちろんだ」

「確信犯じゃねえか！」

「無論だ」

「……もついい……。それで、俺もつと飛びこみの飛距離伸ばせると思うんだが」

「それは俺に対する厭味か？現時点でも俺より遠くまで飛び込んでるだろ」

俺の飛び込みのスタイルはスタンディングスタートで、義人はクラウチングスタートという違いはあるが。スタンディングスタートは腕で押し込む力が小さいため飛ぶ距離が少し短くなる。ただしスタートの反応が速いという利点もある。しかしこれも、熟練すればクラウチングスタートで素早い反応をすることも可能だから、俺の意見ではクラウチングスタートができる選手の方が有利だ。俺は練習してもうまくできないのでやらない。義人はそのクラウチングスタートが上手く、しかも反応が早いことから、俺からすれば贅沢な悩みにしか思えない。

「いや、旦那つて細かいところによく気がつくからさ」

「みみっちい男だと言いたいのか」

「いいからいいから、今から飛びこむから見えてくれ」

そう言つと、俺の了承も取らず飛びこんだ。まあ見てみるけど。

「どうだった？」

「もつと後ろに体重かけたらどうだ」

「よしやってみる」

もう一度飛んだとき、フォームは多少崩れたものの飛距離が伸びていた。あと何回かやってみれば、それも解消されそうだ。

「……義人は才能あるよ」

「いや、旦那の観察力も相当なものだと思う」

第六十四話 料理

今日は家庭課の授業で調理実習。メニューはハンバーグという定番料理だ。俺は日頃、料理をしないため、あまり包丁さばきなどがよくない。しかし今日に限っては、そんなことを気にする心配は全くない。

「おい旦那、仕込みは終わったから鍋見ててくれ！焦げ付かないようにな！」

……俺の班には料理の鉄人がいるからだ。

「おい暇な女子！皿出すとか、調理器具片付けるとかしとけ！」

「……はい」

義人は親が家庭科の先生をしている影響で、子供の頃に料理洗濯など、家事を片っぱしから叩き込まれたらしい。その料理の腕前は、味覚があまり発達していない俺ですら、一味違つとわからせるほどだ。義人はこういう様々なところでハイスペックを見せるから困る。ただのアホだと言いきれなくなるし。

「よし旦那！デミグラスソースは俺がかき混ぜるから、ハンバーグの方を見てくれ！」

その料理の鉄人がいるおかげで、俺はほとんど作業をしていない無駄に凝った料理にしようとして、他の班より作業工程が圧倒的に多いはずなのだが。調理実習でデミグラスソースを作るってどうよ？それなのに他の班よりずっと進んでる。……まあ一つの班が大変なことになっているようだ、視界に入れないようにしよう。都合の悪いものは見ない。これがこの学校で平穩に過ごすコツだ。ここ、重要だから覚えておくように。

「ああっ！少し焦げてるし！何やってたんだよ！」

そんなこと言われても困る。俺は十六年近く生きてきたが、そん

なソースを煮込んだ経験なんてない。他の班員たちも戸惑ってる。熱血しないでくれ。

……で、完成品。

「……なんですか、これは……？……おいしい……」

家庭科の先生（新米）絶句。そりゃあそうだろうな。途中、三班のフライパンから火が出て（清水らが「フランベってかつこいいよな！やろうぜ！」とか言って料理酒を注いだ結果大惨事に）、始末に追われてたからな。作業を見ていない状態で、突然こんなものが出てきたら驚きもするだろう。三班の作品の試食は、拷問にしか見えなかったし。

「……三班との評価でできた差はどうすればいいんだろう……？」
先生も大変だな。同情するよ。

一方鉄人は。

「……五十点だ。焦げ付いて野菜の風味が消えてる」
……自分に厳しいな。普段からそうしろ。

第六十五話 差

ついに来た。来てしまった。高校初の公式戦。そして俺のタイムでは県大会には出場できないので、新人戦までは当分ない、一年で二度しか出ることのできない公式戦である。

「狙うは自己ベストの更新だ」

「旦那、もっと望みは高く持とうぜ」

「そうだよー、もっと高く持とうよー」

お前たち泳ぐのが速い変人と、凡人である俺を一緒にするな。

「……で、お前らの具体的な目標は？」

「県大会出場だ」

「義人のタイムなら楽勝だろ。確か200バタフライは二分四十秒以内だよな」

「俺のベストが二分三十五秒だからな。疲れはあるが何とかなるだろう」

小倉さんが「北高の目標は東三大会ではない。県、東海大会だ」などと言つて、調整練習をさせなかったため、疲れがたまっているやめてほしいものだ。

「なら石井の目標は？」

「完泳＋力尽きないこと、だよー」

「それ高い目標！？」

まあ石井にとっては死活問題なのだろうが。

「いいか、全員自己ベストの更新を目指せ。バテている状態で実力を発揮できてこそ、本番でもいつもの力が発揮できる」

俺にとってはこれが本番なんです。何度も言うようだが、やらハイスペックな皆さんと凡人の俺を同列に扱わないでほしい。

「東三大会二位の確保は至上命題だ。ベストを尽くせ」

「「はい！」」

俺は戦力にはならんが頑張ろう。応援くらいしかできんが。

「ところで先輩、どうして東三大会二位が目標なんですか？一位狙わなくてもいいんですか？」

「……世の中にはできることとできないことがあるんだよ」

「……………」

「まあ最初の種目……メドレーリレーか……を見ればわかる」

「そうですか。うちも相当早いと思いますけど」

一年二人（浜口、片山）が加入したメドレーリレーは、県大会標準記録（これを上回れば県大会に出られる）を余裕で突破している。引き継ぎでミスがなければ、間違いなく県出場なほど速い。

「……見ればわかる」

「わかりました。見てみましょう」

「メドレーリレー一位、豊玉高校。なお、この記録は東三大会、県大会を含め新記録です」

「……なるほど。格が違いますね」

「なにせ去年全国三位だから……」

北高のメンバーも県標準記録を悠々突破し、見事二位だったのだが、それでも豊玉高校とはかなりの差が開いた。何なのあれ？反則じゃない？

「速すぎでしょう」

「全国から選手を集めてるからな」

巨人か。傭兵集団ておい。

「先輩、一言いっていいですか？」

「いいぞ」

「……豊玉高校は東三河から出て行け」
切に望む。

第六十六話 騎士

「さて、次の種目は……100バタフライか。出るのは……義人、石井、村松先輩だな」

義人と石井は言わずもがな。村松先輩とは、ヘルニアで腰を痛めている二年の先輩である。

「順番から行くと村松先輩からか……出てきた。がんばってくださいーい！」

水泳はエントリータイムが遅い順から登録される。よって怪我をしている村松先輩は最初の方だ。練習熱心でいい先輩なのだが……怪我をしているのが悔やまれる。がんばってほしい。腰の痛みを悪化させない程度に。

「Take your marks…」

ちなみにこれはスタートの合図。中学までは「用意」だったので、この前の大会では驚いた。こういうことに慣れたという意味では、この前の大会は決して無駄ではなかった。寒かったけど。

「タイムは……一分十二秒か。県は無理だったか」

怪我している身で、それだけのタイムが出せるのだから頭が下がる。県標準記録は一分十秒。俺のベストは一分十六秒。これでも中学まではバタフライが専門職だったんですよ？

「応援ありがとう」

村松先輩がこちらを向いて礼を言っていた。どれだけいい人なんだあの人は。あれで京大を狙えるほどの頭脳を持っているんだからうらやましい。うらやましいにもほどがある。これだから北高の連中は……。

「みつちゃん、次はイッシーだ。応援するぞ」

「わかった。奴は十五メートルくらいまでは敵なしだからな。スタミナさえあれば完璧なんだが」

「無茶言つなよ。あのイッシーだぞ？……お、出てきた」

「どれどれ……ぶうー……っ！！！」

飲みかけていたスポーツドリンクを盛大に吹いてしまった。だがやむを得ないだろう。

「石井、なんて恰好してやがる！！」

石井はなんとジャージではなく、全身にタオル（しかも着替え用のやつ）を巻きつけて登場したのだ。馬鹿だ、馬鹿がいる。

バツ。

「ぶふううー……っ！！！」

今度は口に何もいれていないのに吹いた。今度はタオルを変質者のように開き（コートを開くイメージ）、その中から、小島よしおがはいっているような海パン（俺たちはそろって競泳用の膝くらいまである水着を買っている。なのになぜか、中がはみ出そうなほどきわどい水着）を出したのだ。何がしたいんだあいつは！！？

そうして開いたポーズのまま観客席をぐるりと見回し、硬直している俺と目が合った。

「三井ー、どうー？いいでしょー？」

石井は馬鹿みたいに大きな声である。ドームに響くほどの。

「やめろ！俺に話しかけるな！！変人の一味と思われる！！！」

「みっちゃん、もう手遅れだ」

周りの目線が俺に向かっている。やめて！そんな目で俺を見ないで！！

「take your marks…」

スタートしたようだが前を向けない。というか顔を上げられない。恥ずかしくて悶死しそうだ。

「おお、イッシー県出場だ」

どうでもいいよそんなの。今は俺に話しかけないでくれ。

その後、義人も順当に県大会に駒を進め、前半の種目が終わった。俺は午後からの50と100の自由形に出場する。

「三井、どうー？カッコ良かったでしょー？」

「どこがだ！？」

「イメージはジェダイの騎士、なんだけど」

「どこが！？」

よくて風呂上りのおっさんだ。

「あのマントとかさー」

「あれマント！？」

タオルはマントだったらしい。

「あの格好のおかげで県に行けたかなー」

「そんな効果が！？」

恐るべし変態マント&海パン。

「みんなも真似したらー？」

「北高が危ない人の集まりだと思われるわー！」

「今でも大して変わらないじゃないー」

「……………」

反論できん。

第六十六話 騎士（後書き）

全国の学校なんてそうそうないだろ！と思うかもしれませんが、作者の母校の地区にいました。実際消えてほしかったですね。レベル違いすぎ。さすが私立。公立では歯が立たない。浜口のモデルが一人食い込むくらいでした。海外遠征とか高校生がするなよ（笑）

第六十七話 応援

「無難だな」

「だがそれが旦那らしい」

「普通だ」

「……平凡な成績」

「県にいけなかったのは残念だな。だが三井らしいタイムじゃないか」

「三井らしいよー、この無難さがー」

「……お前ら、人を貶めてそんなに楽しいか」

俺が泳ぎ終わった後、みんなからかけられたのはこのような言葉だった。タイム自体は自己ベストを少し上回るくらいだったのだが、それだからといって「平凡」だの「無難」だの言わなくてもいいじゃないか。まあ、出場する前に俺が「全力を出してみんなをあつと言わせてやるか」などと言ったのが原因の一つでもあるのだが。まるで俺の代名詞が「普通」であるみたいに聞こえるぞ。……まあ他の北高生に比べれば>普通<で>平凡<ではあるか。

「後残るはフリーリレーか。これが終われば帰れるのか？」

「いや、小倉さんの話があるだろ」

「……となると帰りは相当遅くなるな」

「なんてったって>審判長<だからな」

開会式での審判長注意で、小倉さんが出てきたときはかなり驚いた。あの顔でそんな偉い地位についていたとは……。小倉さんも北高の関係者であることをしみじみと感じた。やっぱり無駄にハイスベックな人多すぎだろ。

「……お、フリーリレーの最終組だ。四人ともいるな」

「がんばれー！浜ちゃん！」

「マサ！気合入れる！」

「部長も副部長も頑張ってくださいーい！」

「ジャステイス！」

なんか変な掛け声入った！？

「なんだその応援！？」

「え？よくない、旦那？」

「義人かよ！ジャステイスって正義じゃねーか！競泳と関係ねえ！」

「ならー、パラメラーー！！」

「……なに、それ？」

「特に意味はないよー」

「ただの奇声かよー！！」

「……缶コーヒー、プス」

「田村まで無理にボケなくていいから！！」

「ありがとう！俺たち、頑張る！！」

「ええ！？今のどの言葉で盛り上がったの！？」

謎だ。

「Take your marks...」

「ああ！気持ち悪いところで始まった！なんか嫌だ！」

「旦那、慣れろ」

「無理だー！！」

フリーリレーも敵を寄せ付けず二位だった。一位の豊玉高校とはかなり後れを取り、三位の豊岡高校を引き離したので、寄せ付けていないのである。団体成績も男子総合二位（一位の豊玉高校とは三倍リブルスコダの点差）、女子総合五位と好成績だった。……女子は二人しかないんですけど。恐るべし高城さんと福盛先輩。

第六十八話 中原中也

「期末テストが近づいてきましたねえ」

そうですね、健三さん。ですから、とつとテスト範囲まで授業を終わらせてください。

「梅雨ですねえ」

そうですね、健三さん。じめじめして嫌なのはわかりますが、テスト範囲まで授業を終わらせてください。

「雨ですねえ」

そうですね、健三さん。

「……授業面倒くさい」

ぶっちゃけちゃった！この古典教師、言うに事欠いて「授業したくない」ってぶっちゃけちゃった！！

「というわけで、今日は授業をやめて別なことをします」

……どうせ何を言ったって聞き入れちゃくれないんだろうな……。

「中原中也、知ってますね」

中学の授業で聞いたな。確か詩人だったっけか。

「皆さんが知っているのは、汚れつちまつた悲しみにくの詩だと思っています」

それだけしか知らないし。

「そこで今日は、この北高に入って汚れてしまったものを上げてください」

……候補がありすぎて困るんだが。

「では杉田」

「二次元に関してのプライド」

「具体的な理由は？」

「石井という好敵手^{とも}と出会い、この件に関しては一番ではないと自覚したからです」

にやりと不敵に笑う義人と石井。アホでーす！ここにアホが二人

いまーす！！

「次、清水」

「評判です」

「理由は」

「女好きですぐに告白する奴だという、根も葉もない噂が立っているからです」

事実じゃねえか。

「こんなに純情一途なのに！！」

どこが！？

「では次、菅原」

「心です」

「理由は」

「私、シヨタコンになっちゃったんです！悪い仲間と毒されて！！」
安心しろ。それは他の人でなく、自分にほとんどの責任がある。

「昔は髭のある渋い男が好きだったのに！！」

オタクになったとかそういう話じゃないのかよ！！

「次、原」

「全てです」

「次、小坂」

原君のそこ流した！？スケールでかすぎだよ原君！！気持ちはわかるけど！！

「では最後に、三井」

「今までの常識。自分の存在意義。人を信じる心。能力差をあきらめない気持ち。現実を直視しようとする意志。教師の言うことは基本的に正しいという刷り込み。理不尽と戦おうとする信念。平均より高い力を持つとする生き方。プライド。将来の希望。夢。などです」

「頑張つて生きてください、三井。では授業を終わります」

……今のカミングアウトで頑張っ
て生きていく自信がさらに減り
ましたよ。ファイト、俺。

第六十八話 中原中也（後書き）

明日から大学の授業が開始です。九十分も耐えられるんだろうか……。

第六十九話 恵みの雨（前書き）

三万アクセス突破です！皆さん読んでくださってありがとうございます。
今後ともどうぞよろしく。

第六十九話 恵みの雨

「梅雨だな」

「そうだな、旦那」

雨なので徒歩で登校中の俺たちは、北高の敷地内を歩いていた。

……門から昇降口までが遠すぎる……。

「雨がよく降るな」

「梅雨だからな」

「雨はうつつとしいが、こういうのも農業には必要なんだろ？」

義人の家は結構な地主で、おじいさんが農業をしている。その所有している土地の資産額は億に上るらしく、その手の業者からは、土地を売らないかとの持ちかけが後を絶たないそうだ。そりゃ、農地にしたまま数年に一度しか使わない土地があれば、売ってほしくもなるだろう。土地は有効に活用しましょう。まあ、先祖代代伝わったものだから売るわけにもいかないだろうが。その農地で、米や野菜などを作っているのだが、義人は毎年その手伝いをしている。させられている。そんなわけで義人は農業にも詳しいのである。

「そうだな、農作物に限らず、草木や生き物にもこの雨は重要だ」

「そうか、成長の大事な要因なんだな。恵みの雨、ってやつか」

「うん。自然の法則に従って、すべてのものは生きているわけだからな」

「その点、この北高は緑も多いし、生き物は育ちやすい環境にあるんだな」

「その通りだ。まあ生き物なんてのは強いから、どんな環境でも結構生き延びるけどな」

「なるほど。もう一つ質問いいか？」

「なんだ、旦那？」

「……その雨と環境で育ったと思われる、あの芝生の上のいかにも怪しげなキノコはなんだ？」

「俺に聞くな」

即答かよ。

「……なんだよあれ……？どこから湧いて出てきやがった？」

「北高は自然がいっぱいだな」

「あの「僕は毒をもっているよ！」って自己アピールしている色のキノコを自然と呼ぶのには、かなりの抵抗があるのだが」

キノコならキノコらしく茶色とか白色とかになれよ。なんで黒ずんだ紫色してるんだよ。

「旦那、食ってみて」

「それはあれか。新手のいじめか」

「そんなことないよ。意外とおいしいかもしれないじゃん」

「意外と言ってる時点で、お前もまずそうだと思ってるのが丸わかりなんだが」

「期末テスト休めるかもよ？」

「長期入院覚悟！？」

「楽になれるかもよ？」

「死亡覚悟！？」

「気持ちよくなれるかもよ？」

「幻覚作用覚悟！？」

「やったー、志望高校に受かったぞ！これからは遊ぼう！」

「高校合格後！？……ってそれ違う！！」

教室に入って、始業を待ちながらも続きをだべる。

「まあ、あんな不気味なもの無理だよな」

「そもそもなんてキノコだあれ？」

「芝生掃除のやつに言って、採っておいてもらおう。あれは景観的にも力オスだ」

「処理はどうするんだ？」

「肥料とか」

「食べようぜ、誰か」

「そんなの無謀だろ。あんな怪しいの食うのは、どうかしてるって」
そんなことを言っていると、教師が来た。なぜか健三さんではなく、副担任の教師。

「センサー、健三さんは？」

「……山本先生は食中毒で昨日病院に運ばれました」

……まさか……。……違うよな……。？

第六十九話 恵みの雨（後書き）

できれば感想ください。 作者は感想に飢えています。

第七十話 寸評

テスト週間だというのに、空気を読めない男性教師と専らの評判（主に水泳部員、その親からの評判）の小倉さんによって、水泳部は活動させられていた。そのため俺たちは今、教室から結構離れたプールに向かっている。もうすぐ県大会だということのも大きい。俺は県大会出られないから、泳がなくても別にいいのに。かといってテスト勉強するつもりもない。一夜漬けでいいじゃない！……追試は嫌だけど。

「……面倒くさい……」

「おい旦那、それを言ってしまったら健三さんと変わらんぞ」

「そうだよー、将来あんな大人になっていいのー」

「なりたいわけあるか。断固として拒絶する」

あんなの（かなり失礼）になったら、世間からの冷たい目線を一身に浴びることになるじゃないか。北高だからまだもっているけど、……あの破天荒教師がなんとかなってるって……改めて考えると、恐ろしい学校だな。そりゃ世間から「魔窟」だの「カオスポッド」だの「一流の不良品」だの言われても仕方がないわ。

「そんな大人になったら、俺は生きていけん」

「……旦那の健三さんに対する評価が、よくわかったよ」

「でもさー、健三さんの性格になれるなら大丈夫じゃないー？」

「どういうことだ？」

「だってさー、他人の視線に無頓着になるんじゃないー？ 健三さんって我が道を行くタイプだしー」

「なるほど、そう言う考え方もできるか」

「なら旦那、健三さんみたいな大人になりたいか？」

「なりたいわけないだろう」

我が道を行くって、要は自己中心的ってことだろ。健三さんが損得勘定を抜きにして、他人のためにつくす姿が想像できん。

「……旦那って健三さんのこと嫌いなのか？」

「そんなことはない」

誤解してはいけない。俺は健三さんのようになりたくないだけであつて、健三さんの生き方を否定するつもりは全くない。むしろ尊敬している。決してなりたくはないが。反面教師（してはならない見本）のようなものか。

「そうか。なら一安心だな」

「そうだねー。担任が嫌いだと面白おかしく生活できないもんねー」
少なくとも俺にとって、今の生活は面白おかしいよ。心労も多いし、俺の青春はこれでいいのかと疑問も出てくるが。

「さて、今日も泳ぐか」

部室に着き、扉を開けようとすると、背後から歌が聞こえてきた。

「つーきーのひーかーりにーみーちびかーれー」

歌を歌いながらママチャリで疾走する健三さんを見送り、義人が一言。

「なんでジャージ姿なんだ？」

「突っ込みどころそこじゃねえ!!」

第七十一話 黒

化学なんてものは、人類の歴史に必要なない　むしろ弊害ばかりが付きまとう　恐ろしい学問だ。人の利便さのみを追求していった結果、地球の環境は破壊され、二度とは戻らない事態を数え切れないほど引き起こしてきた。化学が発展してこなければ、大量の工場が作られたことで排出されるガスによる大気汚染などという、この地球全ての生命体に悪影響を与える害悪をなすことはなかっただろう。化学が発達してこなければ、日常的に生じるヘドロでの水質汚濁などという、あらゆるものに傷を負わせる悲劇は起こらなかっただろう。ある人はこう言うかもしれない。その科学のおかげで、今お前たちは便利な生活を送れているのだと。それはある点では正しいだろう。しかし、便利な生活が必ずしも充実した生活だと言えるだろうか？生産者が化学物質を使うことで食物を偽り、消費者である私たちを騙しているこの日常が素晴らしい日々だと自信を持って言えるだろうか？それでも化学が存在していてよかったと言えるのだろうか？確かに便利なことはいいいこともかもしれない。しかしそれが存在しなくても人間以外の生き物は生きている。食物連鎖という厳しい現実と向き合いながらも生きている。その生活はくだらないものではものでは決してないだろう。人間もかつてはそうして生きていたのだ。今からでも遅くはない。化学を捨てて、自然に帰ることで得られるものは少なくないはずだ。化学を捨てよう。そうすれば今正に起きている悲劇を食い止めることができる

「というわけで化学の追追試はやめにしましょう」

「言うに事欠いてそれかね、三井君。いいから問題を解きたまえ」

期末テストでまたしても化学で赤点を取った俺は、化学の小林先生とマンツーマンで追追試を受けていた。追試に落ちたから追追試

なのである。化学なんていらねえよ!!（逆ギレ）

「小林先生、もういいじゃないですか。追追試なんですから甘く採点してください」

「それじゃ君のためにならんだろう」

「先生も忙しいでしょう？早く終わりにしましょうよ」

（本音）もう七十歳過ぎて残り少ない人生なんだから時間は大切に
使え。

「私も終わりにしたいんだが、困ったものだ」

（本音）お前が馬鹿だから悪いんだろう。

「そこをなんとか。やめにしましょうよ」

（本音）時間の無駄遣い。帰らせる。

「仕事だからな。いいからやりなさい」

（本音）こっちはこれで給料もらってるんだ。簡単なのになぜできないんだ。

「……………」

「……………」

（無言で二人にらみ合う）

「旦那ー、終わったか……………って何この空気！？重っ!!!」

「……………義人、今は忙しい。部活には後で行く」

「……………杉田君、そういうことだから顧問の先生には言っておくように」

「黒旦那だ……………黒旦那と張り合ってる講師がいたなんて……………」

「「わかったな?」「」」

「わかりましたあー!!」

義人は恐ろしいものでも見たかのように小走りで去っていった。

「さあ、続きを始めようか……………」

「望むところです……………」

結局この日、部活には行けなかった。……………なかなかの好敵手だった……………。

第七十二話 けん（前書き）

大学生活って大変。

第七十二話 けん

「おのれイーシイめ！！父の敵だ！！死ねえーっ！！」

「愚かな……憎しみに囚われ、暗黒面に落ちたか、ハマグチ……」

「貴様のせいで……俺がどれだけ苦しんだと思ってる！？その重さを知るがいい！！」

「私が引導を渡してくれる。かかってきなさい」

……いつから水泳部はイタイ人の集まりになったんですか。

期末テストも無事終わり（化学の追追試は許容範囲）、部活に本腰を入れようとしたらこれだ。プールサイドで何やってるんだ、お前ら。

「大体において、そのちやちな剣はどこから調達してきた？」

「剣なんて言うなよ、みつちゃん」

「そうだよー、ライトセーバーだよー。見てわからないのー？」

「ライトセーバーのつもりだったのかよ！」

「百円均一ショップに売ってたよー。五本入り百円でー」

「ライトセーバー業界には、デフレが到来してるのか！？」

「……で、その格好は？」

首にバスタオルを巻いて、水着の中にライトセーバー（自称）を差している光景は、いつ通報されてもおかしくない状況だ。プールサイドで、しかも北高だからまだなんともなっていないが。いざというとき、この学校は大丈夫なのだろうか？

「この前も言ったでしょー？ジエダイの騎士だよー」

「前にも思ったがその格好から連想するのは変態だ。夜道で恥物を見せる露出狂としか思えん」

頼むから、将来夕方のニュースとかで見かける存在にはならなくてくれ。頼むから。

「浜ちゃんまで何してるんだよ……。県大会まであと二週間くらいだろ？」

「だからこそその気分転換だ。調整はスイミング（スクール）でやるから」

「……ああ、そうですか……」

もつと他に気分転換の方法はあるだろう！とは突っ込まない。大人の対応をしないと。単に相手をつっ込むのに疲れたわけじゃないよ？

「三井もやらないー？」

「おもしろいぞ」

「遠慮しとく」

そんなのイタイだけだろうが。

「そっかー、残念だなー」

「ところで練習は？」

小倉さんの姿が見えない。もしかして今日は休みか？

「小倉さんは出張だから来ない」

「なら練習は休みか？」

基本的にプールでは大人がついていないと泳いではいけない。これ鉄則。

「いや、代わりの先生が来て見てくれるらしい」

そうか、それなら練習できるな。

「……その先生は？」

「さっき来たけど、今はちょっと出払ってる。もう戻るだろ」

「あー、帰ってきたよー」

やってきたのは健三さんだった。

「……なんで健三さんが……？」

「小倉さんに頼まれましてね。仕方ないから、一年間いつでも来てあげるの、秘蔵の日本酒一本もらうという条件で引き受けてあげましたよ」

「……教師がそんな生々しい取引しないでください……」

「ご苦労様です！マスターケンゾウ！」

健三さんも加わったのかよ！！マスター！？

「これ頼まれた飲物です」

しかもパシられてる！？マスターなのに立場弱っ！！

「何やってんですか健三さん！！」

「すたーっおーずごっこ、ですけど？」

「そんなことも知らないの？みたいな顔しないでください！！練習やりますよ！！」

「えー」

「取引してまで頼まれたのに、渋らないでください！！」

「仕方がないですね。では部員の皆さんをお呼びください」

仕方ないと言っなよ！

「今日は私が練習を見ます。見るだけですけど」

見るだけですか。

「面倒ですので、事故起こさないでくださいね。足が攣つかっても、自分たちで対処してください。では始め」

……本当にいるだけのつもりか。いいけど。

「ああそうでした。小倉さんにメニューをもらっているので、それをやるようにとのことですよ」

……。量、多っ！！

「では後はご自由に」

プールサイドで読書ですか。いる意味あるのか？まあ形式的なものだけだ。

幸いにして、普段から鍛えられている俺たちは事故を起こさなかった。めでたしめでたし。

第七十三話 モチベーション

梅雨も明け、気温も上がり、絶好の水泳日和。県大会も近く、部員のモチベーションは最高潮だ。

「夏だ！」

「プールだ！」

「水泳だ！」

「大会だ！」

「覚悟ーっ！」

「貴様！叩つ切ってくれるー！」

「初めてですよ……私をここまで馬鹿にしたおバカさんたちは……」

「愛よ！」

「勇気よ！」

「希望よー！」

「ホーリーアップ！」

「ぶっ殺す！」

……モチベーションの上がる方向が間違っていることは置いておこう。とりあえず。

「覚悟って何を覚悟すればいいの！？叩つ切るって誰を！？お前はフリーザか！？愛よ！勇気よ！希望よ！って赤ずきんチャチャじゃねーか！！ホーリーアップすんな！誰と戦うつもりだ！？水泳で殺しは不味すぎるからー！」

……ふう、すっきりした。

北高水泳部は、燃えている。ここ数年、決して越えられなかった壁。県大会団体の部での入賞。それが、ある一名が入部したことで現実味を帯びてきた。その男の名は 浜口信也。中学時代、愛知県大会にて最優秀選手賞を受賞した、一年にして最速のエース。

「祭りじゃ！祭りじゃ！」

「うるさい！他の部に迷惑だからやめい！！」
そこで踊っているのを見ては信じられないが、間違いなくこの大会のキーマンだ。頑張れ。

「何をふざけとるお前ら！練習を始める！！」

おお、さすが小倉さん。鶴の一言でみんなが黙った。踊ってる連中も動きを止めた。残念ながら、両手を上げて振り向くという不気味なポーズで怪しさ満点だ。

「余裕のようだな……わかった」

何がわかったんですか。

「今日は短距離練習を行う!!五十メートルベスト・二秒が出るまで帰らせん!!」

「うぎゃあああああ！！」

鬼！！悪魔！！ヤクザ顔！！無駄筋肉達磨！！……と心の中で悪態をついてみる。まあ、でも俺は県大会でないし。別にいいんだだけだね。俺はタイム計測と声出しだけでやらせてもらおう。

「旦那……お前もやれよ」

声が怖いですよ、義人君。

「後で私のフォーヌで消し去ってくれる……」

石井、なんでジェダイモードだと声が間延びしないんだよ。いつもそうしろ。あと消し去るって、どう考えてもやりすぎだろ。やっかみくらいでなぜ消されんといかん。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

[illegible]

大会前だというのに、部員は相当量を泳がされたのだった。そして、俺は嫉妬を一身に浴びるのだった。ガクガクブルブル。

第七十四話 プロ野球

県大会に向けての調整練習後。

「みんなは野球どのファン？」

「なんだよ、松ちゃん。藪から棒に」

「いやあ、今年はパ・リーグがなかなかの混戦で面白いからさ。野球の話題で盛り上がるうぜ」

「あいにくだが、俺は野球に興味はないな」

「僕も同じく」

「浜ちゃんとマサは野球は観戦しない派か」

「そもそもルールがわからんしね」

「それはもつたいない」

「俺もそう思うぞ」

「そうか……そのうち野球中継でも見てみるわ」

「そうしとけ」

「で、スギはどここの球団が好きなんだ？」

「東京読売巨人軍だ」

「ああ、あの金満チームか」

「人聞きの悪い言い方はやめようぜ旦那！大体旦那は前から知ってるだろ！」

「いや、なんとなく言わなきゃならん気がして」

「そんな気は、かめはめ波と一緒にでも大気圏の外まで飛ばしてしまえ！」

「かめはめはー」

「やる気ねえなあ、おい！」

「まあまあ、スギ。落ち着け。好きな選手は誰だ？」

「打てるキャッチャー阿部と、燃えるセットアッパー豊田だ」

「打たれるキャッチャー阿部と、炎上するセットアッパー豊田か」

「だから旦那！変なフレーズつけるな！」

「少し変えただけじゃないか」

「その少して駄目ダメな選手になっちゃうから!」

「そう言うみっちゃんは、どこのチームのファンなんだ?」

「東北楽天ゴールデンイーグルス」

「……また微妙な」

「どこが微妙だというんだ」

「愛知県人なのに東北の球団応援してるとこ」

「まあ、それは置いておいて」

「結構地元球団は重要だとは思わないか」

「思わない。ドラゴンはあんまり好きじゃないんだ」

「そうなのか?」

「ああ。山本昌とか岩瀬とか堂上兄弟とか浅井とか谷繁くらいしか好きな選手がいないから」

「多くないのか、それ」

「俺は楽天のたいていの選手が好きだからな!この程度ではまだまだ」

「……そうか」

「なんだそのテンションの下がり具合!」

「ごめん。かなり引いた」

「そっちからネタ振りしたくせに!」

「旦那は何事もやりすぎだ」

「そんなことないだろ」

「楽天が球団新記録作るたびにメールしてくるのはやりすぎだと思
うんだ」

「だって、球団新記録は大したことだぞ?」

「球団創設から歴史が浅いんだからすごい量になっているんだが」

「……それについては気持ち謝ろう。まだ続けるけど」

「続けるのかよ!」

「それについてはほどほどにしておけよ、みっちゃん。別に俺じゃないからいいけど」

「何気に見捨てられてる!？」
「まあ義人。今年も楽天ニュースに付き合わせてやる。光栄に思え」
「……拒否権は？」
「そもそも俺の中で、お前には人権が与えられていない」
「ひどっ!！」
「ただし楽天ニュースを受ける義務はある」
「横暴だ!！」
「いいじゃないか」
「興味ないことに付き合わされるのってしんどいんですけど!！」
「運命さだめだよ」
「格好よく言っても俺の運命さだめは変わらんのだろ!？」
「当然だ」
「理不尽だ!!!！」

第七十四話 プロ野球（後書き）

最近アクセス数が減少しています。……もしかして飽きられた？な
どと思う今日この頃。ネガティブですいません。

第七十五話 離別

一学期最後の古典の授業が終わろうとしていたとき、健三さんが物々しく語り始めた。

「私がここで教えるのは今日で最後になるかもしれません」

……なんだつて？

「どういうことですか先生!？」

「まさか病気とか……」

「水くさいじゃないですか!どうして何の相談もなしに辞めるなんて言うんです!？」

「私たちはできる限り先生の力になりますよ!」

がやがやと生徒たちが健三さんに問い詰める。なんだかんだいって、健三さんは生徒間で人気が高い。主に俗世から離れたような不思議な存在感がその理由だ。

「まあ落ち着いてください。かもしれないというだけです。可能性は高いですが」

「ダメじゃないですか!」

「体力の限界とか!？」

「私は病人ではありませんよ。疲れるのが嫌なだけでそれは教師としてはどうなんだ。」

「じゃあ借金とか!？」

「私のモットーは堅実な生活です。借金は家のローンくらいですから問題ないですよ」

堅実だ。正に健三さん。

「なら一体なんですか!!!」

そうだ。理由がわからん。

「理由はですね……」

理由は？

「サマージャンボ宝くじで三億円当てるからです!!!」

.....。

「「「.....」」（みな、あまりの自信と現実味のなさに無言）
.....この教師は何を考えて生きているんだろう。」

「.....それで、どうして最後の授業になるんですか？」

いち早く立ち直ったHR会長がみんなの気持ちを代弁した。

「三億円あつたら働く必要ないでしょう」

駄目人間がここにいる。生まれる時代が違つたら、ニートになつてたんじゃないか、この人は。

「.....でも当たる可能性なんてごくわずかですよ.....？」

「当たる？何を言ってるんです。当てるんですよ」

当てるてそんな。超能力にでも目覚めましたか。

「ある生徒と出会い、フォースを習得した私にとっては造作もないことでしょう」

ある生徒つて石井だ！！あいつが原因かよ！！

「.....当てたとして、残りの授業はどうするんですか？」

「藤田先生に一千万で引き受けてもらいます。なに、三億の中の一千万ですからね。はした金ですよ」

なんで当てた気分になれるんだろう。そもそも宝くじって堅実から遠い気もするが、どうなのその辺。

「しかしあなた方には一銭も渡すことはありません。残念でした」
残念なのは健三さんの脳内だよ。

「では授業を終わります」

.....まあ、どうせ当たらないだろうな。あんな墮落した人にそうそう運がいくとは思わんし。

「ああそうでした。あと一つだけ」

あなたはどこぞの刑事ですか。

「佐藤先生も買ったそうです」

サッティーもかよ！！

「彼も言っていましたよ」

.....なんて？

「この人生を変えてみせる……だそうです」
たかが宝くじなのに、それにかかる執念が怖すぎるよ！

第七十六話 混沌

「あー、妹がほしいなー」

「貴様は何をいつとるんだ、石井」

また石井が何かわけのわからんことを言い出した。

「もちろんー、本当の妹じゃなくてー、義妹だよー」

「そんなとこ誰も反応してないから」

「まあ、それには同意だな」

「同意するのか!？」

さすが義人。石井とは意見が合うようだ。変人二次元オタク同士で。

「そもそも義妹ってなんだよ。お前たちは親に再婚でもしてほしいのか」

「馬鹿だな、旦那。そうじゃないんだよ」

何が馬鹿だ。お前のような俺と違う世界、通称二次元に生きる奇人に馬鹿呼ばわりされるいわれはない。

「そうだよー、三井にはエロチシズムというものがわかってないねー」

そんなもんわかりたくもないわい。

「いいか、旦那。ここでは設定が大事なのだが、そんな悲しい展開から発達する必要はない」

「悲劇はのちにハッピーエンドにつながるかもだけどー、現実ではねー」

「現実で義妹なんて考えてる時点で終わってると思うのだが、どうだ」

「ところでダ・カーポ系統は義妹がいいよねー」

「話を変えるな。……いや、変わってないのか?」

「ツンデレは素晴らしい。義妹という要素が加わることで良さが二倍、三倍になる」

「そんな語ってもらっても反応に困るから自重してくれ」

「ドジっ子もポイント高いよねー」

「無論だ」

「ドジっ子って、ただ要領が悪いだけじゃないか？何が点数の加点要因になるんだよ」

「それを話すには少し時間がかかる」

「どれくらいだ？別に聞きたくないけど」

「たったの二時間だ。ではまずドジっ子の萌える理由だが……」

「聞きたくないって言ったのに！？しかも二時間って全然少しじゃねえー！」

「ふむふむ」

「なぜかクラスの男子が集合してる！？お前ら興味あるのかよ！？」

「ありまくりだ」

「自信をもって言うんじゃねえ！恥ずかしいと思わんのか！？」

「思わないな。俺は漢おとこだからな」

「思えよ！」

「お、男らしいぜ清水……」

「全く男らしくないから！駄目人間に近いから！」

「それでも俺は聞く方を選ぶぜ！」

「いい加減にしとけ！」

「……つまり失敗したときにどうすればいいかわからなくなる、その様子が萌えへとつながるのです」

「説明まだ続いていたのかよ！？」

「なるほど」

「ほとんどの男子！説明聞くのに没頭してるんじゃない！」

「さあ皆も一緒に！萌え！萌え！萌え！っ！！」

「「萌え！萌え！っ！！」「」」

「何この宗教団体！？」

今日も変人達は元気なのだった。

第七十七話 終業

「……この伝統ある我が北高の歴史に傷を残さぬよう、夏休みとはいえ自覚をもった行動をとり、部活動等の大会ではぜひ良い結果を残せるよう、精進すること。いいですね」

長々と空気を読まずに校長が長話をしている。終業式くらい短く終わってくれるんじゃないかと期待した俺が馬鹿だった。あの校長は、生徒はおるか教師陣でさえ話半分以上（おそらく一割弱）に聞いているこの現状を理解していないのだろうか。もし理解していないなら鈍すぎる。ラブコメの主人公かおのれは。全然もてていないけど。（校長は独身の上、今までずっと両親と暮らしている、いわゆる昔からのパラサイトシングルなのである……石井情報より）

「ふわああああ」

見る。健三さんなんか、湧き上がるあくびを堪えようとすらしていないぞ。よっぽど暇なんだろうが、生徒の目の前にいることを自覚してくれ。みつともないし、教育上よろしくない。健三さんに言っても仕方ないけど。

「……………」

かと思ったら今度は素振りを始めた。健三さんでもスポーツをやるんだな。見た目だけでは想像がつかないが、何のスポーツだろう。野球か？テニスか？ゴルフか？

「三井、それは違うよー」

「何も言っていないのに違うとか言うな。今は校長の話中だとわかってるか？」

「三井だって話聞いてなかったじゃん」

「無駄だからな」

「旦那、ぶっちゃけるなよ」

「……で、何が違うって？」

「健三さんのフォームをよく見てみなよー」

「……………」

右だけでなく左。上下斜めにも振ってる。はて、どこかで見たよ
うな……………」

「……ってライトセーバーバトルの動きじゃねえか!!」

教師が何やってんだ!?

「ジェダイは常に鍛えないといけないんだよ」

「そう言いながらライトセーバーを出すな!常備か!?常備なのか
!?!」

「戦士のたしなみだよ」

「いつから戦士に!?!」

「男は生まれた時から戦わずにはいられない生き物なのだよ」

「そう言ってる間に健三さんが虫の息に!?!スタミナ少なくなっ!?!」

インドア派にしても少なすぎるだろ!生きるために必要な最低限
しか体力を持っていないのかあの人は!?!

「フォースが足りない」

「フォースとかじゃなくて足りないのはスタミナだよ!?!」

「……このように、日々の生活態度をこの夏休みで改めることで、
一層学業に集中できることになります」

「まだ校長話してたの!?!長え!」

「誰か!!救急車を!!」

「ええ!?!健三さんが本当にやばそうだ!?!虚弱体質ってレベルじ
やねーぞ!?!」

……このようにして、一学期は幕を閉じたのだった。健三さんは
単なる疲労で気を失っただけで、無事だった。……なれないことす
るなよ、いい大人なのに。

第七十八話 思い

「よっしゃ！革命だ！」

「うわ、まじで！？やばいわ、このままじゃ負ける」

「誰か革命返しやってくれよ」

「ジョーカーなしで貧民ごときに何ができるといふんだよ」

高校総体水泳の部、愛知県大会が開催される名古屋のプールに向かうため、俺たち北高水泳部は電車に乗っていた。電車で一時間ほどかかるので、その間の暇な時間を使ってエロ大魔王をしている。今は田村が神。エロ大魔王の地位には、石井という適任者がついている。カードは常に正直なのだよ。

「あー、また僕がエロ大魔王かー。ついてないなー」

「ついてないんじゃない、イッシーが弱いんだよ」

「確かに」

石井には戦略性というものを感じられない。すぐに強いカード出すし。切り札をとっておこうと考えないのだろうか。

「それにしても田村は強いな」

田村の場合、引きの強さが尋常じゃない。1とか2とかジョーカ1とかを、毎回のようについてくる。守護霊が何か憑いているのか？

「……ただの運。次は負けるかもしれない」

「そう言って平民より下には、一度も落ちてないじゃないか」

「……ただの偶然」

田村にはなんか、黒魔術とかをやったそうなイメージがある。あくまで俺の主観だが。顔がいいのに謎めいた雰囲気漂ってるし。

「こんな調子で大会は大丈夫なのか」

「問題ないっすよ部長」

「大丈夫ですよ」

「浜口、片山。リレー三種目（400フリーリレー、800フリーリレー、400メドレーリレー）。県大会から800フリーリレーが

追加される）はお前たちにかかつてる。頼むぞ」

「部長もバタフライとフリー、頑張ってくださいよ」

「俺たち三年にとって、東海大会で最後だからな」

水泳選手にとって、奇跡は存在しない。東海大会は、県大会で八位以内に入賞すればいけるのだか、全国大会に出場するには、一定のタイムを切らなければならない。そして、そのタイムを切るのは、ごく一部の限られた才能の持ち主だけ。部長は必死で練習したが、それでも全国とのタイムには開きがある。東海大会で最後なのだ。県大会で入賞できなければ、県大会で最後になってしまう。終わらせないためには入賞するしかないのだ。

「部長、俺を誰だと思ってるんですか」

浜ちゃんにも、部長の思いがわかるのだろう。いつになく真剣な表情で、しかし自信に満ちた口調で告げた。

「中学時代、愛知県最速だった俺です。部長の晩節を汚す真似はしません」

プレッシャーは他人の比ではない。しかしそれでも言いきった。このような修羅場も何度も経験してきたから、今度もやってくれる。そう確信させてくれる。このとき、水泳部は結束、一つにまとまった……！

「やった！革命！」

「うあわっ！！やめてくれ！！死ね！マサ死ねっ！！」

……五分後、エロ大魔王での革命を発端に、リレーメンバーで喧嘩。結束は粉々に。

……勘弁してくれ……。

第七十九話 メドレー予選

全国総合体育大会、水泳部門愛知県支部大会は二日にわたって行われる。俺たちの世代は小学校の頃からレベルが高く、新記録を作ることもざらにあっただけに、この大会では各高校の勢力図が激変する可能性がある……と小倉さんが言っていた。俺たち一年は、去年までの勢力図を知らないのによくわからないが。その中でも例年と変わらずダントツの優勝候補が豊玉高校らしい。ほんと東三河から消えてくれ。消えてください。お願いします。

「審判長注意。審判長は豊橋北高校水泳部顧問、小倉俊郎先生です」……県大会でもあなたが審判長ですか。まだ隠された権力があつたんですね……。

「かつ飛ばせー、はーまーちゃん！」

「野球じゃないから!!」

県大会一発目の種目、400メドレーリレーの応援をする北高は、緊張感に包まれながらも声出しはしっかりしていた。地区大会の成績だと、北高の順位は十位。ぎりぎりで決勝に進むことはできるものの、東海大会出場はできない。選手の頑張りに期待だ。

「マサーーっ!!!!エロい!!」

「応援しろよ!?!」

一泳の背泳ぎ、片山がバサロでスタートダッシュ。しかし敵もさる者、片山でも差ができない。豊玉高校や中央大京高校の選手には引き離されるほどだ。……これが東海、ひいては全国レベルなのか……!

「池山先輩!頑張れーっ!!」

二泳は平泳ぎ、池山先輩。おそらく次期部長となる、現時点で、平泳ぎ北高最速の選手だ。いずれ松ちゃんが抜くのだろうか。ぜひ

抜いてほしいが、今は意地でも離されないようくらいついてください。

「部長！意地の見せ所です！」

三泳、バタフライ、部長。去年東海大会に出ただけあって、差を少しずつだが縮めている。現在の順位は十位。しかしまだ予選だ。この調子でいけば決勝に駒を進められる。前の組の十一位よりはよさそうだ。なぜならこちらには秘密兵器が残っている。

「浜ちゃん！決める！」

「越える！」

「何を！？」

「音速の壁を」

「越えたらやばいから！死ぬから！物理的に無理だから！」

「そこをなんとか」

「頼んでどうにかなる問題じゃねえ！」

「いいから応援しろよ」

つまり、浜ちゃんがいる以上、最後は盤石なのだ。このレースも八割くらいの力で臨んだ結果、見事に十位。東海出場のチャンスを得ることに成功した。

「この調子で決勝は八位以内だぞ！」

実際問題としては厳しいだろう。しかし、可能性は十分あるところまで実力は拮抗している。先輩達のためにも、がんばれ、片山、浜ちゃん。

第八十話 部長

「そんな……まさか……」

レース後の電子掲示板を見ても、結果は変わっていなかった。

「部長が予選敗退……？」

200 バタフライ予選後。北高応援席は静寂に包まれていた。

当たり年の名に恥じず、今年の愛知県大会は一年生が決勝進出の半分を占めていた。全国から有力選手を集めてきている、豊玉高校を筆頭とした私立勢が残りの枠も奪い、結果として公立高校の選手は東海大会出場が絶望となっている。去年は行けた部長の種目、浜ちゃんがいるフリーリレーでさえ、決勝にすら進めなかったのだから残酷だ。部長にとっては最後なのに……！

「……部長、お疲れ様です……」

「なんだみんな、お通夜みたいだな」

「……残念でした……」

「記録的には妥当なところだろう。去年はレベルが低かった。今年はレベルが高い。それだけのことだよ」

「……だって、悔しいじゃないですか！先輩はあんなに練習してきたのに！県外から引ッ張ッてこられた愛知県以外の人間が東海大会に出場するなんて！」

「実力だから仕方がないだろう」

「仕方なくですよ！県大会なら県の人間だけでやるべきなんです！外様が出るべきじゃない！傭兵軍団なんておかしいですよ！」

「三井、黙れ」

「でも……！」

「黙れと言っているだろう」

部長の低い声が響き、俺は黙り込む。

「他の部員も聞いてくれ。声に出さなくても三井のように思っている奴はいるだろう」

淡々と話す部長。

「確かに決勝進出した選手の多くは私立で、県外から来た選手も多い」

「そうです！だから……」

「旦那、落ち着け。部長が話してるんだ」

「しかし俺はそれが悪いとは思わない」

「……え……？」

「県外から来た選手はどれだけのプレッシャーがあると思う？泳ぐのが速い、その長所を伸ばすために名門高校に入る。しかし伸びなければ、一人でその悔しさに耐えなければならぬ。それを避けるためには、ただひたすらに泳ぐしかないんだ。そんな状況で、死に物狂いでやってきた結果を出し、上の大会に進むのは当然の権利だと俺は思う」

「でも、それが愛知県でなくても……」

「愚痴はこれで終わり。俺のことを思って、憤慨してくれたことに感謝する。ただ……それなら、一つ別なことを頼むよ」

「……なんですか？」

「メドレーリレーの決勝の応援、全力でやってくれ。俺はそれをしてもらえるのが一番うれしい。……応援団長をやってくれ、三井。できるな？」

「……わかりました」

翌日、メドレーリレー決勝。

「「がんばれーーーーっ！！！！北高ーーーーっ！！！！」」
応援の効果は定かではない。部長の気配りに過ぎなかったのかも
しれない。しかし北高水泳部員は全力で声を出した。明日声が出な
くてもいい。俺たちの声でリレーメンバーが少しでも勇気付くのな

ら、できる限りのことをやろう。そう誓い合った部員たちの声は、プールに響き渡った。その結果

「「「わあああ！……東海大会だあああ！……！」」

北高水泳部メドレーリレーは、東海大会に出場した。

第八十一話 年号2

県大会も終わり、せっかくの夏休みを満喫したいところだが、一応進学校である北高では補講がある。一年の頃からそんなに必死になつてやらなくてもいいと思うんだが。この考えは甘いか。

「えー、せっかくの補講なので、授業ではやらないことをやる」

そんな今の授業は世界史。担当は本来日本史の田山先生が行っている。

「年号を暗記すればセンターはかなり有利だ。年号のごろ合わせを教えてやるう」

……授業でもやりましたけど……。もしかしてもう痴呆が？（田山先生は五十代）

「さっそくいこう」

「431（司祭^{しさい}）、仏教を作る」（紀元前431年、仏教成立）
釈迦は司祭じゃないから！なぜに洋風テイスト！？いきなりこれかよ！

「334（さんざんし）たい作るアレクサンドロス大王」（紀元前334年、アレクサンドロス大王の東征）

……まともですね。序盤からあれだからどうなることかと……。

「264（ふつ、むし）けらが。ポエニ戦争」（紀元前264年、第一次ポエニ戦争）

虫けら！？

「植民地との戦争だったことを示している」
意味あつたよ！すいません！

「44（死死^{しし}）死死死死。カエサル暗殺」（紀元前44年、カエサル暗殺される）

暗殺だから仕方ないけど、覚え方こわっ……！

「30（みれ）。クレオパトラ死んでるぞ」（紀元前30年、クレ

オパトラ自殺、プトレマイオス朝が滅亡する)

見てやるなよ!! 死人ですから!!

「ここまでは全て紀元前の出来事だから、混同しないように。では紀元後だ」

……お願いします。

「30（みれ）。キリスト死んでるぞ」（30年、キリストが処刑される）

デジャヴ!? ややこしすぎですよ先生!!

「64（むし）するな、殺せキリスト教徒」（64年、皇帝ネロ、キリスト教徒迫害）

……まともなので戸惑う自分もどうかと思う。

「184（いやよ）黄巾の乱」（184年、黄巾の乱）
短いすな。

「313（さいさん）責められキリスト公認」（313年、コンスタンティヌス帝キリスト教公認）

この調子で最後までやってください。

「375（みんなこ）うしん。ゲルマン民族大移動」（375年、ゲルマン民族大移動）

まあ、行進はしてないと思うけどね。

「395（さんきゅうこ）じま。ローマ帝国分裂」（395年、ローマ帝国が東西に分裂する）

こじまって誰!?

「439（しさく）の国、北魏が華北統一」（439年、北魏が華北を統一）

試作だったの!?

「ああ、別に北魏はちゃんと成立してたぞ」
試作じゃないじゃん!!

「589(こうはく)出場、中国統一」(589年、隋が中国統一)
紅白歌合戦まだできてねえ!!

「とりあえず今日はここまで。今度日本史もやるから、期待しておいてくれ」

……あまり期待しないで待っておこう。

第八十一話 年号2（後書き）

リクエストを受けたので書きました。今回は世界史です。高校までに習うのがわからなかった（覚えてなかった）ので、適当に詰め込んでます。そのうちに高校日本史編もやるかも？

第八十二話 ペナルティ

「ねーねー、エロ大魔王にペナルティ付けようよー」

「ペナルティ？」

水泳部の部室でエロ大魔王に興じていた俺たちは、石井の言葉に耳を傾けた。

「ペナルティならあるだろ？エロ大魔王はいちいち行動がエロいとか言われてるわけだし」

「次の回のトランプを切ったり配ったりもしてるよな」

「そういうのじゃなくてー、もっと楽しいペナルティだよー」

「楽しいの？」

石井の言う>楽しい<が、俺にとって楽しかったという経験がない気がする。ライトセーバーバトルとかその他もろもろ。

「そうそう。大魔王になった人にはポイントが一点加算されてー、そのポイントを減らすためには何かしないとイケないみたいないな」

「部室の掃除とかか？」

この水泳部には整理整頓という概念が欠如しているらしく、俺以外に掃除する人がいない。そのくせすぐに汚すため、トランプをやるスペースを除いては、ものが散乱している。今もすし詰めになっ
てやっているくらいだ。だから、ペナルティが掃除なら、一石二鳥で素晴らしい。何ていいアイディアなんだ。見なおしたぞ石井。

「全然楽しくないじゃん」

訂正。石井は楽しむこと以外何も考えてませんでした。

「もっとこうー、みんなが笑えるようなやつだよー」

「具体例を出してくれ」

そうだそうだ。松ちゃんの言うとおり、具体案を出せ。

「うーんとー」

さあ言ってみろ。

「等身大フィギュアと一緒に登校、とかー？」

ペナルティ重ええええええ！！！！！！

「笑えるでしょー」

「笑えねえよ！何それ！？死刑宣告！？嫌がらせの域を超えてるだろ！？？」

「これで一ポイント消費」

「低いよ！？ポイントの燃費悪すぎ！！いつものペースでエロ大魔王王し続けてたら、一体何回死に等しいことをやることになるんだよ！！！」

「ちなみにポイント名は>萌えポイントくだよー」

「萌えねえよ！誰が萌えるんだよ！痛い人に見られて焼身自殺はしたくなるかもしれんけど！！」

「ぽっ」

「通りすがりで立ち聞きしてた高城さん！！ほぼ染めるな！！いたい誰がそれしているところ想像した！？」

「じー」

「俺の方を見るな！そして変な想像するな！やめて！俺を妄想で汚さないで！！」

「もしくはー、授業中フィギュアを机の上に出しっぱなしにしておく、とかー？」

「フィギュアから離れる！」

「ワイシャツの下にアニメの絵のＴシャツを着ていくとかー」

「透けるから！見えちゃうから！！」

「……女子の制服で登校」

「田村！？さうつと恐ろしい提案はしないでくれるかな！？」

「ドキドキ」……

「高城さん！？やめて！俺を着せ替え人形にしないで！！」

「いい。
旦那だけ」

「てめえ義人裏切りやがったな！？　つてか趣旨変わってるし誰か止めてえーっ！っ！」

俺の猛抗議の結果、とりあえずこれから現状維持で、ペナルティなしになった。……高城さんの目が途中（女装計画あたり）からマジになったのが怖かった……。夜道には気を付けよう……。

第八十三話 クッキング

「ちゃらちゃっちゃらちゃっちゃらちゃー」

「石井、杉田の三分間クッキングが始まるよ！」

「……いちいちそんなテンションで入らなくていいから」

明日から二日間、両親が法事でいなくなるため、俺は一人自炊しなくてはならない。そのため、料理が得意な義人に相談したのだが…… 人選間違えたかな。

「今日のポイントは手間暇かけて、じっくり煮込んで作るおいしいビーフシチューです」

「三分で終わらねえ！」

「食べるのが三分間なんだよー」

「一人なのにみじめだよ！焦る意味がわからない！じっくり食わせてくれ！」

まあ一人時間をかけて食べるのもみじめだと思うけど。

「ならおいしいカップ麺の作り方を……」

「相談する意味がないだろ、それじゃ！」

「インスタントヌードルのー」

「インスタントじゃないので頼む！」

「冷凍食品のあんかけラーメンについて……」

「言い方が悪かった。ご飯のお供になるおかずと、野菜のおいしくて楽な調理法を教えてください」

「初めからそう言えよ」

「そうだよー」

「まさか俺だつてラーメンにそこまで固執されるとは思わなかったよ」

ラーメンにトラウマでもあるのですか君たちは。

「ならきんぴらでいいか」

「きんぴらごぼうか。いいな」

「きんぴらごぼうじゃない。きんぴらだ」

「……………」

「つまり味付けはきんぴらと同じで醤油、みりん、砂糖だが、人参以外にも野菜を入れるんだ」

「おいしいのか？」

「野菜による」

「例えば？」

「玉ねぎ、大根、じゃがいも、れんこんなんかを細長く切って、さつき言った味付けで炒めるとおいしい」

「緑の野菜の料理ではなんかないか？」

健康のためには栄養のバランスが大切だしな。油がないのだとい
いんだが。

「ほうれん草を切って、水を張った耐熱容器に入れてレンジで五分熱したあと、冷ましておけ。冷めたら水を捨てて、代わりに麺つゆを入れればお浸しになる」

「………… お前はほんとすごいな。ありがとう」

「礼には及ばん。ただ、教えたんだからひとつ頼みたいことがある」

「なんだ？」

「ちよつと待つてくれ。」

気分がいいからたいていのことは許そう。………… お？俺のバッグを持ってきたな。ノートを書かせてほしいとかか？そんなこと頼まなくてもやらせてやるのに。律儀なやつらめ。

「旦那の水着に、油性マジックでゝらき すたくの絵書きちゃったてへ。許して？」

「許せるかあああああ！！！！」

第八十四話 襲撃

両親がいないため、束の間の一人暮らし。せつかなので普段はできないことをやろうと張り切っていた俺は、手始めに料理を作ろうとしていた。義人に教わったぐつそりきんぴらくである。しかしフライパンを出そうとしたところ、チャイムが鳴った。気合を入れてやろうとしているのに、空気読めよ。誰か知らんけど。

「おーっす」

「おじゃましーす」

「邪魔する」

「……きれいな玄関だ」

「うーん、アパートにはいいんじゃないー？」

「……わが校の水泳部諸君でした。なぜこの場所が……？」

「旦那。みんな連れてきてやったぞ」

貴様か。

「とりあえず言っておこう。帰れ」

「「「ひどっ！！！」」」

「なんだよ旦那。せつかく応援に来てやったのに」

「嘘だろ」

家事を手伝いに来たとは思えん。

「ねーねー三井の部屋はー？」

「勝手に入るな」

見られて困るものなどないが荒らしてほしくない。

「おー、片付いてるな」

「聞いてねえし！」

人の話は聞きましょうとガキの頃教えられなかったんですかあなた方は。

「将棋盤と駒があるな」

「しかもきれいで……本格的だな」

「ひい爺さんの形見だから本気で触らんでくれ
しやれにならないから。」

「本棚には司馬遼太郎、藤沢周平、吉川英治……だれ？」

「知らないのかよ!？」

高校生なんだから一般常識として覚えとけ! ついでに一人頭五冊
は読め!

「机の絵がドラゴンボールか」

「机を買ったのがガキの頃なんだから仕方ないだろ!」

「部屋にテレビもパソコンもないな」

「家族共用のがあれば十分だ。お前ら何しに来たんだよほんとに」
「みつちゃんて遊ぶため……じゃなかった、みつちゃんと遊ぶため
だ」

「一文字でだいぶ印象変わるから!」

「じゃあ、みつちゃんて遊ぶために来たんだ」

「ぶっちゃけよった! 浜ちゃん、訂正しておけよそこは!」

「まあ事実だし」

「なら帰れ」

「おお、なかなかの大画面テレビだな」

「ひとんちで自由散策してんじゃねえーっ!!」

「Wii持ってきたからやろうぜ」

「……おーっ!……!」

「アパートだから! 騒ぐな!!」

「……おじゃましましたー」

「二度と来るな!!!」

あの後、スマブラXで大いに盛り上がった集団は、夕飯まで要求
して帰っていった。義人が手伝ってくれたからいいようなものの、

夕飯よこせと言われた時には危うく手に持った包丁が滑って、誰かに刺さるところだった。危ない危ない。

「しかし嵐のような連中だった……」

さて、残った皿をどうしようか……。片付けくらいしろよ。招かれざる客だったのに。

数日後。

「えー、松ちゃん明日家で一人か」
……にやり。

第八十五話 秘密

「ああっ!!」

「どうしたのー？持病の水虫でも悪化したー？」

「違うわ！水虫なんて持ってねえよ！」

「なら急に奇声を上げたのはどうしてー？」

「健康水泳部だよ！健康水泳部！創設しようって言ってただろ!？」

「……………」

「おい！言いだしたのは石井だろ！」

「……………もちろん覚えてたよー」

「忘れてたな!？そうなんだな!？」

「どうやって作ろうかー。顧問は見つからないしー」

「堂々とスルーするとはなかなかやるな！まあいい！大目に見よう！」

「まずは小倉さんの説得から始めようかー」

「いきなり、かなりの難題だな」

「ポケモンでコイキング六体でチャンピオンを倒すくらいの難題だねー」

「不可能だろ！」

「裏技を使えば楽勝だよー」

「小倉さん相手に裏技!？」

「そう裏技ー」

「そういえば昔小倉さんを脅してたな、石井は」

「脅すだなんて心外だなー。交渉したただけだよー。弱みを握ってー」

「世間一般ではそれを脅すというのだよ石井君」

「じゃあどうしようかー」

「そもそも小倉さんの弱みって何を握ってたんだよ。激しく気になる」

「ただの買い物風景を写真に撮っただけだよー」

「……まさか小倉さんが日本刀を秘密裏、もちろん非合法に購入していたとかか……？」

「三井、物騒にもほどがあるよー。小倉さんのことをなんだと思ってるのー？」

「ヤザ……いや、極道」

「三井が小倉さんをどう思ってるかよくわかるねー。フォローになつてないしー」

「なら一体何を買ってたんだ？」

「知りたい？」

「物凄く知りたい。このままじゃ夜も眠れないほどに」

「2ちゃんねるで夜を明かすってことー？」

「違うわい！俺は2ちゃんねらーじゃねえし！」

「で、写真だけどー」

「ふむ」

「ぬいぐるみだよー」

「……は？」

「くまのぬいぐるみを小倉さんが買っている写真！。頼ずりしてたのもあつたけどー」

「……娘さんのプレゼントにでもするために買ったんだな！うん！そうに違いない！」

「小倉さんの趣味だよー」

「やめてくれ！」

「小倉さんの車には普段からぬいぐるみがたくさん置いてあるんだよー」

「嘘だ！だって俺たちが乗った時はそんなのなかったじゃないか！」

「それは隠していたからだよー。自分でも趣味が合わないって理解してるんでしょー」

「……それである時、写真を見せられて硬直したのか……その写真を見せてくれ。見たくないけど見たい」

「ネガを渡しちゃったからもうないよー」

「なぜ!？」

「交渉は弱み一つにつき一回まで!。これが僕の信念だよ!」

「脅迫しないという信念をまず持つべきだ」

「だから今は交渉材料はないな!」

「結局、健康水泳部立ち上げはまだ無理か」

「そうだね!」

「しかし小倉さんとぬいぐるみか……不気味で夢に出てきそうだな」

「そう!？」

「眠れんかもしれん」

「ニコニコ動画でも見て夜を明かすの!？」

「俺はニコニコ動画の中毒者じゃねえよ!」

第八十六話 休み

毎日登校して、補講や部活までやっているんで忘れがちだが、今は夏休みである。本来、毎日自由に過ごせるはずの夏休みである。

「……それなのに久し振りの休みに感じるなあ……」

今日は部活も補講もない、本当に自由な休日だ。悲しいことだが、めったにないことでもあるので、駅前に繰り出すことにした。俺の趣味、古本屋めぐりをするためである。無料ただで本（小説、漫画などを含む）がたくさん読めるんだから、なんて効率的な趣味なんだろうか。……さみしいやつだと言っなよ！憐れんだ目で見んなよ！

「……で、駅前にきたわけだが。」

「人、多っ！」

豊橋は都会ほど人が多くはないらしいが、豊橋からほとんど出たことのない俺にとって、駅前の人の多さは反則である。レッドカードである。早くも「やっぱりうちが一番だわ」という旅行帰りのおばさんのセリフが出そうなほど疲れてしまった。帰ろうかな……。

「おいおいねーちゃん、可愛いじゃねえか。ちよっと付き合えよ」

「やめてください！」

BOOK OFFに行くか、帰って不貞寝するかを思案していたところ、前近代的なセリフが聞こえてきた。こんなことを未だに言う馬鹿がこの世界に存在していたとは。話の種になりそうだ。ぜひ見てみよう。

「いいじゃねえか。暇なんだろう？」

「……大声出しますよ！」

なんというベタな展開なんだろうか。面白すぎて笑いをこらえられん。さて、どんなアホ面をした男かなと……。

「……………」

「……………」

「……………」

「……何やってんだ清水、保護者」

「……三井がなんでここに？」

「先輩！お久しぶりです！助けに来てくれたんですか！？」

「……まさかあんなアホなセリフを吐いていたのがお前だったとは……………」

「三井はその子と知り合いなのか？それなら紹介してくれ」

「先輩はその社会の屑と知り合いなんですか？」

「社会の屑！？」

「残念ながらその社会の屑とはクラスメイトなんだ」

「三井まで！？」

「ところで先輩、保護者って呼ばないでください」

「ああ。善処するよ保護者」

「善処する気ゼロじゃないですか」

「なんでその子が保護者なんだ？」

「後輩とかの面倒見がよかったから」

「何紹介してるんですか先輩。そんな核廃棄物に」

「核廃棄物！？」

「紹介くらい構わんだろ。その核廃棄物は悪いやつではないし。脳まで筋肉なのが玉に瑕ではあるが」

「三井、お前らの言い方にトリカブトなみの毒があるのは気のせい
か」

「……で、帰っていいか」

「ここまで変な空気になったのはどうしてだろう。」

「せつかくですから一緒に遊びましょうよ！」

「なら俺と……………」

「うるさいですこの盛り豚」

「俺は疲れたから帰る。盛り豚とでも遊んでやれ」

「……君たち、いい加減俺は泣くよ？」

それからいろいろあった結果、三人で遊ぶことになり、清水の金でゲーセン三昧。清水は泣いていた。泣くくらいなら止めればいいのに、女子大好き人間の思考はよくわからん。

第八十七話 潜る

「ラストは潜水で25メートルクロール。四十秒サークルで六本泳いで来い」

「……まじですか」

今日もまたひどいメニューだ。殺す気ですかそうですか。小倉さんは間違いなく極度のSだ。

「明日は出張で部活に来れない」

小倉さん、忙しいな。となると明日は休みか。やったぜ。

「そこで臨時に山本先生に来てもらうことになった」

……そういえば健三さんが酒につられて引き受けてたんだった。

残念。

「山本先生たつての願いで、メニューは山本先生が組んでくれるそうだ」

……健三さん（虚弱体質。インドア派の代表格）に水泳の知識があるとは思えないんだが……。不安だ。でも楽なメニューにはなるかもしれない。

「以上だ。明日も欠席しないように」
なるようになるか。

翌日、部室で着替えてプールサイドに出ると、健三さんがいた。トロピカルな柄の水着（もちろん競泳用ではない）はまったく似合っていないと思いますよ。

「おはようございます」

「うるかむ」

「今日のメニューはどうなりますか？」

「あろはー」

「……距離的にはどれくらいですか？」

「おーいえー」

……絶望的に会話が成立しない。練習を見てくれる……いや、プールサイドにいただけでいいんで、余計なことをしないでほしい。

「ふんふーん」

鼻歌を歌いだした健三さんはほかっておいて、他の部員を待つことにした。……このままでは間が持ちそうにない。頑張れ、俺。

「皆さんきましたね」

ようやく部活が始まる。メニューはどうするつもりですか？

「メニューはなんと、私が決めるんですよ。わーわー、いやっほーい」

なに一人で盛り上がるうとしてるんですか。無表情でそれやられても不気味なんですけど……健三さんだし。

「というわけで今日は、潜水対決をします」

……悪寒が。

「ルールは簡単。潜水でどれだけ長く進めるかです。」

「山本先生、それはちよつと……」

部長が抗議に出たか。当然だな。死人が出るかもしれん。潜水は危険だ。俺もかつて潜水勝負をして呼吸困難になりかけたことがある。その時は75メートルだったが……、やばい、あの時の恐怖がよみがえってきた。耐えるんだ、俺。今は言葉を出すこともできる。考えていることとやることが一致しないなんてことはもうないんだ。ねーねー三井ー、どうしたのー？」

「どうせまた旦那のトラウマに引っかかったんだろ。トラウマの貯金箱だからな」

「ではもういいです。勝手に練習してください」

部長に説得された健三さんは、そう言ってプールサイドで不貞寝し始めた。子供ですかあなたは。

「旦那、トラウマはもう収まったか？」

思い出させるな。

第八十八話 ダウト

「一」

「二」

「三」

「四」

「五」

「ダウト」

「……ちっ！」

「はい浜ちゃんがトランプ回収」

水泳部でのトランプ、今日はダウトをやっている。ダウトとは、初めに手札をやる人数で分けて、一から十三までの数字のトランプを裏にして続けて出していくゲーム。手札にその数字のトランプがない場合や、あっても出したくない場合は、嘘をついて違うトランプを出してもいい。ただし、他のプレイヤーが嘘だと見破り、「ダウト」と言ってそのカードを表にした場合、それまで出していたトランプは嘘をついた人の手札に加わる。もし「ダウト」と言って、そのトランプの数字が出した人が言った数字と同じ時には、「ダウト」と言ったプレイヤーにそれまで出していたトランプがいく。いまいちよくわからないならウィキペディアでも調べてみることをお勧めする。なかなか戦略性が必要な知的遊戯で、はまる……かどうかは個人差があるが、知っておいて損はない。

「みんな嘘つきすぎだろ。二しかあってないじゃん」

「そこら辺が面白いんだろ？「ダウト」と言って外れたらリスクが重い。かといって日和見では他の人が上がってしまう。その辺の兼ね合いが勝利のポイントだろう」

「浜ちゃんは表情に出すぎ」

「嘘なんてついてないよっていう態度があやしき満点なんだよな」

「正直者だと言ってくれ。俺は嘘が嫌いなんだ。みんな、正々堂々とやろうぜ！」

「ゲームが成立しないだろ」

ルールまで書き換えるつもりか。

「そ……それに引き替え、田村の無表情さは有利だな」

嘘をついたのかが見破れん。洞察力不足か？しかし。

「人はそれをポーカーフェイスと言ってもてはやすのだよ」

「無表情キャラは萌えるもんねー」

「全面的に同意する」

何を言っているかさっぱりわからんよ、二次元アホ二人。萌えるとか日常生活で使うなよ。周りにいる俺まで変なやつだと思われるじゃないか。

「……手遅れ」

「ぐさ」

「現実から目を背けるなよみっちゃん」

「どすっ」

「もう誰もみっちゃんが平凡な性格だとは思ってないって」

「どっごーん」

「……義人。いかにも俺の心の中のダメージの描写のようにアフレコするな」

「ダメージは受けてないのー？」

「……致命傷クラスだよ」

傷つくことには傷つくんだよ、俺の繊細な心は。……みんな俺のことを誤解している。おれほどまともな人間はいないのに。

「ダウト」

やかましいわ。

第八十九話 展開

「ラブコメ的な展開が欲しい」

「……気でも狂ったか義人……。いやすまん、いつものことだったな、お前が狂ってるのは」

「ひどっ！罰として俺の相談に乗れ！っていうか乗ってくださいお願いします！」

「それは罰とは言わないだろう」

「なんだかんだ言ってもー、三井は相談に乗るんだねー」

「暇だからな」

「旦那はツンデレだなー。照れなくてもいいんだぜ」

「鉈持ってこい」

「ヤンデレ化！？」

「冗談だ」

「……だよな？」

「カッター持ってこい」

「用途が激しく気になるんですけど！？」

「馬鹿だなあ。カッターは物を切るためにあるんだ」

「今重要なのは、その物を切る道具で何を切るかだ！切るのは無機物だけにしてくださいお願いだから！」

「だから冗談だ」

「……本当だな？」

「二割は」

「八割本気って冗談で済むレベルじゃねえ！！」

「……で相談ってなんだ？あいにく俺は、ラブコメの主人公になる方法は知らんぞ」

「またまたあ。旦那、女子の中では結構人気あるらしいぞ」

「この一ヶ月ほど、家族以外の女子と話した記憶がない」

「高城さん（水泳部）とは？」

「事務連絡はするし、されたりもするな」

「ええー？三井は駅周辺でかわいい女の子と一緒にいたじゃんー」

「てめえ旦那！裏切りやがったな死にさせ！！」

「落ちて着け義人。ナチュラルに急所（目とか水月とか股間とか）を攻撃してくるな。保護者だよ保護者」

「保護者ちゃんとデートだと！？死ね！」

「だから落ちて着け。デートなんぞしとらん。清水も一緒だったし」

「……接点が見つからないんだが」

「話せば長くなるが……>かくかくしかじかくなんだ」

「わかんないよー。>かくかくしかじか<って言われてもー」

「なるほど。清水が保護者ちゃんをナンパをした原因だったのか。俺の勘違いだったみたいだな」

「杉田に伝わってるしー。何これー？以心伝心ー？」

「旦那とは付き合いが長いからな。理解し合おうと思えばなんとかなる」

「何その無駄なスキルー」

「つまり義人はさっきまで、俺の言い分を聞こうとすらしなかったわけだな。どうしてくれようか」

「まあいいじゃん。悪気があったわけじゃないんだし」

「自分で言うな。腹の立つやつだ。知ってたけど」

「それで旦那、現実でハーレム展開になるにはどうすればいいと思う？」

「ラブコメ的展開から露骨に発展したな。しかも下方修正だ」

「俺は正直なんだ」

「正直者は馬鹿を見るぞ……義人は馬鹿だから問題ないか」
「で、方法はないか？」

「真面目にしてろ。大体ハーレム展開ってなんだよ。誰か好きな人がいるわけじゃないのか？」

「いないな」

「最低だな。ならどうしてそんなこと言いだしたんだ？」

「男の永遠のテーマじゃないか。いかにしてハーレムを作るか」

「世間一般90%のもてない男性に謝れ」

「まあ実はちょっとしたゲームにはまっちゃって」

「……ゲーム名は聞かないでおう」

アホすぎる。

第九十話 お菓子

今日も厳しい練習を耐え、部室でみんなでエロ大魔王でもするかと話し合っていると、義人が嬉しい報告をしてきた。

「みんな、お菓子作ってきてやったぞ」

「義人、気が利いてるな」

「スギ、サンキュー。で、何を作ってきたんだ？」

「ケーキだ」

「へー。どうやって作るんだ？」

「旦那、知りたいのか？」

「まあ興味本位程度にはな。知らんよりは知っておいた方がいいだろ」

「なら簡単なレシピを教えてやろっ」

「その前に食わせてくれ」

「了解」

もぐもぐ。やはり義人は料理が上手い。教えてもらった方がいいだろう。

「……で、作り方だが」

「ふむふむ」

「オープンで作るのが一般的だが、簡単な作り方……しかも一人暮らしでもできるやり方を教えよう」

「それは便利だな。ぜひ教えてくれ」

「まず最初に」

「メモメモっ」と

「スポンジケーキを買ってくる」

「ちよっとまでや」

「そして市販の生クリームを塗りたいく、果物を添える」

「だれがデコレーションの方法を聞いとるか」

「でも旦那、簡単だろ？」

「一人暮らしでそんな量買ってたら破産するわ」

「でも意外と安くつくぞ？」

「俺が知りたいのはスポンジケーキとかの作り方だ。しかも一人暮らしで作れる、楽なの」

「贅沢な話だなあ」

「スポンジケーキをそのまま買ってくるより贅沢ではないだろう」

「一人暮らしでとなると、オーブンがないかもしれないな」

「そうだな」

「そこで、炊飯器を使った作り方を教えよう」

「俺が知りたいのはケーキとかのお菓子の作り方だと言わなかったか？」

「だから炊飯器で作るケーキの作り方だ」

「それは知らなかった。すまん」

「ホットケーキミックス200グラム、砂糖60グラム、牛乳200グラム、卵イッコ、マゼル」

「なぜ急に片言！？」

「マゼル」

「わかったよ」

「マゼル」

「わかったって」

「マゼルン」

「風来のシレン！？」

「炊飯器に溶かしバター塗ル」

「なあ！だからその片言は何かの嫌がらせなのか！？」

「余ったバターは生地混ぜる」

「戻った！」

「あとは炊飯器に入れて早炊きを二回すればオッケーだ」

「簡単だな」

「簡単だろ」

「でも早炊き二回だと時間かかるな」

「なら出来合いのケーキ買え」

「ごもつともだ。金か時間のどっちを取るかだよな。もちろん俺は金を取るが。」

「この金の亡者め」

「経済的と言ってくれ」

「けち」

「黙らっしやい。」

第九十一話 見学（前書き）

世間ではGWなのにうちの大学は休みなし……ひでえ

第九十一話 見学

「先輩！せっかくの夏休みなんで遊びに……じゃなかった、見学に来ましたよ！」

「遊びに来たなら帰れ」

「保護者ちゃんいらっしやい。ゆっくりしていつてね！」

我が北高水泳部に、俺の中学の後輩が尋ねてきた。まあ小学校からの後輩及び同じ通学団（防犯とかのために一緒に登校、下校するシステム。高学年が低学年を引率していた）でもあったから、付き合いは義人と同様長い。その通学団で低学年の生徒を見事にまとめているため、尊敬を持ってこう呼ばれていたのである。そう、保護者くんと！

「まあ呼んでいたのは……っっていうか呼んでいるのは俺と義人くらいなんだけどね（笑）」

「笑うなあ！先輩それはなんですか！？好きな子はいじめちゃう小生の心理ですか！？」

「そんなわけないだろう（苦笑）」

「苦笑までするなあ！」

「で、なんでまた北高水泳部なんかに来たんだ？」

「だから見学ですよ」

「来年北高を受験するのか？」

「しますよ」

「大丈夫か？北高は結構レベルが高いぞ？」

「それって自慢ですか？」

「学力くらいは自慢してもいいだろう」

「せこいですね。今のままいけば受かると思いますよ」

「勉強できないイメージがあったから意外だな」

「努力したんですよ。目的のために」

「目的？なんだそれ」

「……先輩にだけは絶対に教えません」

「別にいいわ。言っただけいいけど興味薄いし」

「……もういいです」

「大丈夫か？北高はかなり変人率が高いぞ？」

「先輩がいるくらいですもんね」

「なんてことを言うんだこの後輩は」

「俺は変人じゃないだろう。だよな、みんな？」

「……ふっ」

「……ぷぷっ」

「…………」（肩を震わせて笑いを堪えている）

「……まさか変人揃いの水泳部で俺を否定されるとは思わなかったよ」

切ない。

「この部活で先輩はどんな感じなんですか？」

「この水泳部唯一の常識人だ。だよな、みんな？」

「突っ込み」

「時々ボケ」

「常識人に見せかけて意外と流される」

「……要は愉快な人」

「なるほど」

「納得すんな！それにみんな、俺のことそんな風に思ってたの！？」

ショックだ！

「楽しそうな部活ですね」

「今の苛めの光景から何を見たんだお前は」

「女子の部員は少ないんですね」

「二人で五位だ」

「何言ってるんですか先輩。気でも触れましたか」

……事実を言っただけなのに。

「また来ますね！」

「見学は済んだのに何しに来るつもりだ」
「遊びに」

「ついに本性を現したな」

「またおいで」

「来ないでいい」

今日だけでもいろいろと心に傷を負ったのに、相手なんかできるか。

第九十二話 泳がず

「先輩！また来ました！」

「まさか、また来ると言った翌日に来られるとはさすがの俺も思っ
ていなかったよ」

「読みが甘いですね」

「お前の行動パターンなんぞ知るか」

「みっちゃん、別にいいじゃんか。見学に来たんだつたら」

「そうだぞ。むしろ、来年の有望な新人が見学に来てくれているん
だから、歓迎するべきじゃないのか？」

「有望も何も、こいつは泳ぐの遅いぞ」

「そうですよ」

「まあ、でも小、中と水泳部だったんだろ？えーと、保護者ちゃん
だっけ？」

「古木と言います。保護者とは呼ばないでください」

「古木さん、得意種目とベストタイムは？」

「クロールで一分三十八秒です」

「……女の子だもんな。仕方がない」

「参考記録ながら、我らが女子エース高城さんは一分八秒だ」

「高城さんは別格だから。いや、別次元か」

「松ちゃん、その「高城さんは女子として扱うべきじゃない」みた
いな態度はどうかと思う」

「まあ、私は女子の中でも遅い方だと思えますよ」

「それでも高校で水泳部に入るのか？」

「はい。でも、そんなに泳ぎませんよ？」

「どういうことだ？うちの顧問は厳しいから、たまに来て泳ぐなん
てのは許されないぞ？」

「あー、先輩、私の水着姿がたくさん見たいんですか？」

「言っていないし思っていないし興味ないし」

「なら保護者ちゃん、どうするつもり？」

「それはですね」

「ふむ」

「マネージャーになるつもりなんですよ！」

「歓迎しよう、古木さん」

「おい。気が早いぞ、浜ちゃん」

「みっちゃん。どう考えてもマネージャーはいた方がいいだろ！？」

「受かってもないのに気が早いといっとるんだ」

「タイム計測に用具（ビート板とかプルパドルなど）出し、やることは山ほどあるからな！」

「これで落ちたら双方ともにショック大きいからやめとけ」

「先輩！心配してくれてるんですか！？」

「やかましい。さつさと帰って受験勉強に励め」

「ふーふーふー」

「なんだその、薄気味悪い笑い方は」

「別にー。いいじゃないですかー」

「にやけるな」

「そんなことないですよー」

「なあ、俺たちって邪魔な存在か？」

「二人の世界なのか？」

「いちゃつくなら二人きりの場所でしょう……」

「あの二人、付き合ってるわけじゃないんだよな？みっちゃん、彼女いないって言ってたし」

「旦那と保護者ちゃんは昔からこんな風だったよ。くつつく気配は、旦那側からは感じられないが」

「古木さんの方は？」

「昔からあんな感じ」

「みっちゃんも、ままならん性格だなあ……」

第九十三話 塾

「先輩！今日も来ました！」

「そんなことでもいいのか受験生よ」

「夜中、塾でしつかり勉強してますから問題ないですよ！」

「塾って、立正塾か。神田先生は元氣か？」

神田先生とは、俺が中学時代に、塾で数学を教えていた先生である。そして、数少ない俺が心酔する人物の一人でもある。

「元氣ですよ。たまに先輩と杉田先輩の話もしてますよ」

「……どんな話だ」

「授業中によくしゃべってた杉田先輩を、先輩が叩いてたとか」

「事実だな」

義人は中学時代……いや、初めて会った時から鬱陶しいやつだったからな。俺がブレーキ役に指名されることがほとんどだった。指名されなくても、義人を止める仕事は俺の任務だと自覚していたが、「テストなのに寝てる杉田先輩を、先輩がシャーペンで刺して起こしたとか」

「事実だな」

俺が真面目にテストを受けているのに、横で寝ていたのでカッとなつてやった。後悔はしていない。むしろやつの石頭でシャーペンが壊れかけたので弁償してほしかつたくらいだ。義人はぴんぴんしてたし。

「先輩が歴史の斎藤先生と一致団結して、深夜まで語り明かしたとか」

「事実だな」

北方謙三の小説の素晴らしさがわかり、陸奥宗光の頭脳明晰さを俺以上に知っていて講義してくれたからな。あれは有意義な時間だった。

「そんなことを受験前にやっていた先輩に今の私のことをどうこう

言う資格はないと思います」

「そんなことはない。俺は結局受かったし」

「うざいですよ」

「なら帰れ」

「帰りません」

「古木さん、マネージャーの仕事やってみるか？」

「いいんですか」

「頼むのはこっち。やることは山ほどあるから」

「マサは女子に甘すぎるぞ」

「みつちゃんが必要以上に厳しいだけだろ」

「しかも男女関係なく」

「やかましいわ」

「今から練習ですか」

「そうだ」

「……ってなに急に脱ぎだすんですか!？」

「水泳部だし」

「私がいるのになんで着替えるんですか!？」

「ああ、保護者は女子だったっけか」

「今さらですか!？」

「そう言うなら、部室からとっと出てけ」

「更衣室で着替えてくださいよ!」

「男女比率は10:1くらいだし……だいたい上半身裸は水泳部では基本スタイルだろ。下も着替えるから出てけ」

「いやです!こうなったら全部見ていきます!」

「……気でも狂ったか」

「はあはあ……先輩……」

「……高城さん、頼む」

「……」(音も立てずに忍び寄り、タオルで目隠しをする)

「何!？何が起きたんですか!？」

「……」(そのまま引きずるようにして連れて行く)

「誰！？離してください！先輩！助けて！」

「助けてほしかったのはこっちなんだが……それはともかく高城さん、グッジョブ」

「……貸し、一つ」

……清算の時間が怖いなあ。人選謝ったか。

第九十四話 タイム

「マネージャー志望の子、ちょっと来てくれ」

「はい、わかりました小倉先生」

「本気で豊橋北高校に通いたいんだな？」

「はい」

「プライバシーの問題とかもあるから言っておくが、ここにある情報……個人のタイムとかを他人に言いふらされると困るから、そのところを理解しておいてくれ」

「わかりました。ここでの記録は守秘義務があるんですね」

「そこまで大げさに考えなくてもいいが、まあ気をつけてくれ」

「じゃあ個人個人のベストタイムを見せるから、このタイムよりも二秒以上遅れた選手がいたら遠慮なく引っぱたいてくれて構わん」

鬼！構えよ！構ってくれよ！？暴力反対！！

「わかりました」

わかるな！守秘義務以前に人権侵害だから！法に触れるから！！

「さあ練習だ。名前は古木さんでよかったかな」

「はい。これからよろしくお願いします！もちろん来年からも！まだ早いだろ。油断が最大の敵だぞ。」

「松田先輩！一秒遅れです！もう一本頑張ってください！」

「……了解。次の次に出るからタイムよろしく頼む」

「石井先輩！やる気あるんですか！？ベストより五秒落ちですよ！？」

「……………」

保護者。石井はやる気とかじゃない。単純にスタミナが切れただけだ。よく見る。屍のようだろ。

「高城さん。余裕でクリアーです！」

化け物ですか高城さん、あなたは。

「では第二陣。スタートまで五秒前、四、三、……」
俺の番か。集中集中。

「よい……ハイ！」

ストロークをしつかり。キックは強く。視線は前に……と。

「浜口先輩、二十七秒！オツケーです！」

「……いよし！」

「片山先輩、二十八秒！クリアです！」

「……ふう。ありがとうね古木ちゃん」

「先輩！三十一秒八二です！コンマ零二秒足りないですね！もう一本行つてきてください！」

「貴様！俺だけなぜそんなに細かいんだ！？誤差の範囲だろ！？」

「うるさいです先輩。はよ泳いできてください」

「慇懃無礼だ！」

「それだけ騒ぐ元気があれば大丈夫だな。もう一本泳げ」

「小倉先生！？そんな殺生な！」

「……いいから泳げ」

「了解しました」

……怖いよ。小倉さん怖いよ。

「うーん、田村先輩……二十九秒……合格でいいです」

なんだ今の間は。でいいですってどういうことだ。……保護者、お前はいつか泣かす。

「先輩！ようやく合格です！」

……やっと終わった……なんで距離が伸びてるんだよ。二百メートル全力は、練習の最後にやってタイムが出るわけじゃないでしょうが……！

「遅かったですね」

「……保護者、今日はお前に本気で殺意を覚えたぞ」

「事実だったんだから仕方ないでしょう」

「……気を使うってことを知らんのか」

「先輩に言われたくないです」

第九十五話 発端

「先輩！私、ケーキを作ってきたんです！食べてくれませんか！？」

「悪いが、その展開は義人で経験済みだ」

「うわ、杉田先輩……空気読んでくださいよ」

「なぜ過去の行動で「空気読め」なんて言われたいいけないんだ！？」

「それは……義人だからさ」

「理不尽だ！誰か！苛めの現行犯がここにいますよ！通報してください！」

「もしもし。高校生なのに十八禁のゲームをしている犯罪者がいるんですけど……」

「旦那！？そんな通報しないで！事実だけどみんなやってるじゃん！！」

「お前の言うみんなは、どこの二次元に住んでいるんだ？」

「うちのクラスの二割はやってるぞ！？」

「……やばい。激しく転校したくなってきた」

「うち女子が数名だよー」

「神様！俺に安息の地をくれ！」

「おかしいだろ！なんだこの高校！？いまさらだけど！

「はいはい先輩。ミニコントはいいからケーキを食べてみてくださいさ
いよ」

「……やけ食いして忘れよう」

「どうぞー」

「そもそも俺へのいじめ未遂が発端なのをわすれてませんかー？」

「いただきます」

「無視も立派ないじめですよー」

「むぐむぐ」

「どうですか！？」

「……なんかばさついてるな……義人の作ってきたケーキのほうが上手かったな」

「杉田先輩。何考えて生きてるんですか？あなたの存在意義がわかりません」

「ちよつと！？俺何か悪いことした！？」

「いやいや義人。お前は料理が得意という立派な特技がある。十分に存在意義があると言えるだろう」

「……だけど」

「努力もするしな。正直お前には感服することが多々ある。何より義人はいいやつだ。俺が保証する」

「……旦那……」

「……ぽっ」

「高城さん！感動すべき場面ではほを染めない！それだけでBLに近付いちゃうから！腐女子の喜ぶ展開みたくなっちゃうから！」

「……………」（ゴゴゴゴゴゴ）

「保護者から負のオーラが立ち上ってる！？なんだ！？何が起きている！？」

「……やはり杉田先輩は私の生涯の敵のようですね……」

「俺、何もしてないよね！？ちよつと前にケーキを作ってきたただけだよな！？」

「しかも旨いやつをな」

「……いいでしょう。こうなったら料理勝負です！」

「は？」

「明日、各自で好きなお菓子を作って持ってきて、食べ比べて勝敗を競うんです！」

「ジャンルが違えば味比べなんてできんだろ」

「そこは気合いです！」

「……採点するのは？」

「嫌な予感がひしひしと伝わってくる。こういった時の俺の悪い予感によく当たるのだ。忌々しいことに。」

「もちろん先輩です！」
……やっぱり。

第九十六話 和

「第一回！」

「水泳部主催！」

「お菓子作り対決 っ！！」

「「「イエ イ！！！！！！」」」

……なんだこの異常なテンション……。

「第一回お菓子作り対決。司会は水泳部一年、松田がお送りします
！」

「解説は同じく水泳部一年、石井ですー」

「この勝負は次期マネージャー候補、古木さんと水泳部の誇る二次元オタクの代表格、杉田との戦いとなっています。この二人は、保育園の頃からの知り合いだということで、積もるものもあるのでしよう。特に古木さんの方は気合いが十分です！」

「ここ数日見ているだけでも、古木さんの執着心は、よくわかりますからね。いつも一緒にいる杉田への嫉妬心がこの勝負へと駆り立てたんじゃないでしょうか」

お前たちは一体何の話をしてるんだ？義人のお菓子作りの才能に嫉妬した保護者が、義人を越えるために勝負を仕掛けたんだろ？

「そして全く理解していない当事者、試食者にして採点者、みっちゃんだーっ！！！！正直ウゼーっ！！！！」

「「「ウゼーっ！！」」」

集団での言葉の暴力！？ひどい！！

「さあ、試合開始ーっ！！！！」

「「「イエ イッ！！！！」」」

……とはいえ、お菓子はもう作って持ってきてあるんだけどね。

「まずは先攻、古木さんのお菓子だーっ！！！！」

「「「おおおー！ーっ！……」」「」」
いちいち盛り上げていいから。

「私のお菓子、それは……わらびもちです……！」
「ほう」

「おおつと古木選手、和菓子で攻めてきたぞーっ！？解説の石井さん！この作戦はいいかですか！？」

「三井はあんな風ですけど甘党ですからねー。作戦はいい感じじゃないでしょうかー」

「そうですか！さあ早速試食に入ったみっちゃんの反応は！？」

「……旨い」

「やった！」

「反応は上々だ　　っ……！」

「では古木選手！調理法の説明をどうぞ！」

「片栗粉を水で溶き、レンジの弱で一分ずつ、取り出してかき混ぜる作業を繰り返します！それだけでわらびもちは完成します。きなこは大豆をすり鉢ですって砂糖を混ぜたもの、あんこは小豆から煮詰めて作ったものです！」

「意外とお手軽メニューだーっ！……きな粉もあんこも市販のものを使えばさらにお手軽！皆さんもぜひ作ってみよう！」

「……うるせえ。静かに食わせてくれ。」

「しかしこのわらびもちは旨いな」

「ありがとうございます！」

「きな粉ともあんこも相性が抜群だ。よくやったな」

「ふふふ、先輩……うれしいこと言ってくれるじゃないですか！」

「みっちゃんの古木さんへの好感度が上昇ーっ！……攻略の日は近いのかーっ！？」

「……攻略ってなんやねん。」

第九十七話 穴

「さあ盛り上がってまいりましたお菓子作り対決！」

「勝者の景品ー、三井の一日使用権は誰の手に渡るのでしょーかー」

「聞いてない！聞いてないぞそんな権利！？」

俺、売られてるのか！？しかも友人に！

「拒否権を！拒否権を要求する！」

「多数決ー。景品は三井の一日使用権でいい人ー」

「「「はい」」」

「全員一致で可決！？俺の拒否権は！？」

「多数決ー。三井に拒否権が必要だと思う人ー」

「「「……」」」（しーん）

「数の暴力！まあこうなると、薄々感づいてはいたけどね！」

「さあ、みっちゃんの一使用権は誰の手に！？」

「「「……」」」（ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ）

ああ！保護者のプレッシャーがひどい！保護者が勝ったら何をするかわかったもんじゃない！絶対に勝たせられない！

「大丈夫だ旦那。俺が勝つから何の問題もない」

「すごい自信だな。勝算はあるのか？」

「俺の作品を見ればわかる」

「作品？」

そう強調して出した義人のお菓子は、まさに作品と呼ぶにふさわしい、和菓子だった。

「……芸術作品みたいだな……」

「みたいじゃなくて芸術作品だ。和菓子もそうだが、菓子はまず目で楽しむものだからな」

「そういうものか。ただここまできれいだと、食べるのがもったいないな」

「食ってくれ。お菓子は食べてもらうことで初めて完成する」

「では失礼して……うむ、旨い。上品な味だ。中に入っているのはもちか」

「白玉団子のようなものだな。買うより作るほうが安い」

「旨いわ……これは。ただ、二人とも和菓子でかぶっちゃったな」

「そうだな」

「本当に杉田先輩って空気読めませんよね。可愛い後輩の意をくんでくださいよ」

「自分で言うことじゃないと思うんだけど!？」

「まあ、見た目、味では義人の方が上だったが、安さを含めて考えると互角でいいんじゃないか？」

引き分けなら景品はなし、ということでは落ち着いてくれるだろう。ナイスジャッジ、俺。大岡越前も俺の裁きに文句をつけられまい。

「……というわけで、景品である俺の一日使用权は……」

「二人に与える、ということだ」

「」「異議なし」「」

「墓穴を掘った!」

やっちまった! やっちまったよ、俺!

「旦那、俺の方は例の荷物持ちで」

「……またか」

まあ、義人のやらせたい事はだいたいわかる。よって問題なし。

いや、問題はたくさん(倫理的に)あるんだが。それより問題は

「……保護者、俺はお前を信じてるぞ」

不気味なほどにやけている保護者の考えていることがわからない。

お願いだから変なことはやらせないでね!?

「先輩、大丈夫ですよ。大したことさせるつもりはありませんから。

……ふへへへへへ」

何その笑い方!? 不吉! 物凄く不吉!!

「これにて一件落着」

「基はと言えば石井! お前のせいだろ!? 責任取れ!」

第九十八話 年号3

今日も世界史の補講である。全くもって休みの気がしない。かといつてサボるほどの度胸はないので、律儀に参加する俺は優等生に分類されると思うがどうだろう。

「ちゃっちらら、ちゃっちらら、ちゃっちららちゃらちららら」

なぜに水戸黄門のテーマで登場するんだ？この先生も大概謎である。

「じーんせい、楽しんで過ごすのさー」

歌詞違う！！何その自堕落した水戸黄門！？誰も救えないよそんなんじゃ！！

「さあ、今日も楽しい語呂合わせ年号暗記法を伝授しよう」

まあ、いいですけどね。

「618（ロイヤ）ルストレートフラッシュ！唐が中国統一」（618年、唐が中国統一）

トランプ関係ねえ！というより、その時代に存在すらしてねえ！！

「870（弥七、お）前のせいで……フランク王国分裂」（870年、フランク王国分裂）

弥七！？お前いったい何をした！？

「960（苦勞）して宋、中国統一」（960年、宋が中国統一）

まともだ！

「1019（遠いく）にまで刀伊の入寇」（1019年、刀伊の入寇）

まともだ！（パート2）

「1096（十字組む）遠征軍」（1096年、十字軍の遠征）

まともだ！（パート3）……さっきから同じセリフばっかだな。いいことだけど。

「1206（いー風呂^{ふろ}）求めてモンゴル統一」（1206年、チンギス・ハンのモンゴル統一）

移動民族がオアシスを求めて移動した……ということにしておこう。実際はどうか知らんけど。（適当）

「1215（畏怖^{いふ}、以後^{いご}）されない大憲章」（1215年、イギリスで大憲章成立）

逆に覚えないようにしよう。間違えそうだ。

「1368（遺産^{いさん}、ロハ）で相統。明が中国統一」（1368年、明が中国統一）

相統税なし！気前いいな明政府！

「1392（いざ国^{くに}）統一、李成桂」（1392年、李成桂が朝鮮を統一）

今回はまともなのが多いな。よきかなよきかな。

「1492（いよっ！国^{くに}）発見！コロンブス」（1492年、コロンブスが新大陸を発見）

何その掛声！？

「1498（いよっ！悔^{くや}）しい！バスコ・ダ・ガマ」（1498年、バスコ・ダ・ガマ、インド航路を発見）

だからなんなのその掛声！？しかも新航路発見したんだから、悔しくないだろ！？

「希望港と名付けたアフリカ大陸の先端に到達したものの、その日常的な悪天候を嘆く悔しさを表してみた」

意味あつたよ！そりゃ悔しいよなバスコ・ダ・ガマ！

「1517（以後^{いご}いな）くなる、ルターの宗教改革」（1517年、ルターの宗教改革）

いなくなっちゃ改革できねえ！！！！

「今日はこの辺で。ではまた次回」

……何の番組ですかこれは。

第九十九話 東海

「明日はついに東海大会か……」

「部長、お疲れ様でした」

「まだ終わってないから。明日は今までに培ってきたもの、すべてを出しつくすつもりだ」

「頑張ってください」

東海大会はその名の通り、東海の選手が集まって競う大会である。愛知県大会、静岡県大会、三重県大会、岐阜県大会の上位八名（リレーは八チーム三十二名）のみの限られた選手だけが出場できる。

そのため、この大会を目指して必死に努力する選手は後を絶たない。涙をのむ選手がほとんどだ。

「……なのはどうしてだよ……」

最初の種目、メドレーリレーを泳ぐ三重県の高校を見て、俺は言葉を失った。

「……こんな遅いタイムで……東海大会に出てるんじゃないよ……」
初めの組に出たリレーチームのほとんどは、北高の遅い選手四人で勝負したとしても勝てる、その程度のレベルだった。三重県や岐阜県は水泳のレベルが低い、未開の地なのかもしれない。しかしそれならば、しかるべき措置を取るべきだろう。愛知県では県大会にすら出場不可能なタイムの選手が東海大会に出ているなど、愛知県で死に物狂いで練習してきた選手を冒瀆している。県によって、東海大会の出場枠を変えるなど、方法はいくらでもあるのに……。

「まあまあ旦那、悔しがるなよ」

「……呆れてものも言えねえよ……」

あんなタイムでよくもまあ泳げたものだ。まあ俺が相手の立場で

も間違いなく泳ぐが。悪いのは選手ではなくて、この馬鹿げた制度をそのままにしているお偉いさん方だしな。

「……よし、気を取り直して応援だ」

「第三組目だから決勝は難しいか……静岡県は強いな。愛知の方が上だ」

「そんなところでお国自慢してどうする。レベルが高いから県では北高は入賞してないんだぞ」

「そうだな……そうだ、旦那！北高を三重県に移動させるのはどうだ！？上位進出間違いなしだ！」

「わーそれはいい考えだねー」（棒読み）

「真面目に聞けよ！？」

「聞く価値がないと判断しました」

「ひどっ！！丁寧語はやめようぜ！？」

その後の東海大会、北高はメドレーリレー十二位、浜ちゃんの自由形が二種目、十位（決勝進出）と十一位で終わった。全国大会は一定のタイムを切らないといけないため、北高での出場者はゼロ。しかし部長の晴々しい笑顔を見ると、悔いがないことがよくわかった。

お疲れ様でした、部長。北高水泳部は俺たちが継いでいくので、安心して見守ってやってください。

第百話 百話突破記念 勇者ミツイの冒険日記／邂逅編／

「朝ですよ先輩。起きてください」

「……おはよう保護者」

「今日から魔王退治の旅に出かけるんですから、早く着替えてください、見てますから」

「……早く部屋から出て行ってくれ」

「嫌です！」

> 保護者はミツイに襲いかかってきた！<

「沸点低っ！！そんなに敵に！？」

> 保護者の攻撃。核<

「グロいよ！？周辺の被害を考えろ！！そして俺、木っ端微塵になるわ！！！」

> ミツイは９９９９９のダメージを受けた<

「……強すぎる……」

> ミツイは力尽きた<

「おお勇者ミツイよ！死んでしまうとは情けない！」

俺もあんなことで死のうとは思ひもなかったよ。ひどすぎる。

そして保護者は強すぎる。奴を仲間に引き入れるべき……いやむしろ保護者自身が勇者として、魔王を倒しに行くべきだろう。間違いない。

「そなたにもう一度機会を与えよう！さあ、行くがよい！」

もう一度も何も、そもそも魔王退治になんて行きたくないんだが。誰か他の人……保護者とかに頼んでくれ。

「ふむ、不満なようじゃな……よろしい！そなたに三人の仲間を授けよう！」

それは助かる。俺は後ろで成り行きを見守る程度になるよう、強い仲間を希望する。

「例の三人を呼べ！」

> 三人の仲間が現れたく

・ 仲間 A ヨシト 遊び人

・ 仲間 B イシイ 遊び人

・ 仲間 C ケンゾウ 遊び人

「遊び人の割合高すぎだろ！？どんだけ遊びつくすつもりだこのパティは！？」

「では行け！ミツイよ！」

「行けるか！？こんなんで魔王退治なんかできねえよ！」

「……それでも結局旅に出させられるんだな……」

「まあいいじゃないか旦那。気軽に楽しもうぜ」

「そうだよー。慰安旅行だとも思ってたさー」

「温泉行きたいですね。温泉行きましょう」

……早くも遊び人の本領発揮ですかこの方々は。

> モンスター、シミズが現れたく

序盤から出てくるとは雑魚扱いか。清水、ドンマイ。

「うがー」

言葉さえも話せないとは。知性がほとんどない設定……清水、強く生きる。

> ケンゾウの攻撃く

おおさすが健三さん。空気の読めなさは天下一品だ。

> 教師も趣味でやっていますく

どんな技！？

> 9999のダメージく

強っ！勉強関連だから、清水にはクリティカルヒットだったのか。

……成仏しろよ。

「強いな、健三さんは」

「そりゃあそうだ」

「だってー、健三さんはレベル100だしー」

「遊び人のレベル100って一体何したらなれるんだ！？人生を遊びつくしたのかなのか！？」

「私は授業中でさえ楽しくなることを優先的に考えてますから最低だこの教師！」

「でもこれだけ強いなら健三さんに任せれば……」

「嫌ですよ。面倒くさい」

「世界平和のためです」

「自分の疲労の方が重要です」

最低だこの人！自己中の塊がここにいる！

「なら義人……」

「……」（携帯で2ちゃんねる中）

「……石井……」

「……」（ノートパソコンでニコニコ動画を散策中）

「……こんなまとまりのないパーティで魔王退治できるのか……？」

勇者ミツイの旅は始まったばかりである！

続く？

第百話 百話突破記念 勇者ミツイの冒険日記〜邂逅編〜（後書き）

百話です！……ということで番外編書いてみました。続くかどうかは未定です。

これからのこの小説について

こんにちは、作者のとりえなしです。この小説を読んでくださってありがとうございます。

さて、百話を突破したところで、読者の皆さんに質問があります。これからの>ええじゃないかについてです。

今までこの小説は、ほぼコメディで恋愛要素ほぼ皆無、文章の量が極端に少ない、小説と呼べるかどうか怪しいものとしてやってきました。文章の量については、作者の体力的にあれが限界なので勘弁してもらうとして、他の部分は改善ができます。そこで百話突破を機会に、読者の皆さんの意見を募りたいと思います。

今考えている案は三つ。まず一つは、>ええじゃないか二学期<として、これからも今まで通りギャグばかり恋愛要素無しで書き連ねていく案。ここでは文化祭、体育祭、新人体育大会などがメインとなります。

次に>ええじゃないか二年<として、新入生を出してラブコメ的展開を増やす案。ここでは保護者など、女子（腐女子含む）との絡みが多くなります。

最後の案は、百話記念のパラレルワールド（勇者ミツイ編）を書き進めていく案。ファンタジー好きにどうぞ。……とはいえ、コメディなのは変わりません。

この三つの案+あなたの意見（もっと健三さんを出せ！など）を評価、感想のところに書いて、送ってください。回答数がそこその量になったら、要望の多いものを書きたいと思います。したがって、それまでこの小説は無期限に休止（>ええじゃないかは完結）とさせていただきます。もし回答が集まらないようなら、この小説に需要がないものとして、書きませんので悪しからず。今日明日で集

まるようなら、すぐにでも書く（文章量は変わりませんが）ので、読みたいのならどしどし意見を送ってください。よろしく願います。

> ええじゃないか そのにく始めました。作者の別作品から移れます。もちろん>ええじゃないか<全体についての感想、評価、意見はまだまだ募集中ですので、ぜひ送ってください。読者のニーズが、作者にはわからないので……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5533d/>

ええじゃないか

2010年10月8日13時07分発行